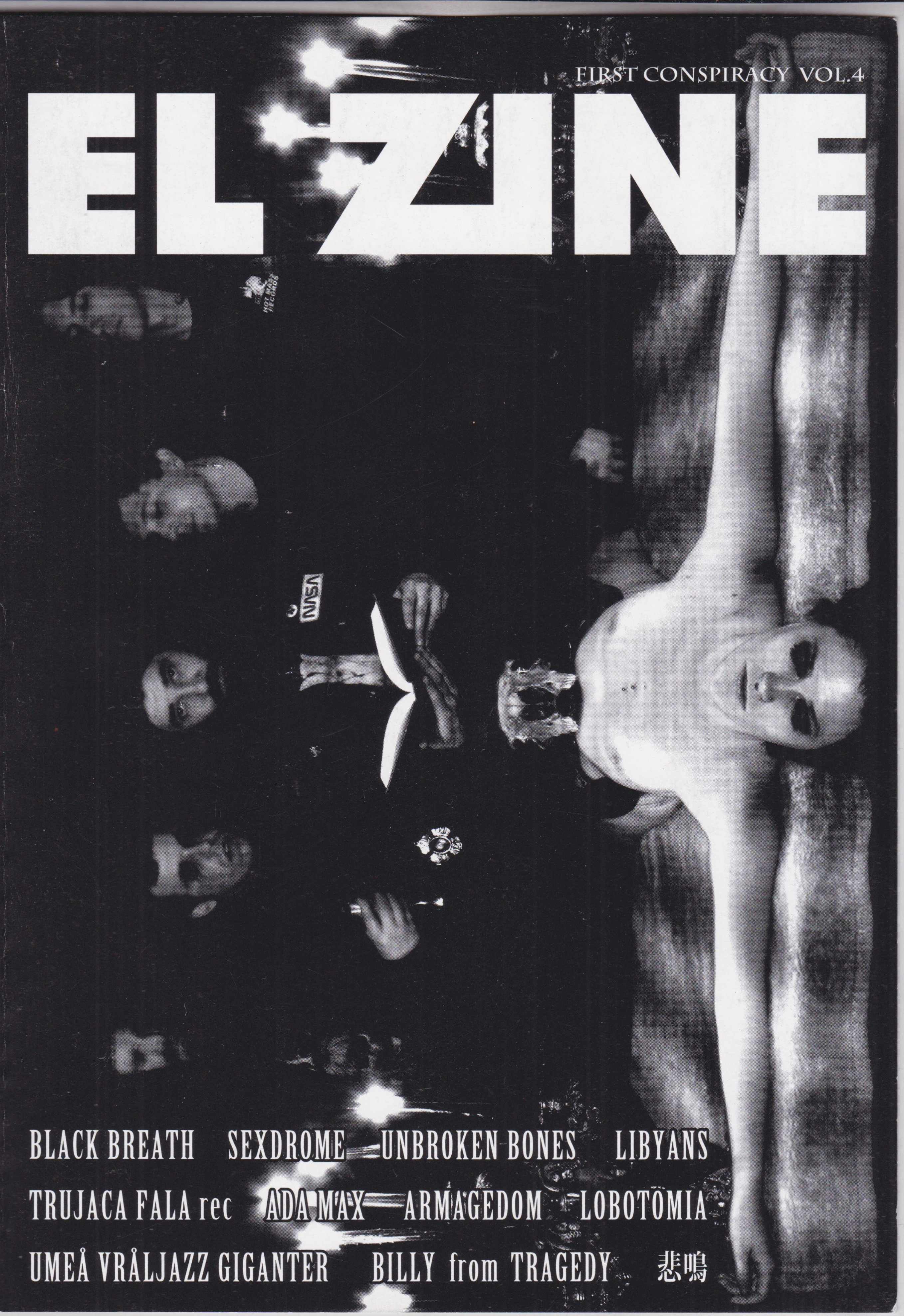
FIRST CONSPIRACY VOL.4

EL ZINE



BLACK BREATH SEXDROME UNBROKEN BONES LIBYANS

TRUJACA FALA rec ADA MAX ARMAGEDOM LOBOTOMIA

UMEÅ VRÅLJAZZ GIGANTER BILLY from TRAGEDY 悲鳴

Contents vol.4

P03 BLACK BREATH
P06 SEXDROME
P09 BILLY DAVIS FROM TRAGEDY/BRICKWALL RECORDS/PARTNER IN CRIME RECORDS/TRAUMA
P13 TRUJACA FALA RECORDS
P18 UMEÅ VRÅLJAZZ GIGANTER
P19 ADA MAX
P23 LIBYANS
P27 UNBROKEN BONES
P31 HIMEI
P33 SEX DEVIANTS
P35 PAPAGÁJUV HLASATEL RECORDS
P41 ARMAGEDOM
P45 LOBOTOMIA
P49 WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING - TRALL PUNK
P51 GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE
P53 THE THUNDERBOLT!
P55 SAKATA - RUIDE - NO - TOBBIKIRI - TAIDAN
P57 SATANIC OCCULT DEATH III/MAKING SOME COOL NOISE
P59 LASHING SPEED DEMONS
P61 KISS THE DISC
P66 EDITOR'S NOTES/BACK ISSUES



welcome to ERA →

BLACK BREATH

スウェーデンのSONIC RITUALのインタヴュー(Vol.2参照)をした際に、「最初はアメリカのBLACK BREATHっていうバンドとのスプリットになる予定だったんだ。だけど彼らはSouthern Lord Recordsと契約して、彼ら自身のフル・アルバムを作ることに焦点をあてていった」という回答があった。

…BLACK BREATHって誰?と、気になったので早速彼らのデビュー・シングル『Razor To Oblivion』を購入。
デスメタルの激烈さとロックンロールの爽快感とハードコア・パンクの攻撃性が合わさった文句なしに格好良い作品で、こりゃSouthern Lordも動くわな、と納得のデス・クラスト・ロックンロールだった。スウェーデンのDISFEARの近作なんかも彷彿とさせる鉄壁のクオリティも凄い。

間もなくフル・アルバムのリリースを同Southern Lordから控えているようだが(この号の発売とちょうど前後しそう)、待ちきれないのでインタヴューをとっとと決行した。CONVERGEとのツアーも決定しているので、今後は色んな媒体に露出しそうだし、他の奴(他誌とか)の手垢がつく前に…、俺が…、というのもあったり(笑)。
答えてくれたのはヴォーカルのNeil McAdams(NM)とリード・ギターのEric Wallace(EW)。エスプリとジョークが入り交じっていて、よく分からない発言もあるが、楽しんでもらえれば幸いです。



■BLACK BREATH以前にも何かバンドをやっていたよね?新人には、これだけ素晴らしいクオリティの音楽を作ることはできないと思うんだけど・・・メンバーそれぞれの音楽的なキャリアを詳しく教えて。

EW「ありがとう!メンバー全員とも10代の頃からいろいろなバンドをやってきたぜ。どれも小さいバンドで、友だちと地元のショーで演奏していたくらいだったが、中には何度もツアーに出たバンドもあったよ」

■BLACK BREATHはどんなふうに結成されたの?

NM「JamieとZackが地下にあるキッチンで働いていた時に、そこでCELTIC FROSTやDISCHARGEをよく聴いていたんだ。そこからこのバンドが生まれたってわけさ。レタスの地下室にな(※CELTIC FROSTの曲「Into the crypts of rays」に引っかけての発言と思われる)」

■バンド名のBLACK BREATHはREPULSIONの曲からつけたの?この名前をつけたのは?

NM「ワシントン州に歯ブラシ不足があってね。海岸中が少し毛深くなっちまったんだよ。ひどいもんだった。まあ、そんなこんなだ。REPULSIONの曲はバンド名にぴったりだと思ったのさ」

■『Razor To Oblivion』は完璧なデス・クラスト・ロックンロールだよ・・・信じがたいほどに素晴らしい!様々な音楽の要素を感じるけど、スウェディッシュ・デスメタル、D-beatハードコア、MOTORHEAD、POISON IDEAとかさ。

EW「なんだい、お前は徹底的に暴こうって気か。はっきり言っておくぜ、強烈に影響を受けたバンドは、BATHORY、CELTIC FROST、POISON IDEA、ENTOMBED、TERRORだ。それ以外にクソみたいなバンドも聴いているが、全く楽しんでいないけどな」

■メタルとハードコアって同じような音楽として捉えている?それとも別もの?どう思ってる?

NM「ヘッドバンキング」

■McAdamsの好きなヴォーカリストを教えて。君のヴォーカル・スタイルはパワフルで最高だ!

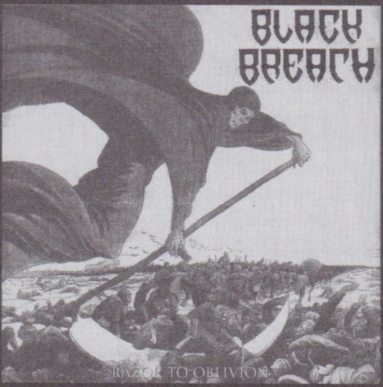
NM「ありがとう。絶叫は愉快だろ。好きなヴォーカルはLG Petrov、Tomas Lindberg、Matti Kärki、Rivers Cuomo、Pat Benatar、Mike Patton、それから・・・」

■曲はどのように作ってる?メンバー全員が曲のアイデアを持ち寄るのかな?俺は「Beneath The Crust」の一部分(1分10秒あたり)が特に好きだよ。猛烈にスリリングだ!

EW「たいていは、練習の時に誰かがリフや大まかなアイデアを持ってくる。それを曲に作り上げていって、みんなで完成させるんだ。俺たちも「Beneath The Crust」でデカいスリルを味わっているよ!」

■『Razor To Oblivion』は自身のレーベルからヴィニールでリリースしたんだよね?どうして?色んなレーベルがリリースに興味を示したんじゃないの?自分たちでリリースしたかった?

EW「あの当時、Hot Mass Recordsが莫大



な額の小切手を書いてきたのさ。他に興味を持ってくれるやつがいなかったから、自分のところで出すのが賢明だった。『Razor To Oblivion』を出した後に、Southern Lordが興味を示してきたんだよ」(※Hot Mass Recordsは自主レーベル)

■Southern LordからCDをリリースしたのは?最初にどうやって彼らを知ったの?彼らと組もうと決めた理由は?

NM「『Razor To Oblivion』のヴィニール盤をSouthern Lordに送ったのさ。彼らは"しまった、お前たちみたいなのがいたのか"と言うと、俺たちに会いにシアトルへと飛んできた。美味いディナーを食って、スゲェ夜をGreg(※Southern Lordの主宰者。SUNN O)))のメンバー)と過ごしたぜ。その後少しばかり酒を呑み、ジュークボックスから曲が流れている間に、ZackがGregとの賭けに負けたのさ・・・。いずれにしてもそれはSSDの曲だったかな。賭けは壮絶な争いだったぜ。だがZackが負けて、俺たちは契約にサインしたよ」

■ところで、SUNN O)))は好き?俺にとって、彼らは難しすぎるんだけど。

EW「彼らがいくつアンプを使っているか見たことがあるかい?あれをどうしたら嫌いになれる?!彼らは真剣なバイブを培養している」

■アートワークについても教えてよ。大鎌を持った死神の絵だけど、これって戦争の風刺画?有名な画家の作品?

NM「あれは昔のヨーロッパの新聞に掲載された、コレラの流行を描いた絵なんだよ。Hot Massのグラフィック担当がそれを意識して使ったのかは俺にはわからないんだけどさ」

■インナーにAlbert Pike(※作家、弁護士、軍人などの経歴を持つアメリカ人。フリーメーソンの重要人物。1809年に生まれ1891年に死去)の一節を引用しているよね(「Lucifer. the Light-bearer!…」)。どうして使ったの?理由を教えて。

NM「誰だ?Albert Pikeってやつは。俺の知っている限りじゃ、それを書いたのは俺だってことさ」

■間もなくSouthern Lordから1stアルバムがリリースされるよね。どんな作品になりそう?待ちきれないよ!!

NM「新作の『Heavy Breathing』はこの春に



強烈に影響を受けたバンドは
BATHORY、CELTIC FROST、POISON IDEA、ENTOMBED、TERRORだ
それ以外にクソみたいなバンドも聴いているが、全く楽しんでいない

Southern Lordから出る予定になっているよ。サウンドも歌詞の内容もさらにダークになっているぜ。この前に出した作品よりも邪悪度が増してるな。聴き逃すなよ」

■アルバムのレコーディングはどうだった？順調にいった？

NM「レコーディングの真っ最中、スタジオの中をコウモリの大群がぐるぐる飛び回っていたな。太陽の光が部分的に遮断されていて、それがますます俺たちの心を暗黒へと染め上げてくれたぜ。レコーディングは過激だったね」

■SONIC RITUALがSANCTUARY IN BLASPHEMYとスプリットLPをリリースしたけど、俺は138（SONIC　RITUALのベース）から"最初はBLACK　BREATHってアメリカのバンドがスプリット相手のはずだった"と聞いたんだよ。以前からSONIC RITUALとは知り合いだったの？

EW「SONIC RITUALを聴いて、彼らとレコードをトレードしたんだ。間違いなくクールなバンドだね。彼らとスプリットを作ろうってアイデアがあったが、『Heavy Breathing』の制作作業に取りかかっちまって、作ることができなくなってしまったんだよ。うまくいけば将来、彼らとショーで共演したり作品を作ることになるだろうよ」

■シンパシーを感じる素晴らしいバンドはいる？君らは単なるメタル・バンドではないし、単なるハードコア・バンドでもないよね。

NM「自分たちがプレイしたいと思うものはどんなものでもプレイする。ある一つのサウンドのこともあれば、別のサウンドをやることもある。それが怒り狂っている限り、問題はないだろ？必死でやっているいいバンドにはシンパシーを感じるぜ」

■5月にはCONVERGEともツアーをするよね。どんなツアーになりそう？何度もツアーはやっているの？

EW「俺たち全員、ツアーを心待ちにしているんだよな。CONVERGEは素晴らしく見事な新作を出しただろ。その全曲をライヴで聴くことができると思うと狂喜する。CONVERGE、それとLEWD　ACTSとで３～４週間ほどショーをやることになるだろうよ。ツアーの最中にはCOALESCE、GAZA、HARVEY　MILKとも共演するよ。家にたどり着く前に、アメリカ中を廻りながら40回ほどショーをやることになるはずさ」

■アメリカの政治をどう考えている？問題視している社会問題とかはあるの？

NM「俺たちがバンドをやり始めた国はどこだ？ここがクソだからだろ。全てが最悪極まる。ヘッドバンキング」

■くだらない質問だけど、パンク/メタルのファッションに興味はないの？弾丸ベルトとか鋲とか、黒い服とかさ。

EW「パンクやメタルのファッションには猛烈に興味があるぜ。だが、あまりにもクールに見せようとする余裕があり過ぎて、壊れきっているんじゃねぇかな。それから、ここじゃ、スタッズ・ベルトみたいなパンクの装飾品を見つけることはできないぜ。ネルシャツと長ズボンを売っている店ばかりだからな」

■ところで日本のハードコアからの影響ってある？日本のバンドで好きなのは？

EW「日本にはクールなバンドが多いね。BASTARDはテキサスでショーをやるよな。その最中、俺たちはイーストコーストにいる頃なんだよ。見たくて堪らないんだけど・・。CROW、G.I.S.M.、ACID MOTHERS TEMPLE、SOB・・・。できるなら、いつの日か素晴らしいバンドたちと共演しに日本に行きたいな」

■これからの予定や目標は？

NM「首の痛み、タダの夕飯、様々な国でのショー、さらなるレコード・・・。『Heavy Breathing』がリリースされる日を迎えるだろうよ。だが、もっとツアーに出るのははっきりしているし、ツアーの後にはすぐにレコーディングに入ると思うよ」

■日本の読者にメッセージをお願い。どうもありがとう！

NM「"スーパー・チューハイ"を送ってもらえるか？ヘッドバンキング、キック・アス、おやすみ、ジャパン！」

EW「愉快な質問をありがとな。じゃあまたな」





デンマークの狂気

SEXDROME

セックスと拷問、結局のところ、この2つはそんなに違わない

音源を紹介する際に、"ヤバイ"とか"キケン"という表現がよく見られます。僕は今までイマイチその感覚が分からなかったのですが、デンマークの尖りまくった新鋭、SEXDROMEの1st 7"を聴いて理解出来ました。午前3時くらいに部屋を真っ暗にして爆音でかけると、良い具合に大脳皮質が刺激されて地獄が見えてきます。音楽による暴力と狂気と支配。パンクが持つ粗暴性のみを拡大増幅させたのが、このバンドとも言えるでしょう。危ない方向に突き抜けています。案の定、インタヴューの回答もクセがありましたが、こんな音を出す人間が優等生発言をするわけがありません。友達には間違ってもなりたくないですが、注目し続けたいバンドです。客と喧嘩しているライヴ映像も見ましたが、全く強くないところ(逆に殴られている)もポイント高いです。1st 7"は既に入手困難だと思いますが、今後は新譜が予定されています。発言は、全てバンドとしてのものだそうです。

■まずは結成の経緯を聞かせて。SEXDROME以前の活動についても。

「Alexander(ギター)にAnton(ドラム)、Loke(ヴォーカル)とでコペンハーゲンのベンチに座りながら、ディスカッションしていたんだ。俺たちが結成を画策しているバンドのベース・プレイヤーは誰がいいかってな。Bo(ベース)のことは知っていたし、あいつは実際、ARRIGT ANTRÆKっていうハードコア・バンドでベースを弾いていた。俺たちはあいつを呼び出して、加入したいか尋ねたんだ。そしたら最初は断ってきてさ、でも、"頼むよ"って言ったらすぐにあいつの気が変わった。そんでPRUNEFACEってもっとハードコアっぽいバンドを始めて、デモ・テープを作ったんだ。でも音楽的な焦点を変化させたからそれは長続きしなかった。AlexanderとLokeはWOMANHEADってバンドもやってて、AntonとBoの2人もその客だったんだ。WOMANHEADは10代による実験的なバンドでさ、モノをぶっ壊してばかりいた。ステージで喧嘩したり、人間のクズみたいなもんだな。LokeはPosh Isolation(※SEXDROMEの1st 7"をリリースしたデンマークのレーベル)にも関わっていて、色んなノイズやらインダストリアルのプロジェクトとも関係があったし、おまけにソロ・プロジェクトでLRってのもやっていた。BoはARRIGT ANTRÆKが7"をリリースする直後までやってたけど、それからはOdilonて名前でフォーク・ミュージックを始めた。AntonはHARASSERというスローでAmphetamine Reptile(※MELVINSなどをリリースしているアメリカのレーベル)みたいなハードコア・バンドだった。HARASSER自体は注目すべきことを何一つとして成し遂げちゃいない」

■例えば、GORILLA ANGREBやNO HOPE FOR THE KIDSのメンバーがストーナー・ロックンロール・バンドのMOONLESSをやってたり、THE ASSASSINATORSのドラムのAndersがUNDERGANGってデスメタルをやっている。それって僕は凄く面白いと思うんだけど。BoもARRIGT ANTRÆKのメンバーだったし。そういうのは、何か大きなターニング・ポイントがあったの?自然と?

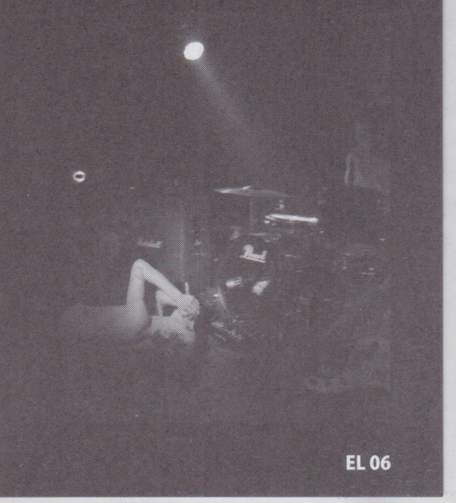
「そういうことをやっている奴らにとって、ジャンルというものに焦点を当てることは重要じゃないんだよ。俺たちは自分たちについてしか言えないけど、SEXDROMEは全然ジャンルを定めちゃいねぇ。俺たちは音楽をやっている。パンク・ミュージックの攻撃性とエナジーを増幅させ見極めようとしている。それでも、俺たちにとっては音楽をやっているってことが重要だ。過去なんか全然関係ねぇんだよ」

■SHITLICKERSを10代の時に初めて聴いた時くらいに、物凄い衝撃を受けた。全然君らとは違うサウンドだけどね。けど同じような衝撃だったよ。7"では、ロウであることやノイズは意識したの?それとも無意識に?これは現時点での、僕の今年のベスト7"だ。

「ノイズとクソは音楽におけるワンセットだからな。SEXDROMEみたいなバンドのレコーディングにとって、お上品なプロダクション技術なんてエナジーが削がれるだけだ。プロツールやクリーンなプロダクションによって、良い音楽が完全に台無しにされた例はたくさんある。これは俺たちの曲がどのように響き、俺たちの道具がどのように響くかということだ。一切オーヴァーダブを用いずに一発録りで、殆どの曲がファースト・テイクだった。お前が7"を好きなのは嬉しいよ」

■ex GORILLA ANGREB etcのPeter J. Bonnemanと一緒にレコーディングしたの?どうして?

「ああ、Peterと一緒に録ったぜ。彼はLOVE POTIONのデモ・テープを録ったし、どう録るべきかということに関しては良いセンスを持っているから、彼のことを思いついたんだ。俺たちが持っていない4トラックのレ





コーダーも持っているしな」

■レコード・ラベルのA面にある絵って拷問図?なんでこれを選んだの?

「あの絵のオリジナルはマルキ・ド・サドの「ジャスティーヌ」なんだ。セックスと拷問、結局のところ、この2つはそんなに違わないだろ」

■歌詞についても聞きたいんだけど、性的な印象が感じられる。実際はどう?

「全てにセックスがある。男にとっての初めての呼吸は、最初の性的絶頂みたいなもんだ」

■どうして英語を使おうと思ったの?デンマーク語よりも君の強烈で邪悪な叫びには英語の方が合う?

「結局は、コミュニケーションだ。デンマーク語でやるよりかは、英語の方が幅広いオーディエンスとの意思の疎通が可能となる」

■SEXDROMEとは"パンク・ミュージックをプレイするバンドだ"と自分で言っているけど、ブラックメタルとかの影響もあるんじゃない?あくまでもSEXDROMEはパンクという意識?

「インタヴューの最初でも言ったけど、SEXDROMEはいかなるジャンルとも、結びつこうとする意志はない。人間は異なったバックグラウンドと全く違った考えが複雑に入り組んでいる。ベーガン・フードとフェミニズムの別名になっちまう前の、粗暴な音楽こそがパンクだ。パンクのエナジーとブラックメタルのロウなところには、明確な関係性がある。多くの背景からインスピレーションは得ている」

■「Mystery Machine」はデモ音源?どんな作品だったの?聴きたいんだけど…。

「2008年のデモ・テープが「Mystery Machine」だ。かなり酷いんだが、完売している。オリジナルのリリースは30本限定だったから、既に一回リプレスしているが、コペンハーゲンで売っただけだった。将来またリプレスされたら、こいつ(victorpalsby@hotmail.com)から買うことができるだろう。お前の友達にも伝えとけよ!」



■デンマークのオーディエンスの反応はどう?Lokeが客と喧嘩しているギグの映像を見た。素晴らしかった、そしてイカれてる!

「コペンハーゲンの奴らはメチャクチャ呑むんだ。喧嘩やモッシュはライヴにおいて必要なもんでもないし、俺たちはそんなこと意図しちゃいない。しかし、そう言われると、俺たちのショーには始めから衝突があった。俺たちが起こしている揉め事は強烈なエナジーのためだし、喧嘩は分かりやすいその結果でもある。喧嘩になるのは当然だ」

■どんなバンドと一緒にやっている?メタルかハードコア?両方?

「両方だし、もっとだ。俺たちは幅広く異なったジャンルのバンドと一緒にやっている。ショーをするのに同じジャンルのバンドに固執する気なんて全くない。コペンハーゲンは小さな都市だし、本当に良いバンドは少ししかいない。俺たちが優先しているのは、もちろん一緒にやって楽しめるバンドかどうかだ」

■もっとパンク/メタルなファッションをしているかと想像していたんだけど、そんなのには興味ない?

「俺たちは着飾ったりしねぇんだよ」

■どうして今作は300枚プレスだったの?僕は日本だけで300枚以上売れると思うけど(…多分)。Posh Isolationの方針?

「俺たちの需要ってのを知りたいとは思っていたけど、300人以上の人々が、俺たちのレコードを買いたがっているなんて思ってもみなかった。実際、俺たちは在庫の山を永久に眠らせておくことになるんじゃないかと考えていたんだが、一気になくなっちまったな、ハハハ。日本で300人以上が欲しがっているのなら、俺たちはすぐに再プレスするぜ!」

■政治と音楽の関係についてはどう考えている?君らにとっては全然関係ないって感じかな?政治的なバンドじゃないと思うし。





ベーガン・フードと フェミニズムの 別名になっちまう前の 粗暴な音楽こそがパンクだ



「その通り!音楽に政治的な意見を取り入れるという増加中のトレンドにはウンザリだし、そんなもんクソだ。歌詞で政治的な問題について書くよりも、もっと重要なことがあるだろ。個人の意見ってのは、一般的な政治的見解なんかより常に興味深い。政治的なのと関わっているパンク/ハードコアの奴らは、そのことを知るべきだ。世界がロクでもないことを確認したけりゃ、テレビのチャンネルを代えてみりゃいいし、パンクのシングルを300枚リリースしたところで、何も変わりゃしない。政治的見解と個人の考えを区別することが非常に大切だ。政治的な考えをまるで個人的なことみたいに表現することは出来る。政治とは普遍的だ。だが、個人的な見解がもし多くの人々の賛同を得たとしても、それは普遍的なものには決してならない。個人的な問題を表現する時に真相は多少なりとも隠蔽される。自分個人の真実を述べるべきなんだ!」

■最近のお気に入りのバンドを教えて。デンマークのパンク/ハードコア・シーンを君らはどう見ている?

「それぞれ5バンドずつ挙げていく。

Alexander :
ALAN VEGA、FRANK ZAPPA、DEATHSPELL OMEGA、PESTE NOIRE、GUNS N ROSES。

Anton :
GERMS、JOHN JACOB NILES、NECROS、JOY DIVISION、VOID。

Loke :
SISTERS OF MERCY、G.I.S.M.、ABSURD、BRUCE SPRINGSTEEN、BONE AWL。

Bo :
16 HORSEPOWER、RICHARD & MIMI FARINA、SWING KIDS、CRASS、BRIGHT EYES。

最近のデンマークのパンク/ハードコア・シーンは、復興が起ころうとしているように感じられる。けど、俺たちには関係ない。現在最も興味深いコペンハーゲンのバンドは間違いなくICEAGEだ」

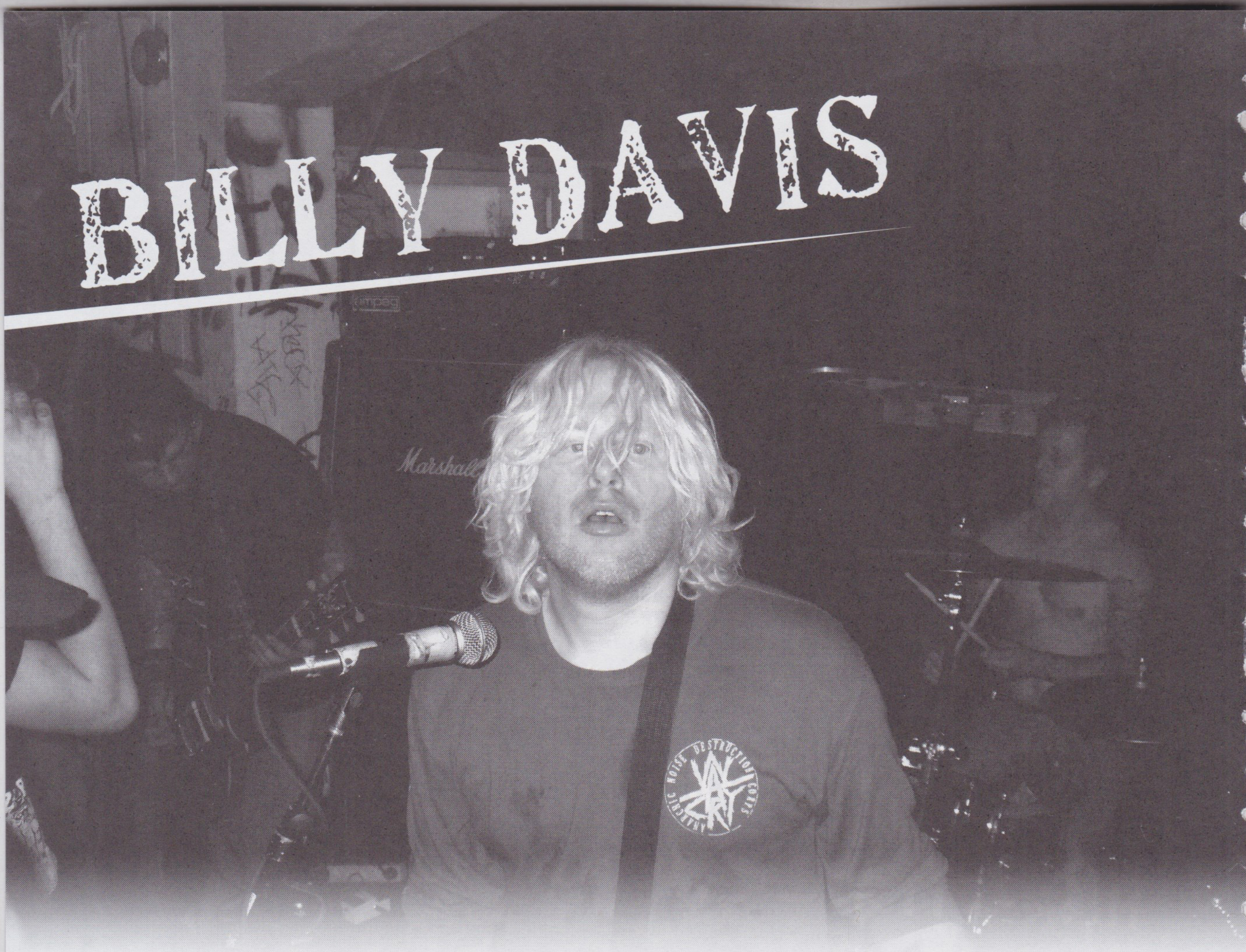
■今後の予定?

「最近8曲ほどレコーディングしたんだ。連絡をとっているアメリカのレーベルからそれがレコードですぐにリリースされたらいいな。詳細はもうすぐ分かるはずだ!」

■読者にメッセージを。ありがとう!

「ジャパン・ツアーを企画してくれ + Fuck is womens money!」

BILLY DAVIS



FROM TRAGEDY BRICKWALL RECORDS PARTNER IN CRIME RECORDS TRAUMA

米国DIYハードコア・シーンが誇る"TRAGEDY"のヴォーカルでありベーシスト、"BRICKWALL RECORDS"のオーナーであり"Partner In Crime Records"を主宰し、最近ではTRAUMAにて活動するポートランド・ハードコアのやさぐれ野郎。BILLY DAVISに彼の半生を語ってもらいつつ、彼の熱い将来への展望を聞いてみた。

INTERVIEWED:Souichi(UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX)

■生まれはテネシー州だよね?故郷はどんな町?

「そう、俺はアメリカ南東部のコーヒータウンで知られるテネシー州のタラホーマっていう田舎町で生まれ育った。場所的に州の真ん中に位置しているね。昔からとても保守的な所で、町の周りは農場と小さい町工場ばっかりだし全て2階建ての家しかないようなど田舎町でさ、とても閉鎖的な環境で育ったよ」

■君は若い頃はどんな子供だったの?聞き分けの良い子供だった?また学校を卒業してから何をやってた?

「自分の若い頃に関して言えば、バンドをやる前はスケートボードばっかりやってた。部屋にスケボーのポスターを貼ってたり専用の服を買って自宅の庭にランプ作ってたり。それは俺にとってすごく反抗的なサブカルチャーとしてのものだった。実際、全てに反抗してたしね。それに引き付けられる事は凄く自然な事だったと思うよ。ToddとPaulと知り合ったのも14、15歳位の時だった。実際、俺は学校では問題児だったね。パンクの格好をしてたのも俺達位しか居なかったし。それで高校卒業後にメンフィスに引っ越したんだ」

■その時、影響を受けたバンドは?

「記憶が定かじゃないけど、やっぱりD.R.I とSUICIDAL TENDENCIESには本当に影響を受けたと思う。あと好きだったのは、MISFITS、MINOR THREATやBLACK FLAGとか。同時期にはMETALLICA、SLAYER、EXODUSなんかも聴いてた。親父がBLACK SABBATH、KING CRIMSON、PINK FLOYDとか好きだったからさ。親父は素晴らしいドラマーでもあったし家には腐る程レコードがあったよ。俺がギターで最初に弾いたのはBLACK FLAGの"NERVOUS BREAKDOWN"だったな。ちゃんと弾けてたかは別として(笑)」

■最初に始めたバンドは?

「初めてライヴをやったバンドとしてはHAPPY DEATHという名前だった。その当時の周りのハードコア、パンク・バンドはGRATEFUL DEADとかによく使われていそうな言葉からバンド名を考えてたんだ。88、89年位のハードコアのカヴァーをやってて、ToddとPaulの部屋でよく練習してたよ」

■君は色んなバンドをやってて、最近では

TRAUMAでギターを弾いてるよね。ベースとギターどちらが好き？あとツアーかニュー・リリースの予定は？

「TRAUMAは俺とToddがFINAL WARNINGのシンガーであるJeffとNERVESKADEのJakeとで始めたバンドなんだけど、そこでは俺はギターも弾きたいし、Toddにはドラムを叩いて貰いたかったんだ。DEATHREATの時の彼のドラムが大好きだからね。9曲程デモ・テープ用にStan(DEATHREAT、ARCTIC FLOWERS)のスタジオで録ったんだ。皆にも評判良いし。いずれは7インチで出したいと思っているけど。あとベースよりギターの方が好きかって?実は俺は10代の頃からずっとギターを弾いていたんだぜ。でも誰もベースを持ちたがらなかったから俺がベースを弾き始めたのさ。ベースもギターもプレイする事は大好きだよ」

■今までDEATHREATとかFROM ASHES RISEの再結成の話はなかったの?(＊この質問を送った直前、FROM ASHES RISEのリユニオン・ショーが行われた)

「今迄無かったんだけど偶然にもついこの間にFROM ASHES RISEのショーがあったんだ(笑)。5年振りの事だったしショー自体は凄く良かったよ。でも、もうやらないかな。DEATHREATは正確には解散はしてないんだ。長い間やってなかったけどね。最近スタジオにも入ったんだ。新曲を作る話も実はあるし。タイミングが合えば、ね」

■そういえばDEATHREATはメンフィスのバンドだけど、そもそも何でポートランドに引っ越そうと思ったの?TRAGEDYを結成するという事は、その時から頭の中にはあったの？

「HIS HERO IS GONEが解散した時に皆、メンフィスを離れたかった。あと個人的な事情もあった。ToddとPaulと俺は一緒にヘヴィーなハードコアをやりたかったし、また色んな曲のアイデアが出て来てたんだ。そしてそれをプレイするのは、HHIGではないとかね。Yannickはその時モントリオールに居たんだけど、彼自身も西海岸に引っ越す事に賛成してくれたし、彼も新しいバンドをやりたがってたから、それで西海岸に引っ越す事に決めた。俺達自身も変える為に西海岸行きを選んだんだけど結局、カリフォルニアではお金が掛かりそうだったし。ポートランドには何人か知り合いもいたから、そのままそこに決めたんだ。俺達は長い間、全員同じ家に住んで、毎日練習してたな。今考えるとどうやって生きてたのかと思うけど(笑)」

■数年前のTRAGEDYのヨーロッパ・ツアーでのとあるイベントで、2万人のお客さんを動員したとのものすごい噂を聞いたけど。

「忘れたなー(笑)。多分でかいイベントか何かじゃなかったかな。普通のパンクのイベントではないよ。俺達は50人の前でプレイする事もあるし、2000人の時もある。まあ客の多い少ないはプレイする事には全く関係ないんだけどね。TRAGEDYでプレイする事は自分自身の事でもあるし、全てのショーでいつも最後と思ってやってるよ」

■TRAGEDYは今では世界的に有名なハードコア・パンク・バンドの一つに挙げられる様になった事は周知の事実として、昔は沢山のバンドがトラジティ・クローンと呼ばれる程に増殖してたけど、所謂ハードコアのジャンルの内の一つとしてトラジティ・スタイルが確立されたと思ってる人達も居る。それについては？

「それは本当の所、君等の視点に依るものだと思うね。俺にとっては俺達が受けた影響は何処からきているのか知っているけど、他の人達にとっては違ってくるものだろうし、トラジティ・スタイルっていうモノも本当は無いのかもしれない。俺達は皆色々な違った影響を受けるものだろう、そこで生まれたものが似てくるのも当然あるだろうし、たとえ俺達が全く違った音を作り出しても、それもトラジティ・スタイルだよね。まあ他のバンドでも俺達に影響されたのもあるかもしれない。俺達も当然自分等より以前のバンドには影響受けているし、それはごく自然な事と思うよ」

■君は数回ツアーで日本を訪れているけど日本について感じた事、また日本のハードコア・シーン、パンクスに対しての率直な印象を聞きたいんだけど。

「そうだね、最初に日本へ行ったのは、DEATHREATでのツアーだった。1999、2000年位だった様に思う。一般的だけど、最初の印象は菜食主義というものが日本ではまだあまり認知されていなかった様に思ったし、日本のパンクスには菜食主義者があまり居なかった様に思ったね。だから日本でヴェジタリアン・フードを探すのには苦労したよ。でもすぐに俺達が食べられる物も見つかったし問題なかった。ただちょっと混乱していたんだ。シーンの境界が、どんな音楽をやっているかによって決められている事とかね。それは、いわゆる日本のDIYバンドが俺達に示した事柄が、俺達の考えてるDIYでなかったのに、何で俺達と一緒にプレイするのかって事に悩んだ事もあったね。でも日本のバンドのサウンドのクオリティはものすごく高いし、俺達が観たバンドはもちろん全て





素晴らしかった。そんなところが日本を最初にツアーして思った事かな。そうそう、あと昼の3時か4時位にサウンドチェックっていうのには慣れるまで時間がかかった事だね。今はもうそれにも慣れたし問題は無いよ。ライヴハウスの作るサウンドは何時も素晴らしい。日本をツアーするのは大好きだし、そこでの経験は素晴らしかった。自分等の国と違いはあるけど後は良い意味での違いだと思う。皆フレンドリーだしね。俺が日本語をもっと話せたらいいのになと何時も思うよ。そうすればもっと分かり合えるのにって」

■話しは変わるけど何時からバイクに興味持ち始めたの?

「子供の時からバイクには凄く興味があったけど、親父がバイクを持つ事に反対していたんだ。それが更に興味を持つきっかけになったんだ(笑)。Paulが俺達の中で一番最初にバイクを買ったのかな?確か。バイクっていうのはね、乗ると後なんか振り返らないから。前を見るのみさ。そういう所が好きだ。それから沢山のバイクに乗ってたよ。最初のバイクがHONDA 73年製のCB350で、2番目が75年製のHONDA CB550 fourだったな。両方とも大好きだ」

■今どんなの持ってるの?

「まだ少しは持ってるんだけど、BMW R100RSは普段乗ってて、あとCB750が数台、70年式のCB400 fourが3台、72年式のツインのCB350に60年式のBSAとかね。色々ね」

■それはすごいな。日本でもそんなに持っている奴はそうそういないよ。一番好きなバイクは?エンジンは空冷がやっぱり好きでしょ?水冷とかは?

「持ってる中でベストは、HONDA CB750、CB400 fourのこの2台だね。もちろん空冷だよ。Toddは75年式のGOLDWINGを持ってたよ。それは水冷だったけどね」

■君達がやってるバイク・チーム"DOOMTOWN RIDERS"について教えてくれるかな。

「DOOMTOWN RIDERSはポートランドのパンクスで作られたバイク・チームで、友達同士で作ったチームなんだ。皆でバイク・ショップやスタジオを共同で経営している。DTR(バイク)をジャケットの背中に描いて皆で街を走って、皆でBARとかに行くんだよな」

■日本の皆は君がバイクで事故って足と膝を痛めた事については当然知ってて、皆その後どうなったのか心配してるんだけど。

「俺の膝はガタガタだよ。もう3回手術したんだ。後々にもう1回再手術するだろうけどね。毎日痛むけど幸運な事になんとか歩けるし、まだ音楽は出来るからさ。何が起こったかって?単純な事だよ。交差点で赤信号なのに車が突っ込んで来た。相手は俺が見えなかったらしく、そのままドカン」

■それは本当に気の毒な事だ。膝の全快を願うよ。ところで昨今のフリー・ダウンロード・サイト関連についてどう思う?

「俺はヴィニール・コレクターだからね。もし最初に作品をMP3で聴いてもその作品のレコードを買いに走るだろう。こっちでもフリー・ダウンロード・サイトについての議論はあるけど、どっちもどっちって感じだ。時代の流れだとも思うしね。勝手にダウンロード・サイトに載せられて曲を盗まれるという現状は不幸な事であるし、これはより深い社会的含みがあることだと思うね。人々が手軽に音楽を手に入れる事が出来る現状に慣れきってしまっている事も」

■君がやっているBRICKWALL RECORDSの経営は上手く行ってる?

「ここ数年は何とか上手くやっているよ。他のレコード屋に比べてもね。今はこの国も不況だから店を閉めてる所も沢山あるし、仕事を探すのも難しい。BRICKWALLはなんとか生き残ってるけども。でも、いつ迄続くかね。もうこの仕事を7年やってるんだけど、レコード屋には正直、未来はあると信じたい。昔みたいにはならないだろうけど」

■聞いた話によると、最近フライングVのベースを使ってるって本当?

「はは。グレコのVを買ったんだ。フライングVは好きだし昔のグレコは好きなんだけど、まだステージでは使った事無いけどね。あともう1本買いたい。アイバニーズかギブソンオールドか。今は金がないから買えないけど」

■うん、フライングVは俺も好きだ。しかしオッサンになってもパンクスでいる事は時として大変だと思う?

「人間、年を取ると人生の色々な事に対して上手く立ち回って行かなくちゃならない時もあるからね。俺はそういうものを無視し続けて来ているけど、なかなか難しい」

■そっちのパンクスもやっぱり年取ったらバンド辞めたり、レコードとか買わなくなったりするの?

「よくは分からないけど、こっちの大半のパンクも年取ったらそんな事に興味が薄れてきてるよね。大体そうなると昔の音源ばかり繰り返し聴く様になる。新しいバンドの音源とかは聴かなくなるね。年取っても音楽には貪欲であるべきだと思うよ。また皆はレコードとかを買うより他のモノに金をかける事に価値を見出してたり。日本とヨーロッパへツアーに行った時は驚いたね。俺の好きなバンドは皆オッサンだって(笑)。アメリカとは全く違う事は、バンドをやっている殆どの人間は10代から20代だからさ。ヨーロッパや日本は30、40代でもまだ現役でやってるバンドもザラにいるものね。現在のこっちのシーンもちょっと変わって来ていて少なくともポートランドに関して言えば、なかなか面白い事に、殆どのパンクスは15年〜20年前から活動しているけど未だにプレイし続けていて、ショーにも頻繁に訪れる。ハードコア・パンク創世記から居続けている人達も沢山いるよ。FINAL WARNINGのJeff PaulがTRAUMAのシンガーだし。彼はこのシーンに1982年からいるんだからこれは凄い事だ。人間は年齢を感じた時に年を取るのだろう」

■ツアーでそっちに行った時にツアーメイトとして色々とお世話になってたし、君達のホスピタリティーには感謝してる、ちょっとモメた時もあったね(笑)。本当の意味でのDIYというのを分かった気がするわ。そこで感じた日米双方のPUNKSのいわゆる「違い」ってある?

「俺は南部のパンク・シーンで育ったから不便だったが故に、DIYという事の有り難みを学ぶのに時間はかからなかった。なぜなら、バンドがツアーに出たいとしよう、当然ツアーをヘルプしてくれる友達のバンド、企画してくれるプロモーターを探さなきゃいけない。で、自分の地元に来るツアー・バンドはケアされるだろうし、ショーを企画して持ちつ、持たれつの関係が出来上がる訳でね。それもパンクス達だけでね。全てをやる。そういう事の繰り返しで自分達もやって来たんだ。皆でやらなければならない事だったんだ。それは全て友情からきていたものだから。今みたいにインターネットも無いし、ましてやFaceBookもない時から、それに今も自分の考えは何一つ変わっていない。日本に初めて行った時も、俺達は沢山のバンドとツアーをサポートしてくれた皆とも友情を分かち合う事が出来た。で、その後に皆には報いたいという気持ちがあったので、日本のバンドがUSツアーするんだったらどんな感じかをアドバイスしたりした。出来るだけの事はしたいと思っていた。今までこっちでツアーしたいと思っているバンドは沢山居るけど、コネクションが無いばかりに実現不可能だったりする時もあったから。その時、コンタクトを取っていた人達の殆どが英語をあまり理解してなかった様だったし、俺も日本語を理解できないからね。BASEのToshio Iijimaが日本での最初の友達だったよ。色々お世話になった。あとErica(BOY)。俺が日本のバンドにコンタクト取りたかった時に、Satoru(BOY)にも助けてもらった。そして俺がアメリカに招待した最初のバンドはASSAULTとDSBだった。ASSAULTとはFROM ASHES RISEで１ヶ月間のツアーを共にした。彼等は毎晩最高だったな。あと何が違いかってことだっけ?それはよく分からないけど。アメリカのツアーのやり方は日本と全く違うからね。こちらは何時間も車に乗り続けて、ショーに行ってもPAの音は糞みたいだし、休みは無いし、地下室や家の部屋でやる事もあるし。日本のバンドは毎晩素晴らしいショーをやってくれた。どんなコンディションでも文句言わずやってくれたし、そのツアーで学ぶべきものが数多くあった。異文化交流かな。お互い少しずつだけど分かり合うという事。毎回学んでいるよ。でもそのおかげで沢山の友達が出来たんだよな」

■それは君たちとツアーに行った日本のバンドの人間も沢山学んだ事があるよ。因みにPartner In Crimeからのニュー・リリースとかある?またTRAGEDYとか?

「PICはまだ存続しているけど今はちょっと休んでるね。TRAGEDYはいくつかのレコード・リリース用に新曲を作っている所だ。良い曲が出来る事を願うよ」

■TRAGEDYの曲は主に誰が作っているの?

「基本的には4人でアイデアを出し、皆でリフも作る。歌詞は俺とTodd。俺達は変更があると全て4人で意見を出し合うし、アイデアだけは沢山出すからね。それを整理して順々に作り上げて行くんだ」

■海外ツアーの予定は??

「希望としてはオーストラリアに今度は行きたいね。もちろん日本もヨーロッパも行きたいけど。確実にニュー・アルバムをリリースした後にはツアーに出ようと思ってるよ。俺達がまだ行った事のない場所も沢山あるからね」

■本当に日本へはいつか来るの?

「そう願うね。日本に今一度訪れて沢山の友達にも再会したいよね。しかしまあ、最後に訪れてから随分経つ」

■日本の新しいバンドとかは最近知ってる??精力的に活動しているバンドも沢山居るけど。

「正直、かなり忙しい日々がずっと続いてたから、あまり分からないな。なかなか新しいバンドをチェックする暇が無かったんだ。個人的にはALLIANCEは大好きだ。でも、彼等若くないね(笑)。D-CLONEをこっちで観たけど良かったね。最近日本の新しいバンドのレコードはあまり聴いてなかったけど、最近でもTadashiがHG FACTから出す作品はどれも好きだし、CRUST WARからの作品も良かった。もう一個仕事を見つけたらまた新作のレコードを色々買ってみようとは思ってる」

■日本の若いパンクスに一言。

「自分に正直で誠実でありなさい。全ての中途半端なロックンロールはぶっとばせ」

■2010年はBillyにとってどんな年になりそうかな?

「願わくば新しい職を見つけ、家の家賃を払える様になりたいし、早くレコードやギターを売る生活から脱出したいね(笑)。バンドに関してはTRAGEDYの新作LPを出したいし、ショーもやりたい。TRAUMAの７"EPも出したい。Partner In Crimeからのリリースもまた早く復活させたいね。最後に。俺の目標としては常に多忙である事。創造的である事。幸せである事」



POLISH HARDCORE PUNK LABEL

TRUJACA FALA

Vol.0の表紙を飾ってもらったポーランドのUTOPIAが、ニュー・アルバム「Niee」を当地のレーベル、TRUJACA FALAからリリースした。TRUJACA FALAはNIKT NIC NIE WIEやPASAZERと並び、今のポーランドを代表するハードコア・パンク・レーベルの一つで、主宰者であるFilipにはUTOPIAへのインタヴューの際にも何かと協力してもらったのでした。そんなわけで今回のリリースを機に、彼へのインタヴューを行ってみた。
これまで色んなバンドやレーベルの方に取材させてもらっているが、自分と"近い感覚"の人というのには、なかなか遭遇することはなかった。一人一人違う人間なんだから当たり前だが、Filipの意見には共感出来るところも多くて(もちろん全てではない)、そんなところもちょっと興味深かった次第です。

PHOTO:Mike Champagne (except:Knife In The Leg)

■僕は最近のポーランド・ハードコアとスウェーデンのUMEÅのパンク・ロックに夢中なんだ。だから、最初に君が最近のポーランド・ハードコア・シーンについてどう思っているのか質問したい。80'sや90'sよりも今の方をクールに感じている?

「俺はこの数年、ここのシーンの状態には失望させられっぱなしだってことを言っておかないとならないな、そう、10年間くらいはね。本当に新しくて興味深いバンドっていうのがいないんだ。ほんの僅かに良いバンドがいるってことは救いだけど、停滞しているね。それに、バンドやスクワット、ライヴ会場には若い/新しい奴らは殆どいない。それでも、この1、2年でバンドの新しい波は来ているね。それらの多くは、同じ人たちが違う音楽スタイルでやっているだけなんだけどさ。みんながもっと新しいものに感化されて心を開いて、活動的になったらいいのにって思うよ。もちろんここのいくつかのバンドも、パンク/ハードコアでの世界的なトレンドに乗っかっている奴もいるし、一般的にも今やインターネットがあれば、新たな流行りを創り出すことすら簡単だ。けど多くの人々は、彼ら自身のやり方でやっている。そしていくつかのバンドはとてもユニークなスタイルを持っている。いつも俺は、ポーランドのパンク・バンドはそのサウンドもアティテュードも凄く特別だって思っているんだ。ショーをするための新しい場所も出てきて、素晴らしくはないとしても、多くの新しい、そこそこのバンドもいる。レコードに興味を持つ新しい人たちも出てきた。レコードのリリースに貢献している小さなレーベルも、再び結構な数になってきている。長いこと4つか5つ大きなパンク・レーベルがポーランドにはあるだけで、他には全くなかったんだ。最近の、本当に良いバンドの名前を挙げてみよう。UTOPIA、EDELWEISS PIRATEN、KNIFE IN THE LEG、GOVERNMENT FLU、CALM THE FIRE、EL BANDA、HGW、THE BOLD AND THE BEAUTIFUL、S.A.T.A.N.、SUFFERNIG MIND、ANTIDOTUM、THE FIGHT、DRIP OF LIES、PANACEA、BARAKA FACE JUNTA…」

■どうしてレーベルを始めたの?いつスタートしたのかな?

「90年代に始めたんだ。理由はシンプルだよ。アンダーグラウンド・シーンを発見して、そいつにガツンとやられて、感激したからだ。シーンの一部に加わっても、ただ座っているだけじゃしょうがないだろ。俺は地元のエコロジー・グループやアナーキストの集まりに加わったり、ジンを作ったりしてた。だ



UTOPIA

KNIFE IN THE LEG　PHOTO:Mad Greg



からパンク・レーベルを始めたのは自然なステップだね。みんな新しい音楽を探し求めていたし。当時を振り返ってみると殆どがテープ・レーベルばかりで、やるべきことが沢山あった。新しいバンドを見つけて、その音楽を他の人とも共有したいのなら、バンドをサポートすべきだ。だからResist and Disorder tapesと一緒に始めて、それからディストリビューションとかジンを出したりと一気に拡大していったんだ」

■当時、参考にしたレーベルというのはあった?

「確かにポーランドのレーベルからの影響はあったね。ここのシーンは西側のヨーロッパとはちょっと違うし。カセット・テープによるリリースが多くてね。CDやヴィニールは経済的な負担が大きいんだ。だからビッグなバンドやレーベルだけがそういったフォーマットを扱える。もっとも大きな影響を受けたポーランドのレーベルはNikt Nic Nie Wieだな。今でも活動しているよ。あとはQQRYQ、今はもうないけどね。それにAntena Krzyku。現在はインディー・レーベルみたいになっちゃったけど。 チェコのMalarieもだな。Martinっていうポーランドの国境近くに住んでて、その後、ポーランドに引っ越してきた奴が運営しているんだ。高品質のライセンス・テープを出したり、あとはポーランドのバンドのテープ/レコードもリリースしているよ。大規模なファンジンも作っていて、外国のバンドのツアーのセッティングもやっている。今じゃあまり知られていないけど、昔はバンドがツアーをするのは大変だったんだ。ショーのために物凄く長い時間、電車で移動したり、ヒッチハイクしたりね。もちろん、"デカイ"ヨーロッパのレーベルからも強く影響はされているけど、ちょっと彼らのやっていることとはレベルが違うからね」

■時々カセット・テープでもリリースしているよね。今でもポーランドだとカセット・テープは一般的なの?ヴィニールとCDとカセット・テープならどれが一番好き?やっぱりヴィニール?

「前述したように、90年代においてはテープがもっとも一般的だった。共産主義体制が崩壊した後、"自由な市場"ってものが爆発した。それは音楽産業も含めてね。それ以前は、音楽は違法にコピーされたテープで販売されたり、トレードされていたし、映画はビデオでしか見られなかった。これが西側の商品を入手するための唯一の手段だった。ポーランドは著作権って奴を全く気にしていなかったから、ありとあらゆる西側の音楽を勝手にどんどん生産し始めた。ディスコ、ポップ、クラシックなロックも、メタルもパンクも。テープはパンク・シーンに限らずポピュラーだったし、80年代以降とても重要なものだった。バンドはゼロックス・コピーのジャケットでデモをリリースしていたし、そういった音源はみんながダビングすることによって広まっていった。だから、俺たちはもっともっとプロフェッショナルな、ジャケットもちゃんと印刷されたようなテープを作り始めたんだ。そしてCDやヴィニールも時には出すようになった。今やテープはポーランドでもほぼ忘れ去られている。でも俺はこのフォーマットが大好きなんだよ。現在、ここよりも外国でテープがよく売れている。みんなインターネットでmp3をダウンロードしているけど、それでも俺はテープがCDなんかよりも好きなんだ。もちろんヴィニールもベストなフォーマットだと思うし、幸運にも、ポーランドでは今、ヴィニール・リバイバルが起こっていて、みんなレコードを再び買うようにはなってきているね」

■じゃあ、YoutubeやMyspaceといったインターネット・ツールについてはどう感じている?

「"古臭い"ことしか言えないけど、そうだな、俺はMyspaceもTwitterもFacebookもやらない。インターネットは素晴らしいよ、コミュニケーションが容易になったし、でも、全てのインターネット・カルチャーは"お友達"がついて廻る。お前の今日という一日がどんなにクソだったかとブログに書いたところで、それが一体なんだっていうんだ?誰がそんなもん読みたい?Youtubeはバンドの映像なんかを見られるしナイスだね。でも一日中こいつを見て過ごしたところで、そいつは何か胸くそ悪い問題の解決にでもなるのか?"オモシロ"動画ってやつは、時には良いけど、そういったものは一日中パソコンの前で働いている人のために作られているように思う。彼らは8時間そこにいて、実際に働いているのは1時間、そして残りの時間をインターネットのどうしようもないもんに費やしている。俺にはそんなことに費やす時間はない。
別の問題として、企業が莫大な利益をこれらから生み出しているということがある。毎日の生活の中で、大企業を支持せずに避けて生きていくなんて出来ないと俺は思っている。レコードを出すにしても、ガソリン代を払うにしても、ツアー・バンドのために車を買うにしてもね。しかし、時には違う方法もあるっていうのに、一体全体どうして俺たちが大企業の奴らをサポートしないといけないんだ?Myspaceの代わりに、バンドやレーベルがウェブサイトを作るのは難しくないだろ。それに、Paypalの代わりに銀行



INFEKCJA



振込で払えばいい(最低限、君がヨーロッパに住んでて、商品を注文するのなら。アメリカでも可能だろう)。企業は俺たちの生活を"簡潔"にしてくれるが、絶えず奴らに支払う経路が出来てしまっている。それは大した額じゃない、1%か2、3%ってところだが、この収益は俺たちには隠匿されている。けど、確かに存在している。パンクのディストロなのに、Amazonなんかとの違いが全くないようなのも沢山見かける。彼らは物事を迅速且つ簡単に済ませたいんだろうけどね。人間性が感じられない、全自動のウェブストアで、ショッピング・カートに商品を入れて、Paypalかクレジット・カードで支払いをして(売り手は何%か経営者に支払って)、売り手と一切コンタクトをとることなく商品を手に入れる」

■リリースするバンドって君が選んでいるの?バンドがリクエストしてきたりもするのかな。また、最も重要な信条とは?

「もちろん頼まれたからって全てのバンドをリリースするわけじゃない。沢山のバンドがいるし、それらのいくつかはロクでもなかったり、レーベルの"方針"とフィットしなかったりもするからね。これは不用意に行動する人たちの例だが、デモを送るにしても、最悪なのは入手したメール・アドレスに手当り次第にmp3を馬鹿でかい容量で送ってきて、メール・ボックスが潰されることだな。それにレゲエ・バンドやメタル・バンド、クリスチャン・バンドからもオファーを受ける。一体どうなってんだ?俺たちのウェブサイトを3分も眺めていれば分かることなのに、そんなクソみたいなもんを投下してくんなよ…。分かってくれているだろうけど、このレーベルには厳密な音楽スタイルに関するポリシーはないよ。俺たちが好きで、リスペクトできて、サポートする価値のあるバンドをリリースしている。俺たちにとって、常に素晴らしい音楽だっていうわけじゃなくても、シーンのために頑張っているバンドをサポートすることが重要なんじゃないかと時々思うんだ。そしてメンバーが良い奴らで、"正しい"音楽を作ってさえいれば、俺たちはリリースする。もちろん、人種差別主義者や同性愛差別主義者、性差別主義者のクソどもは受けつけないし、バンドにベジタリアン/ベーガンのメンバーがいる方が好ましい。だけど、こういったことはリリースしているバンドの大部分が俺たちの友達だったりするから、彼らのパーソナリティも分かっているからね。明白な話しさ」

■リリースのメインはポーランドのバンドだけど、色んな国のバンドも沢山出しているよね。外国とのやり取りで苦労することはない?

「外国のバンドでリリースしているのは、通常、俺たちがよく知っているバンドだね。時にアメリカやカナダからバンドがヨーロッパにツアーしに来ると、彼らのツアーをサポートするためリリースに協力することもあるよ。俺たちはクールなバンドを手広く探し求め、売れまくるグレートなレコードをリリースしようとはしていないんだ。それは全然悪いことじゃないし、君も分かるだろうけど、流行っているアメリカやスウェーデンとかのバンドって、すぐにレーベルを見つけられるだろ。でもポーランドのバンドにとっては、レコードを出したりツアーをするっていうのは容易じゃないんだ。ここでバンドをやってて、世界規模での注目を集めるのは、他よりも倍の時間がかかる。だからここのバンドをサポートしたいし、それは素晴らしいだろっていうのが、俺たちの意見さ。レコードを出して、彼らが外国へツアーに行けるようブッキングには尽力する。ポーランドのバンドがツアーするっていうのは、本当大変なんだよ」

■ところで、今、君は働いているの?レーベルが仕事?

「数年前までは、レーベルとバンドの運転手、機材のレンタルだけで生活していたよ。他にも"営利目的"の仕事として、バッヂやTシャツなんかをパンクじゃない会社などのために作っていた。これは面白かったけど、1年のうち6ヶ月くらいは旅に出ていたんだ。これはレーベルを運営するには素晴らしい方法だよ。沢山のレコードをツアーで売ったりトレードしたり、色んな人たちにも会えるからね。けど2年前に俺たちには娘が



THE BOLD AND THE BEAUTIFUL



GOVERNMENT FLU

INSUICIETY



EDELWEISS PIRATEN





PANACEA



THE FIGHT

生まれたんだ。そしてそれから俺たちは長期間のツアーには出られなくなった。長い間、家族と離ればなれになんてなりたくないからさ。だから今は友達と、最大でも1〜2週間程度の短いツアーをポーランドのバンドと行っている。もしくは、外国のバンドの短いツアーのブッキングもしようとしているけどね。俺たちは旅行の仕事を始めたんだ。グダニスク(※ポーランド最大の観光地。北部における文化的な中心地でもある)の郊外にある、湖に面した村に住んでいるんだけど、かなりこの仕事はきつくてね。レーベルは続けているけど、友人でもあるNICレーベルの流通をするのが難しくなってきて、彼は今、新しいウェブサイトで注文を受けるようになっているんだ」

■では、活動を継続させるための動機というのは何かな?

「パンク、そこに関わっている人たち、音楽。今はツアーに出られないけど、素晴らしいパンク・シーンを目撃することは出来ている。パンクのショーやフェスに行き、うちに泊まるバンドの奴らと会ったり、ショーに集まる人たちを見たり、それってかなり"ノーマル"な社会とは違っているけど、これが俺たちの場所なんだ。もちろんシーンには悪い面もあって、クズ野郎が入り込んでくることもあるけど、それでもここはどんなところよりも良い場所だよ」

■初めて聴いたパンク/ハードコア・バンドは何だったの?どう感じた?

「もちろんポーランドのバンドだったよ。DEZERTER、ARMIA、TZN XENNA、MOSKWA、REJESTRACJAだね。多くの人が最初に聴くのはこういったバンドだよ、みんなぶっ飛ばされるような衝撃を受けたって言うだろうな。80年代から90年代頭に活動していたそういったバンドは、今聴いても強烈なビートを叩き付けている。パンク・シーンにとって永遠の象徴となっている外国のバンドについても同じことが言えるかな。パンクへと踏み込んだ時に、大概の人にとっての入り口となる、DEAD KENNEDYSやCRASS、BLACK FLAG、AMEBIXとかもね…」

■レーベルをやっていて、一番嬉しかった思い出ってどんなのかな?

「これは難しい質問だよ。レーベルを運営しているとたくさんの友達が出来るし、素晴らしい瞬間のベストを選ぶなんて不可能だ。殆どのヨーロッパの国々を旅行して廻ったし、多分もう二度と見られないような場所も見た。そんなに会えなくても今でも友達である、素晴らしい人たちともたくさん出会った。重要で必要不可欠な作品もいくつかリリースしていると思うよ…」

■ポーランドには素晴らしいパンクのジンってあるの?君の国のジンの状況も知りたいな。

「ここでは、パンク・ジンはほぼ死滅状態だな。ファンジンとしてスタートした、2つのデカイ雑誌はあるんだ。PASAZERはDIY/パンク寄りで、GARAŻっていうのはもっとメインストリームなOi!/ストリート・パンクを扱っている。それらは大手チェーンの新聞販売店とか、あとはショーでも買えるよ。彼らはフリーのコンピレーションCDなども作っている。そういったもの以外だと、本当に小規模の、友達のためだけに作っているようなファンジンもあるよ。少部数で完全に不定期なものだね。俺が今、思いつくリアルなジンってのはLIBERATIONとHIDE AND SEEKかな。素晴らしいジンのブームが10〜15年前くらいにあってさ、色々と発行されていたんだ。俺たちTrujaca Falaも自分たちでファンジンを作っていたし、MAC PARIADKAというアナーキスト雑誌にも参加して、ZOLTE PAPIERYというパンクのコーナーを始めたりしたよ。これはちゃんとした雑誌でさ、2年くらいは月刊、もしくは隔月で出していたんだ。12年くらい続いて廃刊したけどな…」

■最近のお気に入りバンドも聞かせて。

「ポーランドの新しいバンドに関しては、既にいくつかの質問で名前を挙げているから、今も現役でやっている古くからのバンドを挙げよう。INFEKCJAにAPATIA、INSUICIETYかな。外国のバンドだと…、レコードやライヴで感動したバンドは、DISFEAR、KYLESA、FUCKED UP、FY FAN、AVSKUM、CRIMINAL DAMAGE、INEPSY、DIRECT CONTROL、GOVERNMENT WARNING、SAYADINA、DSB、WARCRYかな…。あと、俺はLA FRACTIONとJUGGLING JUGULARSを見て退屈させられたことはない。彼らのステージは楽しいし、強力だぜ」



■今後の予定はどんな感じ?新しいリリースも楽しみだよ!

「ちょっとレーベルはゆっくりになってはいるけど、丁度UTOPIAの"Niee"LP/CDを出したばかりだね。素晴らしいLPだよ。その次は、KNIFE IN THE LEGの新しい7"EPを今プレスしているところだ。この春に出したいのは、BARAKA FACE JUNTAっていうSTRACONYのメンバーによる新しいバンド。けどTHE EX〜DOG FACED HERMANSっぽい感じでね、デビュー・フル・アルバムになると思う。INFEKCJAも今年LPを考えていて、それとベラルーシ〜ロシア〜フィンランド〜スウェーデンへのショート・ツアーも計画しているよ。正確な予定はそれくらいかな。でも、いつも予想外のことや土壇場になってやるべきこととか出てくるからね」

■ポーランドでは社会主義体制が1989年に崩壊したよね。当時、君は何歳だった?一気に生活は変わったりした?NSZZ(ポーランドの民主化において重要な役割を果たした独立自主管理労働組合・連帯)についてはどう?あと、2004年にポーランドはEUに加盟したけど、生活に変化は生じた?

「俺は1989年当時は14歳だったな。だから共産主義での生活を少しは覚えている。全体主義体制の元で生活した経験のない人に、そこで起こった変化を説明するのは難しいな。この変化が良かったことなのか、それとも良くなかったのか、議論することは出来るだろうけど。ただ確かなことが一つある。秘密警察と一党独裁によって続いていた全体主義国家が、最低限の自由は与えてくれる"民主的な"国家へと変わったってことだ。EUへの加盟は大きな変化はもたらしていない。確かに、パンク・バンドにとってはヨーロッパを旅して廻りやすくなった。国境毎の税関とかの取り締まりもなくなったし。だけど、経済的にも政治的にも、一般市民にとっての良い面と悪い面がある」

■インタヴューさせてくれてありがとう。最後に、読者にメッセージをお願い。

「俺たちがやっていること、そしてポーランド・シーン全体に興味を持ってくれてありがとう。どれほど俺が日本に行ってみたいか言い表せないよ。どんなところか見てみたいし、ポーランドのバンドも連れて行きたい(日本では何十年も前にDEZERTERがプレイしただけだしね)。俺たちが日本に行くのは簡単なことじゃないし、逆のことも言えるだろう。でも、俺はもっと日本のバンドのショーが見たいし、ジャパニーズ・ハードコアの強烈なエナジーをポーランドの人々に見せつけてもらいたい。以前に見たDSBのショーは激烈だったぜ。…それと、BATTLE OF DISARMもかなり昔に見たよ」

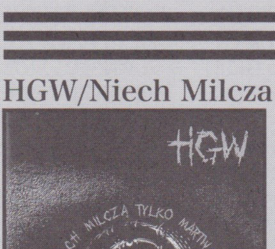
NEWEST RELEASE

UTOPIA/Niee



UTOPIA、EL BANDA、MASSHYSTERIの新作を待ち焦がれていた中で、先陣を切ってリリースされたのがこちら。繊細な旋律が交差する、ポリッシュ・ハードコアの現在が詰まった間違いのない仕上がりです。各パート、特にギターの音がグッと際立ちMartaの歌(もちろんポーランド語)もより色彩豊かに。無秩序に自己増殖する都市を描いたかの、アートワークもクール。今作が"真"の1stアルバムとのこと。(TRUJACA FALA TF114)CD

HGW/Niech Milcza Tylko Martwi



2005年に結成された、反ナチ/反白人至上主義を掲げるポリッシュ・クラスト・コア・バンドのデビュー・アルバム。トーン高めの男性ヴォーカルと、ツタツタと軽いタッチで走るドラムが特徴と言えなくもないが、正直このブルータル感は90年代のアメリカにも沢山いたスタイルかな…。MEINHOF(UK)のヴォーカルが鮮烈なアジテーション・コーラスで参加している10曲目"NA ZAWSZE"(FOREVER)が突出している。(TRUJACA FALA TF113)CD

UMEÅ VRÅLJAZZ GIGANTER



UMEÅ FRONTLINE VOL.3

UMEÅの人たちの間で、「ヘンな日本人が俺たちのことをずっと書き続けているらしいぜ。キモイよな」という噂がたったら面白いな～と、ヒッソリ続けていますこのコーナー。日本のUMEÅカルト200人(この位はいるハズ)が待ち望んだ、UMEÅパンクスによるUMEÅリスナーのためのコンピ、「UMEÅ VRÅLJAZZ GIGANTER」がNY VÅG RECORDSより発売となりました。既に購入されたという方も多いでしょうが、リリースを勝手に祝して、改めてここにて記させて頂きます。

まずこのコンピを理解する上で、重大なポイントが2つあります!!と、そんなに声高らかと宣言することでもないのですが、第一に全曲、スウェーデン語詞で統一、既発表曲もリメイクされているということです。

元々、UMEÅのバンドはポップなパンク・ロックをやっているのに、その実、政治的意識の高い歌詞を歌っている、ということが多々あります。それに伴い、彼らのメイン・リスナーであるスウェーデン人に、より歌詞を理解してもらう目的で、母国語使用率は高い印象が。

LOST PATROL BANDから改名したパンク・ロック・バンドINVASIONENは、前号でも紹介した1stシングル「Loser」では全曲、英語詞でした。"Teenage Dream"とかベタベタな曲名で、正直いかがなものか、とも思いましたが、本コンピでは同曲をスウェーデン語で歌っています。

英語で"Teenage Dream♪"と爽快にコーラスを入れられると「うーん…」となるのですが、これが不思議とスウェーデン語で"Tidsfordriv♪"(直訳すると"Pastime")と歌われると、グッと魅力が増してきます。これこそが語感の面白さ、というやつでしょう。

よく英語か母国語、どちらで歌うべきかという論争(という程のもんじゃない)があります。良くも悪くも、英語は理解出来る人が圧倒的に多い言語なので、"世界中のリスナー"を意識していて、且つ歌っている内容を理解してもらいたければ、英語は現状ベストなものでしょう。ただ一方で、どうしても英語の歌が圧倒的大多数を占める世界で生きているため、英語自体の語感はスマートに感じやすく、その発音自体ではひっかかりがない、というのは個人的に強く感じています。

日本語の歌詞だと、言葉の意味自体を脳が勝手に理解しようとする、そして理解出来るので、例えば、何か作業をしながら聴いていても"耳(意識)が引っ張られる"感覚がよくあります。

また、スウェーデン語と同じく、イタリア語でもフランス語でもスペイン語でもポルトガル語でも、聞き慣れていない+それぞれ独特の語感があるので、意味は理解出来なくても"耳にひっかかってくる"ということがあります。言い換えれば、LA FRACTIONが英語で歌ったらちょっと興醒め、という感覚です。

ただ、この話題を徹底的に突き詰めていくと、結局は英語か否かが問題なのではなく、"全ては歌い手の力量によるんじゃねぇの"という身もふたもないオチが待っています(笑)。で、本コンピに収録されているバンドのうち、過去の作品において英語詞を用いているのが、前述のINVASIONEN以外だと、80's USHCインフルエンスなAC4、ガールズ・ポップ・パンクのTHE BOMBETTES、素晴らしきニュー・アルバムを発表したばかりのREGULATIONS。これらは確認出来ました(他にもいるかも)。

言語の違いでガラッと違う表情が見えてくる、そこを聴き比べてみる、というのもオツな楽しみ方だと思います。REGULATIONSの参加曲"Du Är Inte Min Stadsminister"は、ニュー・アルバム「TO BE ME」に収録されている"Catholic Love"と曲自体は完全に同じですが、INVASIONEN同様、雰囲気は大きく異なります。TRISTESSによる"Born To Be Wild"のカヴァーもスウェーデン語だからこそ、光っているのではないでしょうか。

もう一つのポイントが、収録時期です。本作の品番は#120。一方ほぼ同時期にリリースされたREGULATIONS「TO BE ME」が#125。ちなみに#121はMASSHYSTERIの1stアルバム「Vår Del Av Stan」。

ついでに、解散したKNUGEN FALLERも本コンピに参加しています。彼らの解散が恐らく2007年。どんなに遅くとも2008年中には解散しているはずです。そんな理由から、「UMEÅ VRÅLJAZZ GIGANTER」の収録自体は今から2、3年前だったのでは!?

と、どうでもいい些事を大袈裟に書こうと思ったのですが、インナーにあるMASSHYSTERIの写真には新加入したセカンド・ギタリストのKajsa(AUKTION)がバッチリ写っています。Kajsaは「Vår Del Av Stan」の時点では参加していなかったので、うーん…、よく分からなくなりました。写真だけ最近のものを使っただけなのか?しかし「Vår Del Av Stan」に収録されている"Paranoid"と今作の同曲を交互に聴き比べると別テイクだということが分かります(出だしのギター・リフとスピードが微妙に違う)。

ただし、"Paranoid"は200枚限定の7"シングルにも収録されていたので、そっちのテイクと同じなのかもしれません。持っていないので分かりません…。

ちなみにBROTTSVÅG!の"Här & Nu"は彼らのデモCDR「DET KOMMER EN」に収録されているのと全く同じテイクです。このデモは2007年のレコーディング。

単純にバンドによって収録時期が異なっているだけなのかもしれませんが、まぁ、リリースの順序と品番を考えると、「UMEÅ VRÅLJAZZ GIGANTER」は完成に至るまで長い時間がかかった&難航した、ということは推測出来ると思います。

参加している各バンドの単独作よりも、全体的に音質は良い意味でラフ、新たな発見も沢山あって、Vol.1で紹介した「UMEÅ PUNK CITY」ジンとあわせて必携と言い切れる作品です。

最後に、これがUMEÅの全てではなく、あくまでもNY VÅGを中心としたラインナップだということを忘れてはいけません。どこにでも主流と反主流があるように、多分、あの土地にも「NY VÅG周りの連中はシャレてて気に喰わねぇ!!」というバンドもいるでしょう(いなきゃおかしい)。そういったバンドのリリースも楽しみにしつつ鼻歌まじりに、Viva UMEÅ♪


THRASHER
HORROR
TERROR
ADA†MAX

2004年に結成し名古屋を中心に活動するADA　MAXの、4月頃にリリースされるファースト・アルバムに合わせインタヴューを行った。メンバー・チェンジがありながらも、順調にライヴ活動を続け作品もCREW　FOR　LIFEからのファースト・シングル、MCRからのミニ・アルバム、名古屋東海地区comp「LIFE CONCEPTION」への参加、SUPER USA!、N.E.K.との各SPLIT、「UNITED THRASH NIGHT」、「HARDCORE INFERNO」への参加 と、その充実ぶりにも目を見張るものがある。また結成当時からの変わらぬテーマというTHRASHER + HORROR + TERRORな世界観は現時点ではラフミックスを聴いただけであるが増々、顕著でありよりタイト且つ強靭になったサウンドにHRやBLAINE、DEMENTED ARE GOのMARKをも思わせる灰汁と個性の強いトリッキーなヴォーカルが絡む曲の数々はストーリーをも持つ。ギターのAA4を中心に話を聞いた。　INTERVIEWED:中村健司　PHOTO:Rafael Yaekashi　[2月15日/大久手gato]

■アルバム・レコーディングお疲れさまでした。そのことは後から詳しく聞くとして2006年の9月号でDOLL誌のインタヴューがありましたが、その後の主立った動きを順に聞かせて下さい。

AA4「えーと、ドラムのMICHELLEとベースのMACO 69が脱退しましてドラムはUGが、ベースはex-OUT OF TOUCHのSIMAYANが加入しました。で、現在に至る感じです」

■現在のラインナップになってからのリリースは、どのあたりからが?

AA4「UG、SIMAYANになってからの最初がMCRからの「LIFE CONCEPTION」compへ参加、続けてSUPER USA!とのCOVER SONG SPLIT 5インチでのWHERMACHTのカヴァーを…」

UG「(話に割り込むように)でも、俺入ったことで、お客さん減りましたよね。ま、見栄えが、その…」

一同「はっ?え～?(笑)」

AA4「ま、確かにMICHELLE目当てのオヤジは大体いつも4人くらいはいたわ(笑)」

UG「だって、直接言われたことありますから」

AA4「え、何でオマエなんだぁ～～って?(笑)」

一同「ははははっ!!(笑)」

AA4「でも、MICHELLEにはMICHELLEの良さがあったけど結成当初から望んでいた荒々しさというか、よりハードになったのはUGが入ったことが大きいからね」

■その後にMACO 69さんが脱退で?

AA4「そうですね、ちょっとの間、響のHIDEYAにヘルプでやってもらったりしてたんですけど、CHRIST ON PARADEの来日ライヴからSIMAYANに正式加入してもらって。2008年春頃ですね、レコーディングにライヴにかなり忙しかったです。ま、今も忙しいですが。そして、その勢いでN.E.K.とのSPLITが決まってスタジオPEGAでレコーディングしてHARDCORE KITCHEN(HI!!コメ兄!)からリリースしました」

■SIMAYANは長い間OUT OF TOUCHで活動してましたが参加する事によって、このバンドではこうしたいというのはありました?

SIMAYAN「入ったときはみんなから「意外だね」と言われたね。サウンドが前やってたのとは随分違うから自分の音をマッチさせるのは苦労したかな」

UG「でも、最初のときから流石だな!とは思いましたよ」

■数々のライヴをこなしてきたと思いますが特に印象に残ってる土地、ライヴがありましたら。

AA4「遠いところで言えば高知、SIMAYANはまだ加入してなかったんだけど鰹のタタキをシコタマ食って、うーん、あれは楽しかった。カントク(名古屋ビリーミラノ風)の









実家にも行ったし」

UG「そうですね。楽しかったですね」

■一番遠くが高知？

AA4「そうですね、岡山でもやりました。仙台の話もあったんだけどライヴが被ってて」

■そうですか、充実したライヴを積極的に行ってきたようですね。それで今回アルバム・リリースに至るわけですが、ラフミックスを聴かせて頂きましたが全体の構成が凝ってますね。重視したことは何ですか？

AA4「新旧織り交ぜて、再録の曲もあるんですが再録はあくまでもアルバム・ヴァージョンとして録って、もちろんアルバムの為の新曲も入れたかったんで、その辺りはバランス良く。現時点でのベスト盤とも言える一枚です」

■各曲間も印象的ですね。

AA4「聴いて情景が浮かぶと言うかイメージが広がるものにしたいと思って。好みの問題になるんですがSEを使うのが好きなんですよ。SEが入ってるバンドも好きだし。一曲の中に一つの映画を観てるような。収録曲に"ELECTRIC SHOCK"っていうタイトルの曲があるんですけど、それとかはクライマックスのところで、パッと曲調を変えてアコースティックになるんですが、映画で急にモノクロになるような映像が浮かぶ感じにするように意識したり。文字通り効果音、効果的なことは出来たんじゃないかと思ってます。あと、今回、結局うまくいかなかったんですけど"BACK DOOR MAN"って曲ですが、二重人格を演出して欲しくて右と左のスピーカーから別の人格の人間が歌ってるように録りたかったんですよ。成りきった演出で。結局はエフェクトをキツくかけていく事によって豹変していくマッドマンな感じを表現できたかなとは思ってますけど。是非、聴いてみて欲しい！」

■歌詞についてですがパンク、ハードコア・パンク・バンドですと政治的なことだったり人間性を題材にすることが多いですが、その辺りに思いがあれば。

AA4「…自然に、もっと単純に普通の人間が普通に持っている狂気というか、実際、自分も紙一重な部分はあると思うし日常生活でも「怖いなー」と自然に思えることをデフォルメしたりコミカルに表現してる。政治家よりも隣のサイコ野郎の方が興味あるし。その部分での詩だけじゃない音楽性との合致ですね。結成当初からACCUSEDだったり意識してるし、個人的にはLIP CREAMの「9 SHOCKING TERROR」とかは凄くホラーなアルバムと思うし、う～ん、言い方難しいけど、「ちょっと怖い…、でも、ファニーな」って感じがこのバンドをやる上での元！みたいなのはありますね。目指すとこでもあります」

■みなさんレコーディング時にイメージしたバンドとかありました？

SIMAYAN「無いですね。ただひたすらにADA MAXだった。完成に向けて一心で。録ってから聴く時間がかなりあったから。というのは次のレコーディングまでのスパンが長かったからね。俺は後から入ったし、さっきも少し話したけど今、やっている音にマッチしてるか凄く気になったし録っていくうちに弱い部分も分かってくるから、そこをUGと確認したりして」

UG「あれでチームワークが固くなりましたね(微笑)。僕は今の状態(マスタリングまで)を考えると日本のバンドを意識しちゃいましたね。単純に好きなバンドなんですけどGOUKAとか陽死とか。自分のパート的にド



政治家よりも
隣のサイコ野郎の方が興味ある

ラムもそうだけど全体像としてもそうです。あ、後メガデスの1stも聴いてました(笑)」

AA4「僕もギターに関して、山口君(MIDNIGHT RESURRECTOR/TECHNOCRACY)やアサルト、ライフとか好きなんで意識したし、まぁ、HIGH ON FIREも聴いてたけど…(笑)。自分たちが普通に聴いてきたモノと自分たちが形にするモノと、ま、やってることも当然違うのでハッキリ比較もできないんですがクオリティー的には、そこまで行きたいという思いは常にありました。単に比べる要素としては外国のバンドよりももっと身近なバンドをと思ってましたね。海外のバンドと言っても好きなバンドは80年代のバンドばかりだから技術的にもレコーディング設備にしても全く違う訳だし、そういう昔々を追うよりも今、現役でやってるバンドと比べ遜色無いモノを出したかった」

UG「レコーディング作業自体は自分たちもかなり楽しんでできましたよ。実験的なことやってみたり(笑)」

AA4「そうだね、今回録り始めが去年の8月なんですよ。スタジオが月一しかとれなかったので長い時間かけて録りましたから。一回やって一ヶ月後ってな具合に。だから例えば4日間で詰めて録ってたらストレートなモノはできたと思うけど逆にそれほどの発展も無かったと思う。今までそれなりにレコーディングはしてきたけど、こんな手法もあるんだと、新しい発見が数多くあった。STUDIO ZENの岡崎さん(ETERNAL ELYSIUM)の的確なアドバイスはかなり助かりましたね。自分たちの未熟さも感じましたし、目から鱗だったし、ホント録ってて楽しかったですね。だから逆に今度は一発録りのようなザラッザラッの荒いライヴ感溢れる感じで録りたいなと思いますよ」

■ジャンル?というのもなんですがファスト、スラッシュ、クラスト、ジャパニーズ・スタイル等イメージでいえばファスト、スラッシュにカテゴライズされそうですが、そうとられるのに違和感はありますか?

AA4「うーん、イメージって分かりやすいけど、それで音楽性の幅を狭めるのはあんまりかな〜。個人的に雑食で色んな音源聴くんだけど、そこで新しい発見もあるしバンドにプラスになることもあるから。バンドとしてホラーホラーって言ってるけど表現してる中ではサイケデリックな部分もあるしジャンルなんか関係無くやって、それなりに反応あれば、それはそれで面白いと思う。やりたいこともまだまだ尽きませんから」

■そうですか、では最後にこれからのこと等、何かありましたら。

AA4「ずっと一緒にやってきたけど、ヴォーカルのHIDEJIが5月のライヴを最後に抜けるという事になって、ま、HIDEJIも自分の中ではやりきった感があるんじゃないか?とは思うんですが自分たちはもうちょっとやりたいなってのがあるから。ヴォーカル募集中です。次のヴォーカリストに依っては僕の曲作りの架空のバンドも変わるかなと(微笑)。



5月22日ハックフィンでレコ発兼ねたライヴやります。ぜひ足を運んで下さい」

■まずバンド名について質問させて。LIBYANSって名前は、アフリカの国、リビア(Libya)のことなの?

Aaron「うん、まさに・・・国を表しているよ。だけどもともとは、ショーが近づくにつれ、誰彼となくこの名前を口にするようになっていたんだ。タイム・トラベルものの映画を見た後の練習で、LIBYANSって言葉が持ち出されるようになってね。それがバンド名に定着したんだよ」

■日本の読者にLIBYANSの歴史を紹介してもらえる?

Dan「Aaronとオレはバンドを始めた頃、一緒に住んでいたんだ。よく地下で演奏したな。LIBYANSはバンドを組みたくなって始めた。Lizを誘ったのは、彼女が昔やってたバンドのデモがあって、それを彼女が演奏してくれてね。それでこのバンドで歌ってもらえないかお願いしてみたんだよ」

■12"に飛行機の模型がついていたのにはすごく驚いたんだけど、あれは本当に面白いね!でもなんで飛行機?透明のカヴァーもクールだね!

Aaron「どのレコードのアートワークも、新しい方向性を打ち出していきたいし、チャレンジしていこうともしているんだ。あれを作った頃、飛行機はめちゃくちゃバカバカしくて、そのうえ素晴らしいものだと思っていたよ。それぞれの作品に、ユニークかつ、他の作品とは違う何かをぶち込んでいるバンドが大好きだしね。アルバムごとに付随する少しだけ特別な努力を加えることもさ。トランスパレンシー(透明シート)のカヴァーに関しては、君は手作りの質感を感じてくれていると思うんだ。作品の大半はオレがスプレーでペイントしたんだよ。だから、同じものは2つとないね」

■君たちのパンク・ロック・ナンバーからは(LAの)XやAVENGERSのようなDangerhouseレコード周辺のバンドも連想するけど。そういうバンドからの影響はある?

Dan「影響しているとするなら、そういうバンドは潜在意識の中にあるんじゃないかな。意識してそういうバンドみたいなサウンドに

LIBYANS

米国ボストンを拠点に活動中のLIBYANS。日本のTOO CIRCLE RECORDSからのリリースや、MRR誌の表紙も飾ったことがあるので、ご存知の方も多いのではないでしょうか。女性ヴォーカルによる、Dangerhouse周辺を想起させる燻し銀のパンク・ロック(特に"Welcome To The Neighborhood"なんて感涙もんのキラー・チューン)から、ショート&ファストにブッ放すハードコアまでをプレイする多面性も魅力だが、何よりも曲と音そのものへの真摯なこだわりが感じられる素晴らしいバンドです。今回のメールでのインタヴューもそのサウンド同様、メンバー全員で誠実に答えてくれました(みんながこうなら良いのに。…というか、TOO CIRCLE/前田さんが発行している"TOO CIRCLE ARTICLES #4"と内容がバッティングしちゃいました。スミマセン)。



しようとはしていないよ」

Kevin「特定のバンドに似たサウンドにしようとして、あえて努力して近づこうなんて思っちゃいないよ。だけどみんな君があげたバンドの大ファンだし、オレはAVENGERSのファンだしね。彼らと比べてくれるなんて、ずいぶん嬉しいことを言ってくれるね。君がそう言ってくれるのも、絶叫しない女性ヴォーカルの存在があってだと思うけど、心を震わすような感覚を与えてくれる歌い方だってことはわかるよ。曲はメロディーがしっかりしているし、スピードも速い。Dangerhouseのバンドが持つヴァイブも放っているんじゃないかとも思うな」



Aaron「AVENGERSと比較されるまでは、オレはAVENGERSを聴いたことがなかったんだよ。でもXの作品が素晴らしいとは知っていたよ。Xの『Los Angeles』ってアルバムにある「Cyrano de Berger's back」(リハーサル・ヴァージョン)は、オレのお気に入りの曲なんだ」

■曲を作る際に、"これは短いハードコアでいこう"とか、"これはキャッチーなパンク・ロックでいこう"とかは考えている?それとも自然に?

Kevin「もう長いことずっと、そういうのは曲を書く人間にまかせているんだ。Danの書くのは速い曲が多くて、Aaronが書く曲には中くらいの速さのものが多いね。オレはそんなにLIBYANSの曲は書いていないけど、"キャッチー"のカテゴリーに入るものは、ほとんどオレのアイデアと言っていいかな。レコードでは速い曲とスローな曲とのバランスをとることに気をつかっているんだ。最新のLPを作った時も、まさにそこがポイントになったよ。スローな曲ばかり続けて書いていたから、バランスをとるために速い曲も作る必要があると自覚したしね」

Aaron「オレは良い曲を書く努力をしている。まだ探検したことのない方角へ、自分たちを突き進めたいんだ。このバンドのメンバー4人全員が曲を書いている・・・そのために、何か違う結果を得られるんだよね。メンバーが多種多様な別の音楽スタイルをプレイできるうえに、そこにLIBYANSソングと呼べるような感覚があるのが嬉しいよ」

■では、歌詞を書く際に最も大切にしていることは何かな?

Liz「歌詞を書く時に一番大切にしているのは、言葉の響きの流れが音楽のリズムに合っているか確認することかな。素晴らしい意味を持った歌詞を書くよりも、響きの良い歌詞を書いているから、私の歌詞は意味が通っていないのよ。でも曲の意味がどういうものか考えるけど、私にとって一番重要なのは、あいまいであるってこと。特定のことを書かないってことね。前に"最高の歌詞とはそれぞれが自分にあてはめて解釈できるものだ"というような誰かの文章を読んだことがあるの。それ以来ずっと抽象的な歌詞を書いているわ」

■レコーディングに関しても、常に深く考えていると思うんだけど。特に音のクオリティに関して。実際はどう?乾いているけどアグレッシヴなサウンドで好きだよ。

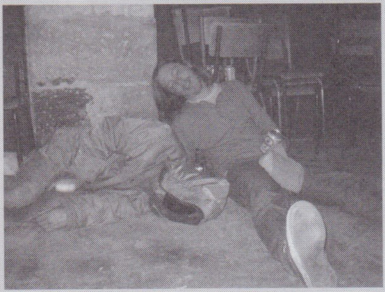
Kevin「ありがとう!作品は全て、自分たちでレコーディングしているんだ。だから君が作品のサウンドを気に入ってくれて嬉しいよ。レコーディングは全てのことがとても自然にいくように努めているよ。デジタルなレコーディングをしていて、アポジーのインターフェースで接続したロジック・プロ(音楽制作ソフト)を使っているんだ。めちゃくちゃクリーンなサウンド・システムなんだよ。"ロウ・ファイ"なサウンドにはしたくなかったから、好きなように使えるオレたちにぴったりのソフトを持っている。インチキな作品にはしたくなかったからね。12"に関しては部屋でやっているような生々しいドラムのサウンドを作り出すのが難しかったな。他の楽器の音がはっきりするように、がっしりした土台を作ろうとしたよ。最後のミックスでもドラムは重要視した。それが"ヘヴィ"とは違う、アグレッシヴなサウンドを作品に与えたんだと思う。オレのギターの音はけっこう薄めにしてある。他の楽器の音にスペースを残すようにね。最新のLPのサウンドはファースト12"にかなり近いんじゃないかな。前の作品を録った場所は使わず、オレの家でレコーディングしたんだ。ドラムの音は前よりも"落ち着いた"感はないかもしれないが、今作は速度があがっているから良い仕上がりになったと思うよ。聴いてもらって少しでも楽しめるものを作ろうと、紆余曲折して考え抜いたんだ。みんなこのサウンドを気に入ってくれると思う。そうだったら嬉しいね!」

■ところで、パンク/ハードコアとの最初の出会いを教えて。それって70's/80'sのオリジナルのバンドだった?それともBAD RELIGION、NOFXなどの人気のあるアメリカのバンドだった?最初の印象はどうだったのかな?

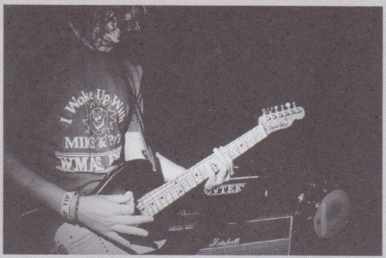
Dan「オレには5歳上のアニキがいて、アニキはパンクに夢中でね。スケボーもやっていたよ。その影響もあって、最初はDEAD

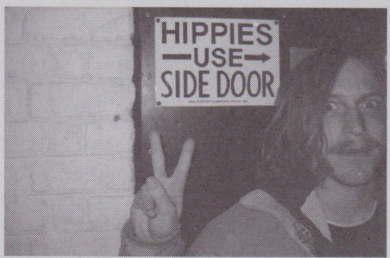












KENNEDYSやBLACK FLAG、SEX PISTOLSなんかに惹かれたんだ。その後に、自分で他のバンドも見つけ出すようになったんだよ。友達にEthanってやつがいて、やつのアニキがNOFXのテープを持っていた。繰り返し聴いたな。確か初めてショーを見たのは15か16の時だったね。BUSINESSとMAXIMUM PENALTYだった」

Kevin「オレの場合は11か12の頃にラジオでパンク・バンドを聴いたのが最初だったな。アニキもオレもGREEN DAYやNIRVANAのようなバンドに夢中でね。『クルーレス』って映画に少しだけ登場したTHE MIGHTY MIGHTY BOSSTONESもかなり人気があったな。オレたちもレコードを買ったよ。これが"パンク"ってものにさらされた最初だったと思う。その1年後にアニキが友達とパンク・バンドを始めるまでは、昔のパンクやハードコアを聴いたことがなかったんだ。アニキのバンドを通していろいろな音楽を聴いたよ。レコードも貸してもらったしね。本気でのめり込んだ初めてのバンドは、OPERATION IVYとMINOR THREATだった。それからNOFXやBAD RELIGION、SCREECHING WEASEL、THE RAMONESなんかの、また別の音にも惹かれていったよ。『パンク・プラネット』ってパンク雑誌も読むようになって、そこから多くのバンドも知ったな。それと、レコードの"サンクス"リストを見て、他のバンドのレコードを買ったりもしたよ」

Aaron「パンクに夢中になったのはスケボーの役割が大きかったな・・・古いパウエル・ペラルタ(スケートボード・メーカー)のグラフィックを見て、何かが起きているってことを知ったよ。テレビやビデオでヤバいスケーターたちを見るようになって・・・寝てもさめても考えてた。オレにとってはみんなが好きなものは全くつまらないぜってさ。だからパンク・ロックとスケボーは最高なんだよ」

■現在のボストンのパンク/ハードコア・シーンをどう考えている?お勧めのバンドは?

Dan「そうだね、ここには凄いバンドがたくさんいるよ。PINK NIGHTMARE、MALE NURSES、DRAIZE、DRY HUMP、BLOODY GEARSはチェックしておくべきバンドだね」

Kevin「オレはマサチューセッツ州西部に住んでいるから、ボストン・シーンのことはあんまりコメントしたくないけど、ボストンにはオレの好きなバンドがいくつかいるよ。今好きなハードコア・バンドはBRAINKILLERだね。DEATHREATみたいな強烈に獰猛でノイジーなハードコアなんだ。やつらの2枚の7"には感激したよ。それでやつらのLPに関わるようになったんだ。恐ろしくいいものになるはずだよ。やつら、まったくバカでさ。この前も5時間も遅れてここへ来たんだよ。この3日間、ここに来ることになっているけど、もの凄い遅刻をして半日を棒に振ることになるだろうな。マサチューセッツ州西部の新しいバンドにTHE OUTDATESっていうのがいて、これがとにかく素晴らしいんだ。REPLACEMENTSやHUSKER DUのようでもあるけど、もう少し直球な感じもするな。間もなくデモをレコーディングするようだよ。もの凄くいいものになるんじゃないかね。SQRMも地元で気に入っているバンドの一つ。完全にぶち切れてる哀愁あるハードコアだね。ギターのSeanはハードコアのギタリストの中で好きな1人なんだ。超絶プレイヤーだけど、必要に応じてめちゃめちゃに弾くこともできるし。優れた技術を持っていて、破壊的に弾けるやつって多くはないよね」

■80'sのボストン・ハードコア・バンドって重要なルーツになる?

Dan「そうだね、初期のボストン・ハードコア・バンドもあらゆるハードコア/パンクから影響を受けていたしね」

Kevin「パンクに夢中になり始めた頃、手当たりしだいに買った中に『This Is Boston, Not LA』ってコンピがあった。レコードに収録されているどのバンドも、オレにはとても重要だよ。収録バンドの１つにTHE PROLETARIATがいて、あの当時のオレには理解できなかった。そういうバンドはそれまで聴いたことがなかったんだ。THE FREEZEとGANG GREENも良かったけど、別のコンピに収録されてたTHE PROLETARIATの「VooDoo ECONOMICS」もよく聴いたよ。オレにはジョークみたいに、不思議な曲に感じたからね。ただこの頃は本気で好きっていうのとは違ったな。他のバンドとは違うところに惑わされていたよ。後になって、歳をとるにしたがい、GANG OF FOURやCRASSやZOUNDSのようなバンドを掘り起こしていくのに夢中になっていった。THE PROLETARIATに戻るけど、やっと彼らがやっていることを理解できるようになったし、今は本気で好きだよ。オレはボストンを有名にした強靭なハードコアにはまったことがないんだ。SSD、DYS、SLAPSHOTなどには興味がわかなくて。時々WOLFPACKなんかを聴くのは好きだし、他のバンドがカヴァーしているのを聴くのも好きだけど、そういうシーンにのめりこんだことはないんだよ」

Aaron「そんなところだね!!!!!」

■PRANK RecordsのKenから"アメリカじゃCDフォーマットは完全に終わってて、売るのはすごく難しい。音楽はタダでダウンロードするか、MP3オンラインで購入するか、それともヴィニールを買うかになっている"って聞いたんだ。彼の考えをどう思う?君たち



もVAを除いたらヴィニールのみでリリースしているよね。

Kevin「オレも同じ考えだな。ハードコアのショーに来るやつらにもCDを買うやつはいないしね。ヴィニールっていうのは、MP3ダウンロードが登場した今、理想的なフォーマットだと思うよ。レコード・プレイヤーを持っていない人はプレイヤーを買い、"Zune"(携帯音楽プレイヤー)につなぐってことになる。アートワークも手にできるしね。CDとは違い、ジャケットも大きい。CDは少なくともパンク/ハードコア/インディーの世界では廃れかかっているね」



■君たちのシーンでは、女性がバンド活動をしやすい環境にある?

Liz「イエスよ。ボストンは女性にとって素晴らしい環境が整っているわ。特に私たちがやっているようなタイプの音楽はね。私は勢力的に活動していると思うの。まあ、私のことを物販の女の子とか誰かのガールフレンドとかって思っている人もいるけどね。こういうダメな男たちとの戦いもあるわよ。今までのところ、いろいろな問題に対して、多少は敏感ではあるかも」

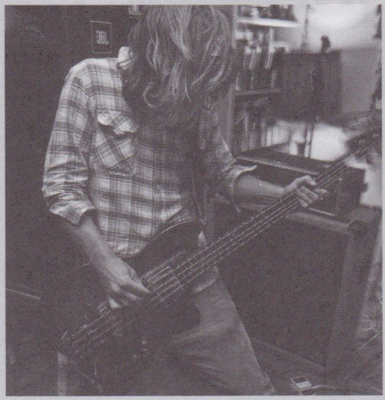
■1月にヨーロッパ・ツアーを行ったよね。印象はどうだった?スクワットで演奏したりしたの?アメリカにスクワット・カルチャーってあるのかな?

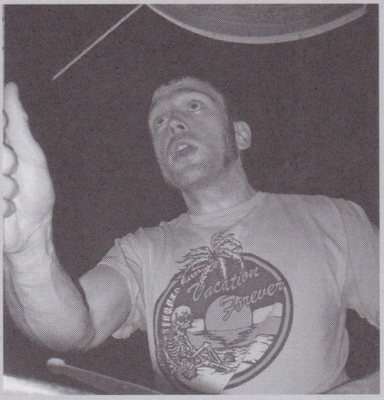
Dan「驚くほど最高だった。そうなんだ、素晴らしいスクワットで演奏してきたよ。ヨーロッパじゃ、スクワットを運営し続けていくために、政府からの支援があるっていうのも凄いよな」

Kevin「ヨーロッパは素晴らしすぎる。向こうで信じられないような時間を過ごしてきたよ。ツアー・バンドをサポートする態勢が整っているところも凄いしね。どのショーも美味い食事を用意してくれてるし、一晩中ビールもタダだし。そのうえ、心地よく眠れる場所まで準備してくれてて。そういうことは、アメリカじゃ全くないよ。自分たちのことは自分たちでどうにかしなくちゃならない。そういうショーばかりだ。ヨーロッパではスクワットで何度も演奏したけど、アメリカにはスクワットがないからめちゃめちゃ感激だったよ。アメリカでスクワットに一番近いのは"コレクティヴ(集合体)"と呼ばれるものなのかな。大抵そういうのは、何人かのグループで倉庫やデカい建物を借りて暮らす。でもアートをやっている人もいれば、音楽を演奏したり、他にもあらゆることをやっている場所でもあるんだ。そういう場所は大都市にあるのが普通で、ショーやパーティーをやることもある。意味としてはスクワットではないけど、それが一番近いね」

■LIBYANSの最も大事にしている信念を教えてもらえる?バンドを続けている原動力になっているものは?

Kevin「人には話したくないんだけど、個人的には楽しみたくてこのバンドをやっているんだ。スキーやゴルフをやってる人と同じ理由で音楽をプレイしているね。旅をするのも好きだから、ツアーは世界を見て廻るには申し分ない方法だし、同時に演奏までできる。つけ加えるなら、バンドってかたちも好きなんだよね。親しい友だちが集まって良い感覚を味わい、何かを作り出すってところがさ。バンドとしては目標を設定してはいないと思う。楽しみたいからバンドを続けている。またいい機会(ヨーロッパをツアーしたような)が訪れたらいいな。キャリアはないが、だからこそコンスタントにツアーや何やらをやらなくちゃってストレスもないよ」





Liz「LIBYANSを続けていくのは簡単よ。メンバーみんなでうまくやっていると思うし、いつだってバンドを楽しんでいるからね。それから、私たちは曲を書くのをやめられない。いつも何か作っているの。バンドを続けている原動力は、出来る限り様々な国をツアーすることかな!」

■今後の予定は?

Kevin「新しいLPが早春に出る予定だよ。それとコンピレーションにも曲が収録されることになっているんだ。たぶんレコードか何かのかたちでね。今年はヨーロッパに行ったこともあって、仕事に支障をきたしちゃったから、ツアーをするのは難しくなるだろうな。メンバーの中には他のバンドをやっているやつもいるから、ツアーの予定もかぶることもある。次の大きな旅は日本だといいね。どうしたらうまくいくか楽しみなんだよ!」

■日本の読者にメッセージをお願い。ありがとう!

Kevin「これを読んでくれてありがとう!できれば日本に行って、すぐにでもみんなの前でプレイしたい!」







UNBROKEN BONES

骨折していない、即ち非骨折…。それって普通の状態では…?というわけで、ロシアの新鋭メタルパンク・バンド、UNBROKEN BONESへのインタヴューです。MOBCHARGEとかTOTÄLICKERSとかDISHAMMERとか(全部スペインのバンドだ…)、もうバンド名を考えることすら放棄しているように感じられるバンドも多いですが、UNBROKEN BONESはそんな中でも突出したインパクトとセンスを放っているように思えます。
ロシア・シーンの過去～現在とメタルパンクの話題を中心に、ヴォーカルのNikitaにインタヴューを行いました!!ちなみに彼は、カナダのGERM ATTAK(来日間近!!)の新譜のロシア盤をリリースした男でもあります。

ここロシアには パンク/ハードコア/メタルのシーンなんて存在しない 実際にこの手の音楽に 真剣にのめり込んでいる奴なんてわずかなもんだ

■まず最初に、バンド名について質問したいんだけど、これって(もちろん)BROKEN BONESのオマージュだよね。どんな感じで決まったの?

「そう、お前の言う通りだ。バンドの名前はBROKEN BONESへ捧げたものだよ。お前も知っているように、多くのバンドがDISCHARGEに対する賛辞としてRECHARGEやDISCHANGE、DEATHCHARGEだのといった名前をつけている。それをBROKEN BONESでやらない手はないだろう。だから俺たちはUNBROKEN BONESと名付けたのさ。面白いしよ、それに人の気を惹くだろ。関連づけやすいしな。実際に俺たちのサウンドはファストでストレートなパンクにイカしたメタル・ギターのソロが入るもんだし」

■バンドの歴史も詳しく教えて。

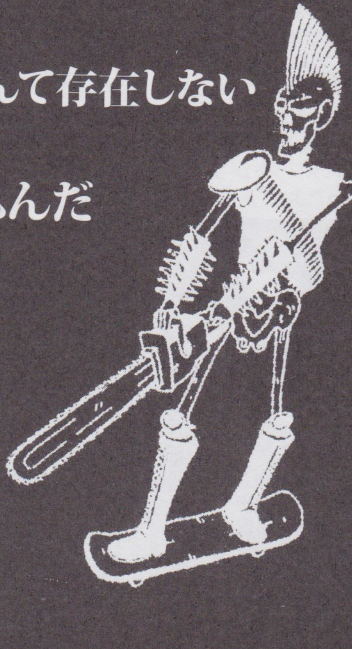
「2009年2月に俺たちは練習場所を手に入れたんだったと思う。それから4月に最初のショーをやった。同じ年の5月にはデモをレコーディングして、夏の間中ずっとミックスをしていた。そして10月にそのデモをカセットテープでリリースしたんだ。100本な。2週間でソールド・アウトになったぜ。特別なことも驚くべくこともないストーリーだな」

■UNBROKEN BONESの前にバンドはやっていた?メンバーそれぞれの音楽キャリアも聞かせてよ。

「ああ、俺たち全員地元で色んなハードコア・パンクやストリート・パンク・バンドをやっていたけど、どれもつまんねぇバンドだった。現在、Ivan(ドラム)とTaras(ベース)はBOBBY'S BOOBSってロックンロール・バンドでもプレイしているぜ」

■パンクやハードコア、メタルとの出会い、第一印象はどうだった?ロシアで簡単に買うことはできたの?

「10歳くらいの時からずっとスケボーをやっててさ、基本的なパンク、ハードコア、メタルは、当時見た色んなスケボーのビデオで知ったんだ。そんで、ここロシアであらゆるものの本物を見つけるのは簡単じゃないが、確かに可能ではある。色んな人が言っていることだけど、1980年代のソビエト時代でさえ、西側のパンクやメタルのアナログ盤を手に入れるのは可能だった、お前が必死になって求めていればな。90年代と2000年代初期に関しては、オーディオ用のカセットテープがかなり浸透してきて、モスクワやサンクトペテルブルクといった大都市じゃ特にブートが出回っていた。俺が言っているのは、GBHやDISCHARGE、THE EXPLOITEDのブート・テープが入手しやすかったってこ



とだよ。そして2000年代のmp3とインターネットの大衆化の到来によって、全てが簡単になった。この5年で、Paypalさえあればあらゆるものを、様々なeBayみたいなメール・オーダーで買うこともできる。一般的に言えば、今、ここで素晴らしいレコードを手に入れるのは難しいことじゃない。もちろん、意志と金が必要だけどな」

■ロシアのパンク/ハードコア/メタル・シーンについて全然知らないんだけど、最近のシーンてどんな感じ?格好良いバンドはいる?

「事実上、ここロシアにはパンク/ハードコア/メタルのシーンなんて存在しない。実際にこの手の音楽に真剣にのめり込んでいる奴なんてわずかなもんだ。それでも、イーヴィルなメタル・パンクをやっているペトロザヴォーツクのORK BASTARDS(http://www.myspace.com/orkbastards)とか良いバンドはいるぜ。あいつらは2本のカセットテープを出していて、METI BHUVAHっていうブラックメタル・バンドとのスプリットと、WHP CULTってタイのレーベルからリリースしたデモがある。それにDARKTHRONEのFenriz(ドラム)による"band of the week"(※恐らく"Fenrizが選んだ今週のオススメ"みたいなものだろう)の唯一のロシアのバンドでもあるんだ。ヴォロネジのFURTHER CHARGES(http://www.myspace.com/furthercharges)も良いバンドだな。ノイジーなUK82スタイルのパンクで、スウェーデンの2KOMPONENTZ(※イギリスのバンドだと思う…)とのスプリット・テープをリリースしている。SICKPACK(http://www.myspace.com/sckpck)っていうモスクワのバンドはPOISON IDEAやNECROSっぽいところがあって素晴らしい。モスクワのSEXDRIVE RECORDS(sexdriverecords@yahoo.com)が彼らの7"をリリースしていてまだ手に入れられるぜ。FATUM(http://www.myspace.com/fatum666)というモスクワのバンドはDEVIATED INSTINCTの精神を受け継いだステンチ・コアで、最近ファースト・デモのレコーディングをしてた。BESTIAL REVILER(http://www.myspace.com/bestialreviler)はオールドスクール・スラッシュメタルでもうすぐ日本のABIGAILとスプリットCDを出すよ」



■ソビエト時代の70'sパンク・ロックや80'sハードコアのバンドって何か知ってる?それって君にとっての大切なルーツだったりするの?それともイギリスやアメリカのバンドのほうが重要?

「80年代のソビエト連邦にはちゃんとしたスラッシュ/スピード・メタルのシーンがあったんだよ。KRUIZやKORROZIA、METAL LA、SHAHなんてバンドはグレートだった。それにGRAZHDANSKAYA OBORONA、PYSHEVIE OTHODI、BRYGADNYJ PODRYADといった素晴らしいパンク・バンドも沢山いた。ハードコア/クロスオーヴァーのバンドだとCURT、THE CONTRAS、それに初期のDISTEMPERかな。こういったバンドを時々聴くのは大好きだけど、もちろんイギリスやアメリカ、スウェーデン、フィンランド、そして日本のバンドが俺にとってはもっと重要だな」

■THE BONELESS ONESの"I'm a Skater"とMOTORHEADの"Ace of Spades"をカヴァーしているよね。もちろん両方のバンドのことが好きだからカヴァーしたんだろうけど、他にも理由があったら聞かせて。

「THE BONELESS ONESの『Skate for The Devil』LPは俺の常にお気に入りの一枚なんだ。"I'm a Skater"は彼らのヒット・ソングだし、実際、彼らは過小評価されすぎていると俺は思うんだ。俺たちのデモの最後の曲、"We are Motorheadbangers"ではMOTORHEADの"Overkill"と"Ace of Spades"の2曲のカヴァーを、1曲でやっているんだ。そうだな、これらの曲をカヴァーするのはありきたりでつまんねーことだとは分かっているよ。でも俺にとっては何とも言い難いほどに







METAL PUNK FOR LIFE!

楽しいことなんだ。それは言っておかないとな。誰もがこれらの曲をカヴァーしていることも分かりきっているけど、俺の言っていることを分かってもらいたい。ちなみに、俺の個人的なMOTORHEADのお気に入りの作品は「Another Perfect Day」LPと「Iron Fist」LPなんだ。あとBATTALION OF SAINTSの「Second Coming」LPとの関連性も意識していたんだよ。あれも"Ace of Spades"のカヴァーで終わるだろ。デモのジャケットの、チェーンソーをもった骸骨も「Second Coming」LPからとったもんなんだ」

■じゃあ、歌詞はどんなことを歌っているの?

「俺たちの歌詞は簡単に2つのタイプに分けられるぜ。まずは社会問題のような典型的なパンクの問題。そして2つ目はとにかく楽しめ!ってこと。"Mad Max"のことやブラック・メタルのパロディー、"Triumph of Evil"って曲じゃ"サタニズムはクールだぜ"って歌ったり、ロシアのウォッカについての歌なんかもある」

■2009年のデモのレコーディングはどんな感じだった?最高のロウ・サウンドだね!



「ギターとベース、ドラムは2、3時間で録って、それからギター・ソロとヴォーカルをレコーディングしたんだ。あと、デモの曲とは別にDISCHARGEの"State Violence State Control"のカヴァーも録音したんだ。2倍速でスピードメタル・ヴァージョンの"State Violence State Control"をな(笑)。それはまだ実際リリースしてねぇけど。ミキシングにはえらく時間がかかって本当、ケツが痛くなったぜ。夏中ずっとだぜ!!!結果としては、俺たちはまだこのサウンドに不満なんだ。このデモの曲は好きなんだけど、プロダクションの段階で全てが台無しになっちまった。それでも、このテープのサウンドは悪くはねぇと思うし、お前が好きって言ってくれたのは嬉しいぜ」

■METAL PUNK DEATH SQUAD(Vol.2参照)のロシア支部を君が運営しているの?どうやってMPDSの存在を知ったの?MPDS会長、G.A.T.E.SのMasayasuがロシアにも支部があるって喜んでいたよ(笑)。

「あー、いや、MPDSロシア支部は俺の友達のDanila aka Pigy(ORK BASTARDSのヴォーカル)がやっているんだ。俺も手伝ってはいるけどな。俺がMPDSを知ったのはBLUDWULFのmyspaceを通じてなんだ。2008年の秋に俺とPigyでロシア支部を立ち上げた。Masayasuはクールな奴だよな。俺は彼のBROKEN BONESのレコード・コレクションにスゲー感動したんだ。それにG.A.T.E.Sは最高だ。BURNING LEATHERとのスプリット7"はほとんど毎日聴いているしな。彼がロシアのMPDSを喜んでくれているのも嬉しいよ。褒められて喜ぶなんて彼の生徒みたいだ(笑)。でも実際にロシアのMPDSはかなりイケてるぜ。UNBROKEN BONESやORK BASTARDSといったバンドに、Grind The World(BASTARDATOR、Yasuyuki Suzuki、SALUTE、SACRILEGE(UK)、DARKTHRONE…)やRape and Pillage(INEPSY、RATTUS、FINAL CONFLICT、CRUCIFIX、GERM ATTAK…)といった雑誌もあるし、みんなよくレコードを集めている。時々他のMPDS支部を見るとさ、写真すら載っていなかったり、一人で作っているだけだったり、本物の交流の場になってねぇんだよな」

■メタルパンクって君にとって何かな?Masayasuは"metal punk is pure lifestyle for me"と言ってたけど。

「賛成するね。メタルパンクのない生活なんて絶対に想像できねぇよ。常に色んな動きや発展を望んでいる。バンドにレコード・レーベル…、世界中の未知の人たち。Metal Punk for life!」

■あとさ、僕が買ったテープには、女性ヴォーカルのテクノポップが君らの曲の後に入ってたんだよね。面白かったんだけど(笑)、わざと入れたの?中古のテープをリサイクルしたの?

「ははははは(笑)、それはテープとお前の運次





第だ。何本かは新品なんだけど、他のは再利用したんだ。色んなもんがあったはずだから、女性ヴォーカルのテクノポップなら最悪の部類じゃないだろ(笑)。分かってもらいたいのは、これは正式なリリースじゃなくてデモなんだ。それにこの世界の誰が手に入れるかなんて考えもしなかった。いつかこのデモを7"のヴィニールに出来たらと願っている」

■DRUNK WITH POWERも紹介してよ。なんでレーベルを始めたの?どんなリリースを予定しているのかな?

「DRUNK WITH POWERは俺のレコード・レーベルで、今のところリリースはGERM ATTAKの「Cruxshadow」CDだけなんだ。それで話すと…俺はJo(GERM ATTAK/CAPITALICIDE DISTRO)とUNBROKEN BONESのテープをトレードしていて、俺たちはずっと連絡を取り合うようになったんだ。そしたらあいつが、ニュー・アルバムのCDヴァージョンをロシアで出したらクールだぜって言ってきたんだ。現行のバンドじゃGERM ATTAKは俺のお気に入りのバンドだから、もちろんやるって言ったんだよ。このチャンスを絶対に逃したくはなかったんだ。みんなはヴィニール・ヴァージョンのほうを望んでいることは分かっていたけど、関係ねぇよ、俺は自分が好きなバンドを自分のレーベルから出せてハッピーなんだ。良いスタートになったよ!主に影響を受けたレーベルはCLAY RECORDSにPUSMORT RECORDSだな。そういったレーベルはバンドの精神性も表していたし、あと、そうだ、俺は本当に日本のバンドもいくつかリリースしたいんだよ!!!」

■イジェフスクに住んでいるんだよね?どんな街?パンクをやる会場やスクワットはある?

「イジェフスクは人口50万人の小さな地方都市だよ。製造所や工場が沢山あって、2010年の6月12日で250年目を迎えることになる。あとイジェフスクはカラシニコフっていう突撃銃(AK 47)が開発された場所でもあって、今でも(※設計者のミハイル・チモフェエヴィチ)カラシニコフはこの街に住んでいる。彼のミュージアムも繁華街にあるよ。スクワットはないな、でもDIYショーが出来る場所は2、3カ所はあるぜ」

■ロシアには複雑な歴史があるよね。冷戦時代から共産主義の崩壊とか。ロシアという国についてどう考えてる?

「1000年以上の歴史を通して、ロシアは多くの歴史的な酷い悔恨を遺し、それは今尚顕著だ。20年前のソビエト共産主義時代の失望も引きずっていて、恐怖の反動はあらゆるところに今もある。正直に言うと、ここロシアでの生活は本当に不快でならない。多くの人々はろくでもない精神状態にあって俺は一緒にいるのが苦痛だ。もちろん俺は良い方向に考えたいとは思うが、この国の良い未来なんて想像できないな」

■…そうなんだ。将来の予定はどうなの?UNBROKEN BONESをヴィニールで出す予定はある?

「ああ、7"レコードは録ろうと思っているよ。新曲とBATTALION OF SAINTSの"Second Coming"のカヴァーを収録するつもりだ。俺たちをリリースすることに関心のある人が見つかれば良いんだけど、もし見つからなければ自分たちで出すつもりだよ」

■日本の読者にメッセージをちょうだい。

「まず最初にSatoru(RECORD BOY)にありがとうと言いたい。彼は俺たちに興味を持ってくれて、流通を手伝ってくれたからな!彼がいなければ日本で俺たちを聴くことは出来なかっただろうし。それに、Kenjiもありがとう。テープを買って俺たちを気に入ってくれてこのインタヴューを可能にしてくれた。読者がこのページに興味を持ってくれて、新しい何かを発見してくれたらと願っている。あと、俺の回答を(英語に)訳すのを手伝ってくれたTigranにもスペシャル・サンクスを。UNBROKEN BONESかDRUNK WITH POWER RECORDSに関して何か質問があれば、気軽にメールをくれ」

punkwithpower@yahoo.com





悲鳴

茨城を拠点に活動している女性ヴォーカル・ハードコア・バンドの悲鳴が、1st 7"を自主の悲観レーベルからリリースしている。デモ音源の時点で気になっていた人も多かっただろうが、今作はアートワーク、音質、その価格も含めて、表現者としての意志が生々しく滲み出ている一枚だ。2010年というハイテクノロジーな時代(笑)に、アナログ感バリバリな仕上がりも嬉しい。早速コンタクトをとったところ、ドラムのツトムさんがメールでの取材に応じてくれた。意外なバンド名なども飛び出してきて、こちらの偏狭な先入観を木っ端微塵にしてくれる。楽しんでもらいたい。

■まず最初に、どんな風にしてパンク/ハードコアを聴くようになったか教えて下さい。はじめは●●を聴いてたけど、そのうち●●も聴くようになって〜、と詳しく教えてもらえれば。

「僕がパンクと出会ったのは今から7年ほど前で、高校3年の時のクラスメイト平沼(現セカンドというバンドのVo)に教えてもらいました。それまでは特に音楽は聴いていなく、彼にテープをもらって、内容がA面洋もの70s(ユーザーズ、ネオンハーツ、レジロスなど)、B面が日本人(フリクション、スターリン、ティーンジェネレイト、レジスト、ザイモティクス)などでした。最初はパッとしませんでしたが、毎日聴いてるうちにハマって…後に彼がやっていたバンドを見に行って、カーペッツのスモールワンダーを爆音でやられて即死って感じですね。それと、その時の水戸はDJパンク・イヴェントも盛んで、教えてもらった曲を爆音で聴くのも気持ちよくて通いました。そこから、水戸のライツアウト・レコードというショップを紹介してもらい、店主キクチさんに色々教えてもらって…東京でもレコードを買い出して、V.A「クロロフォルム」中心のバンドを良く聴いていました。それと平行にパンク天国4も発売されて、一気にそっちに流れた感じですね。フリクション、ミスターカイトをはじめ、東京ロッカーズ周辺、スターリン、ナゴム系など手に入りやすいものを買って…。その少ししてから80年代日本のハードコアを知り、ライツアウト・レコードでカムズを聴いて「これだ!」ってのは鮮明に覚えてます。女性Voの日本語ハードコアはかなり効きましたね!そして約4年ほど前レコード・ノックスが誕生して、現行の日本人ハードコア、パンク・バンド、日本の80sの再発CDなども買うようになりました。その他スナッフィースマイル周辺も友人に教えてもらい聴いてました」

■悲鳴の結成は3、4年前くらいですか?悲鳴以前にもバンドはされていましたか?結成の経緯も聞かせて下さい。

「結成は2006年夏です。その一年ほど前にポップなバンドをやろうと友達とやりだしたバンドで、以前のメンバーが見つけてきたのが今のVoマコで。彼女は最初Baでしたが、試しに歌ってもらったところ良かったので、そのバンドがすぐ解散してしまいマコにハードコアやろうって誘ったのが始まりですね。そこから高校の時にDJパンク・イヴェントで知り合ったBaネマを誘って、最初のGuトベはパンク好きな友達に紹介してもらって。トベはRIP OFFレコーズ周辺が好きで、スターリンも知っていたので話が早かったです。しかし一年半経ってトベが東京に就職になって、現在のGu三村が入りました。ライヴ・イヴェントで知り合った彼はエモコアとか叙情ものが好きでTaken、you and iとか影響受けててって感じですね。演奏力も申し分なく彼の加入でイメージが広がりましたね」

■結成当初から今のようなサウンドは思い描いていましたか?このバンド名からも、最初から日本の80年代のパンク/ハードコアを意識していたのかな、とも思いますが。

「結成当初からハードコアは意識していましたが、始めたときほぼ全員初心者だったので、まずとても曲のスピードが追いつきませんでしたね。特にドラム。その時はスターリンをはじめマスベ、奇形児、赤痢等を意識した曲を作ったり。少しずつ演奏が速くできるようになってきて、やっとカムズの「工場」のカヴァーが出来るようになるまで結成して2年くらい経っていました(笑)。バンド名も漢字にしたくて。今思うと当時の影響受けてるバンドは横文字多いですが(笑)。それだけ「奇形児」とか「赤」「愚鈍」「赤痢」「充電装置」とか脳裏にインパクトがあったのだと思います。「悲鳴」という名は女性Voってのもあって。イメージにピッタリ合って、決定しました」

■COMESや初期GASをレコード屋さんの紹介では引き合いに出されていますが、実際影響は大きいですか?THE 4TH INTERNATIONALに近い雰囲気も感じましたが。

「カムズ、ガス、第4をはじめ大好きなV.A「MY MEAT'S YOUR POISON」のバンド、その他日本80年代物、現行のあらゆるタイプの日本のバンド(スラッシュ、ファスト、クラスト、ジャパコアなど)にも影響を受けてます

し、大好きです。僕たちの曲での影響は完結的に言えば、飛ばしてる曲は僕が作っていて、おどろおどろしいものはネマが作りました。彼はアメリカのタッチ・アンド・ゴー周辺の90年代から近年の作品を好んでいて、スティーヴ・アルビニの影響が強く、それを悲鳴に合う感じで作り上げる感じです。80sの「人間ホルモン」で例えるなら僕が「ヒトマロ」、彼が「影千代」っていった曲づくりな感じですかね(笑)」

■今作もアートワークは古着屋の方が描かれていますが、具体的にバンド側から「こういう絵で」とお願いしているのですか?それともお任せで?佐伯俊男や丸尾末広に近い印象を受けますが、ラインが繊細でバンドの音と合っていると思います。

「お店にも丸尾末広の絵が飾ってあります。店主カモシダさんは大好きですね。やはり「スターリン」「奇形児」「ばちかぶり」などのジャケは絵じゃないですか?やっぱり作品は絵で飾りたいって欲はありました。今回の7インチは僕の中にイメージがあって「骸骨が刀持って生首!」としか伝えませんでしたが、予想を見事に超えられた作品になっていて驚きました。それまでのデモのデザインはすべてお任せでって感じですね」

■ジャケの赤x黒の配色も鮮烈です。配色や紙質、あとアナログというか手作り感にもこだわりましたか?

「ジャケは色々な色の紙に印刷してみて「赤」が一番ピンときた感じです。他の部分は手作り感というか、切って貼る作業しか思い浮かばないし、深く考えず作業してたら自然とこうなった感じです(笑)」

■歌詞カードを入れなかったのは、集中して聴いてそこから汲み取って欲しいからなのかな、と思いましたが、実際はいかがですか?

「「歌詞カードをつける」という作業自体、特に気にしていませんでした(笑)。考えれば載せるスペースもそれ程なかったし。そういえば「トラウマdemo」の時は連絡先載せるの忘れました〜」

■それで、歌詞はどういう状況で書かれていますか?時間をかけてじっくり書くというよりも、瞬間的にバーッと書かれているような印象を受けます。

「その通りですね。歌詞はVoマコが大半書いていますが彼女の場合は、日常の生活でキーワードを一つ、二つと思いついたら、一気に書いたり、今回のEPに収録されている「死面楚歌」は初めてスタジオで曲聴いたその場で書きましたからね。曲の雰囲気掴めるし…。僕もいくつか書いてますが、トラウマ、エスケープなんか一時間かけてないですね、たしか(笑)。でも考えて書くよりは日常的に思ったことを真空パックしてって感じが僕らに合っている感じがします」

■デモ音源はこれまで出されていますが、今回の7"が正式音源ということで、レコーディングのやり方なり、これまでとは意図的に変えた部分はありますか?

「今回のやり方はアナログにすると音質が劣化するというのを考えて、クリアに録音はしました。demoの時は音は完全に作ってしまいましたが。割と漠然ではありますが「これで劣化したらよい感じだろう」というのを考えつつ音を決めて、あまり歪ませず…結果イメージ通りの盤ができて良かったです」

■自主の悲観レーベルからアナログで、600円という価格にもこだわりがあるように思いましたが、「CDで出そう」とか「どこかのレーベルから出してもらおう」というのは、全然考えなかったですか?いぬん堂の石戸さんとか、デモの段階で注目していた人も多かったと思うのです。

「そうですね。まず得体の知れないバンドですし、600円は気軽に聴いてもらいたいし、余計なことを言えば当時の「PASSレコーズ」だったり「BOYSBOYS」のシングルが600円だったじゃないですか?値段はこだわりましたね。当時のレコードに刻まれている値段が頭に離れないというか。自主で出すという考えしかありませんでした。出してもらうなど、もってのほかというか(笑)。自主盤、レコード・リリースの憧れもありましたし…CDも考えましたが、やっぱりパンクのレコードが大好きなので。それがなかったら、ここまでパンクにのめり込まなかった部分もあるので「一生に一度は出してみたい!!」が強かったです。自己満ですね…いや情熱です!」

■ご自身で今作を聴いてみて、仕上がりに関してはどうですか?やりきった感じでしょうか?それとも、「ここはもう少しこうしたかったな〜」とか、出てきましたか?

「現時点では、やりきりました!!」

■500枚プレスのようですが、過度に限定色の強い作品にはしたくなかった、というのはありますか?何枚か出していれば、ちょうど良いプレス数というのも見えてくるとは思うのですが、自主のアナログの1stシングルで、この枚数というのは結構勇気がいったんじゃないかな、と感じました。

「自主でアナログ・リリースをしたバンドの方々に意見を聞いてこの枚数になりました。金銭的にも500枚が限度ではありますし、「500枚も売れるのかな?」とは思いましたが、値段も300枚プレスから極端に高くなかったので、そこは勢いで(笑)」

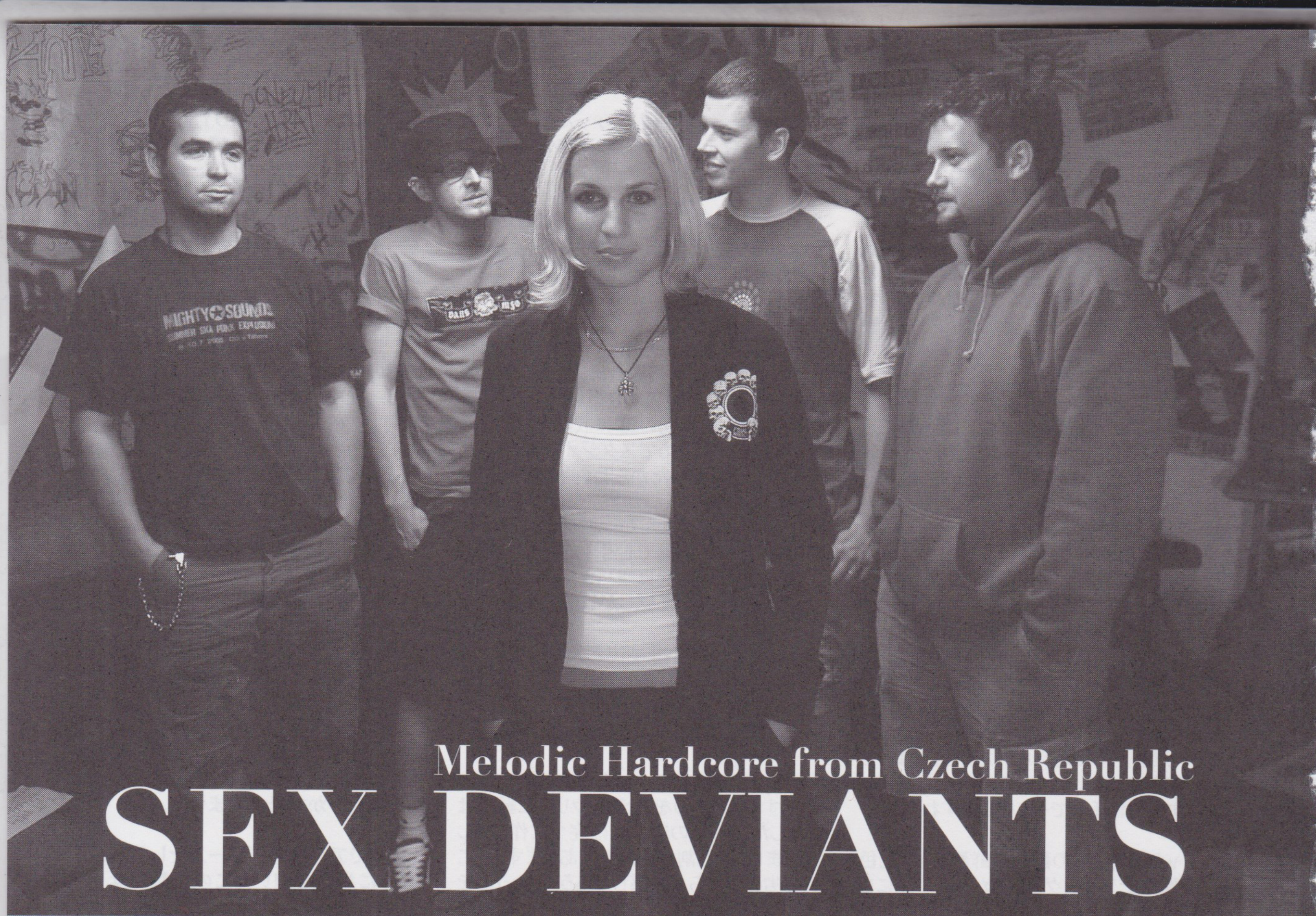
■今後の予定とか話せる範囲で教えて下さい。あと誌面を通して読者さんに伝えたいことがありましたら、併せてお願いします。

「予定は未定です。ELジンを通して僕たちを知っていただいた方、demoを含め音源を買っていただいた方々にお礼が言いたいです。ありがとうございます!!」









Melodic Hardcore from Czech Republic

SEX DEVIANTS

たまーに、"メロディック・ハードコア"(時としてメロコアと呼称される)と、"メロディアスなハードコア"は何が違うのかということを考える。特にBAD RELIGIONなんかの影響が濃い場合は、音だけならほぼ同じに聴こえる時もあるし。活動しているシーン(DIY志向か否か)の違いか、歌詞がポリティカルかどうかか、それとも単に書き手の認識の差か。チェコのSEX DEVIANTSは、恐らく前者にカテゴライズされるバンドだろう。当地のクラスト・バンドにこのバンドの存在について尋ねたら、「誰それ?違うシーンのバンドだろ」という感じだったし、RANCIDのTシャツを着たメンバー写真が本誌に載るのも、レアなケースだろう(多分)。しかしSEX　DEVIANTSのサウンドは、東欧周辺の女性ヴォーカル・ハードコアを好んでいる人には諸手を挙げてオススメしたいほどに、POST REGIMENTなどを筆頭とする"その手"のバンド勢との共通項を発見できる。メロディーやコーラス・ワークも絶品だ(…ただし初期音源は、完全にアメリカンなメロコア色が強いので注意)。
というわけで、ギターのŠtěpánに前々から気になっていたことを色々と訊いてみました。

■まずは、SEX DEVIANTSの結成話しを聞かせてよ。

「美しいある夏の日、2人の16歳のティーンネイジャーが出会った。2人は酒に酔い、そして彼らの求めているものについて会話をかわし、精力的には動いていない自分たちのバンドについても語り合った。彼らは新しいバンドを作る決心を固め、SEX DEVIANTSという最高に素敵な名前を思いついたのだ。あれ、ええと、何て言ったっけ?・・・ティーンネイジャーがなんとか・・・」

■(笑)。SEX DEVIANTSは1996年に始まったんだよね?14年間の物語を詳しく話してもらえるかい。

「14年間にあったことを全部君に話すとしたら、1週間はかかっちゃうだろうな。1998年にスタジオ初体験を済ませ、最初のデモ(『Nečum』──自費)を作ったんだ。チェコ共和国のいろいろな場所でコンサートを繰り返し、2001年には2番目の作品(『Punkémon』──自費)を出した。これには君も興味を惹かれると思うよ。"Pokemon"(※ポケモンと思われる)は君の国で生まれたんだよね。2003年に次の作品『Cesta do očí』を作ったんだが、これはオレたちにとっての重要な作品だと思う。PH Records(PAPAGÁJŮV HLASATEL Records)が費用を出してくれた。その後に初の海外コンサート・・ドイツ、ハンガリー・・・を敢行し、間を少ししょって、チェコ共和国で行われた大規模なフェスティヴァルを体験することになる。2005年にはCecek Recordsが次回作の経費を出してくれて作品を制作し、その後はコンサートを重ねてきた。2008年の終わりに目下のところ最新作品となる『Pozpátku』を、またPH Recordsから出したよ」

■SEX DEVIANTSの前にはバンドをやっていたの?

「最初にも少し話したように、バンドらしきものはやっていたけど、バンドと呼べるようなシロモノじゃなかったよ」

■子供の頃から今まで聴いてきたバンドやミュージシャンて?

「個人的にはメタルに心惹かれているよ・・・KREATOR、METALLICA、IRON MAIDENなんかにね。メンバーの中には古典的な77パンクを聴いているやつもいるよ」

■FAT、EPITAPHから出しているようなアメリカのバンドに影響を受けているんじゃないかと思うんだけど、どう?でもアメリカのバンドにはない、悲しみを湛えたメロディーを感じるんだ。本当に見事だよ。

「オレもそう思う。だけど、それは意図してじゃないんだ。よく話しに出るのは、どの曲も感情を大事するってことかな。それにアメ



リカのバンドと似たようなサウンドにしようとはしていないしね」

■昔のチェコのバンド(70'sパンク・ロック、80'sハードコア)からも影響は受けている?君らのサウンドからは直接はそういう要素は感じられないけど・・・。

「チェコでパンクやハードコアが始まったのは80年代だと思うけど、オレたちが影響を受けているものって90'sなんだ。でもほとんど国内のバンドになるけどね」

■チェコ語で歌っているよね。歌詞の内容を教えてもらえない?ポリティカル?それとも個人的な内容なの?

「ほとんどの歌詞はチェコ語だよ。内容は個人的なことばかりで、政治的なものはないんだ。オレたちはポリティカル・バンドじゃないからね」

■アルバム『Pozpátku』の最後の曲に、日本語の"落語"をミックスしているよね?面白かったよ!

「このアイデアはスタジオで生まれたんだよ。日本語はとってもエキゾチックだし、オレたちもオレたちのファンも魅力を感じているんだ。自分たちの曲を日本に住む人たちが聴いてくれているなんて信じられないよ。最高だね!!」

■日本の文化やバンドなどで知っていることはある?

「チェコ人のオレにとって、日本は古い伝統と歴史を持つ国って印象が強いんだ。それに現在の日本は技術製品に優れているってこともみんな知っているしね。バンドの話しもしていい?スカ・パンクのKEMURIとPOTSHOTも知っているよ。日本で演奏したがっているヨーロッパのバンドが多いこともね」

■チェコ共和国は共産主義政権だったよね。そして1989年11月に崩壊した。あの当時、君は何歳だった?生活は大きく変わった?

「みんな10歳くらいだったよ。だからこれはオレたちの親が答える質問になるかもしれないね。だけど崩壊は国民にとっては大きな変化だった。1989年11月は共産主義国家において、音楽の扉だけじゃなくて、自由な生活の扉も開いたと確信しているんだ」

■チェコ共和国では女性の権利に関してはどうなの?君らのシーンでは女性がバンドをやっていく環境は整っているのかい?

「チェコ共和国では女性も男性も権利は同等だとオレは信じているよ。だけど実際のところ、パンクやロック・ミュージックの世界では、たいがい男のほうが優位ではある。バンドをやっている女の子は注目をあびもするし、バンドのサウンドに変化をもたらしてもくれる。でもそれはヘンなことではないよね」

■最近のチェコ・ハードコア/パンク・シーンをどう思う?僕は素晴らしいバンドがたくさんいると思うよ。どんなバンドと共演しているんだい?

「それはもう、たくさんのバンドと共演しているよ。どれもみんな、とにかく良いバンドばかりだね。これからあげるバンドは友だちでもあるんだよ。PUNK FLOID、HOUBA、KOHOUT PLASI SMRT、DELUSION、V.T.MARVIN、A BUDE HUR、IN PUBLIC ILL、BELLAFICA」

■SEX DEVIANTSとしての今後の予定や目標って?

「そうだね、次のCDのために新しい曲を準備しているところだよ。でもそれが現実的な未来。もちろん今年もたくさんのコンサートを予定している。何よりまず、夏のフェスティヴァルを心待ちにしているんだ」

■日本の読者にメッセージをお願いします。ありがとう!

「君たちの気持ちに感謝するよ!ヨーロッパを旅することがあったら、思い出してほしい。チェコにSEX DEVIANTSってバンドがいるよな、ってね」

http://bandzone.cz/sexdeviants
http://www.myspace.com/sexdeviantsmusic
http://www.sexdeviants.cz



Papagájův Hlasatel Records

SEX DEVIANTSに続いては、彼らの音源もリリースしているチェコのパンク・レーベル、Papagájův Hlasatel Recordsへのインタヴューです。以前、SEE YOU IN HELLのFilipによるチェコ・ハードコア・シーン・レポートを掲載させてもらいましたが、あの記事がアンダーグラウンドなハードコアを主軸としているならば、それとはまたベクトルの異なった(でも交差はしている)シーンで活動しているレーベルだと思います。
"日本のシーン"と一口に言ったところで、人それぞれ認識が全く違うように、どこの国/地域でも、色んなパンクとハードコアがあるはずです。"主流"に見えるところだけを押えておけば良いというわけではありません。多面的に物事を捉えよう(標語風に)、というわけで、Papagájův Hlasatel Recordsの面々、総勢4人が取材に応じてくれました。ちなみにPavelがオーナーです。
「日本のハードコアに興味を持っているのは、世界でも極一部の人たちだけ」という話しをあるバンドの方から聞いたことがあります。本インタヴュー中、Pavelが「どうして日本のパンク・バンドはヨーロッパ・ツアーをしないんだ?」と発言しますが、実際には皆さんご存知のように、日本の色んなバンドがヨーロッパでライヴをしています。「来ていることに気がついていない」という温度差、つまりは"シーンの違い"というやつなんでしょうが、それも個人的には興味深かったりしました。

■Papagájův Hlasatel Records(以下PHR)はいつスタートしたの?レーベルの歴史を教えて。あと、"Papagájův Hlasatel"ってどういう意味?

Pavel「PHR(レーベル)は1995年に設立されたんだ。PHジンはそれより1年早かった。これを日本で読んでくれているなら、"そいつは良い時代だったな"と言うだろう?そんな感じさ(笑)。
極初期の作品は、シングルとカセット・テープでリリースしていた。その当時、最も一般的なメディアだったしね。今は全てが違ってしまっている。日本で音楽カセット・テープが売られていたかどうかは、推測することしか出来ないけど、カセット・テープが登場しても、シングルは今も昔も新しいバンドを知るには最適なものだと俺は思っているよ。ここチェコではね。元々は外国("西側")のライセンスだったりチェコの無名なバンドを出していて、どっちの価格も3ドルくらいだったな。俺は音源を欲しがっている人にとって、それは入手可能な価格だと信じていたんだけど、新しい世代のパンクスはモノを買うということをしないんだ。厄介な病気に頭がやられちまっているみたいだよ…」

Petr「僕が付け足せられるのは、"Papagáj"はスロバキア語で(鳥の)"オウム"で、これってPavelのニックネームなんだ。レーベルのロゴにもあるだろ。"Papagájův Hlasatel"はジンのオリジナル・タイトルでさ、訳すと多分、"オウムの先駆者"になるかな」

■最初にお手本にしたレーベルってあった?

Pavel「いや、本当に真似たモデルってのはないな。…その当時、MalarieとDay Afterってレーベルしかチェコでは活動していなくて、彼らはカセット・テープ・レーベルだったしね。モデルとなり得たのは、俺たちとシーンが似通っていたポーランド(隣国だし、言葉も似ている)だったかな。でも、俺が思うに、この頃はポーランドもチェコにインスピレーションを求めていたのかもしれない…。Flat EarthやProfane Existence、Tribal Warといったレーベルの名を挙げることも出来るけど、これは"完全なる敬意"と呼ぶべきものだろう。
2、3週間ほど前にチェコの伝説的なバンド、Šanov 1(彼らのポジションは、日本で言うスターリンみたいなものさ)のヴォーカルと会ったんだ。彼らのニュー・アルバムについて話すためにね。それでこのレーベルの始まりや俺たちがやるべき使命といった話題になった時に、彼がこう言ったんだ。"うん、俺たちは君のところから新しいアルバムを出したい。シーンをサポートしているし、君のレーベルはここに住む人々に音楽をもたらした。それに利益を第一としていないからな"」

■最初に聴いたパンク/ハードコア・バンドって何だった?古いチェコのバンド?

Pavel「初めて聴いたバンドは(俺は彼らがパンクをプレイしていたと思っている)、Tři Sestryだな。そう、チェコのバンドだったよ」

Petr「僕が覚えている限りでは、最初に聴いたパンク・バンドはSPS、Do řady!、Šanov 1、Fabrikaかな…。これらは古いチェコのバンドだよ。外国のバンドだと何だったか本当覚えていないんだけど、多分古典的なThe

ExploitedとかClashだったと思う。どう僕が感じたかって?ストレート・パンチを頭に喰らったような感じさ。…その後の20年くらい、ずっとそう感じ続けているよ」

Roman「最初はClashだったな。年上の友達がIron MaidenとかKreatorとかが入ったカセット・テープを貸してくれてさ。その片面がClashだったんだよ。中学生の時だね。それから"ビロード革命"(※1989年に起こった民主化革命。これにより共産主義体制が崩壊した)があって、それに伴ってパンク・ミュージックの情報やチェコのパンク・バンドのリリースを知りやすくなった。そこから僕はシーンに対して興味を抱くようになったんだ。HNFってチェコの古いバンドのデモ音源や、"Epidemie"っていうチェコのバンドのコンピ、Dead Kennedysとの初めての遭遇とかに、この頃は影響を受けていたんだよ」

PavelとPetr



Veronika「私達はそれぞれ異なるストーリーを持っているわね。私のケースだと、今から10歳以上も若くて女の子だった頃は、ティーンエイジャーがやっていたHoubaっていうチェコのバンドに夢中だったわ」

■リリースが凄くヴァラエティ豊かだと思うんだよ。ポップ・パンクだけ、とか、ハードコア・パンクだけ、みたいにリリースを限定したくないっていうのはあるの?

Pavel「本当、解釈次第だろうけど、ポップ・パンクは俺たちはリリースしていないと思うよ。チェコに住んでいるかどうか、表現の仕方にもよるってことは分かっているけどね。俺たちは興味深い音楽をリリースするのに努力しているし、格好良い、活動的なバンドをサポートしているんだ。曲さえしっかりしていれば、もしヴォーカリストがマイクに向かって嘔吐してても、気にはしないよ(笑)。レーベルとしてシーンを理解しているし、沢山のギグにも参加するし、色んな人たちのことも知っている。バンドも俺たちのリリースには問題がないって分かってくれているんじゃないかな。
多くの場合、俺たちが知っている友達のバンドを出しているよ。同時に、その場一回限りのバンドもリリースしているけど後悔はしちゃいない。一方、時には一緒にやってきたバンドの中にも、一枚アルバムをリリースした後に離れていってしまう傾向がある。これは最悪のパターンだけどね。俺はよく、良いか悪いかのどっちかでバンドを分けてしまう傾向にある。リリースにしてもね。もちろん、俺たちはバンドがやってきたら、DIY理論やそれに関連するスタイル、アンチ・ナチの原則について議論したりするよ。それは当然、大切なことだと分かっているからね。"軟弱"なバンドを買う人は、ハードな音源は買わないし、その逆も言えるってことはよく意識しているんだ。それでも、パンク・シーンの結束は強力だし、PHRも柔軟だよ」



Veronika

Petr「"ポップ・パンク"とか"ハードコア"(専門)のレーベルってした方が、分かりやすいのかもしれないけど、チェコはかなり小さい国だし、インディペンデントなパンク・バンドを出すようなレーベルってそんなに多くはないしね。例えば、もしポップ・パンクのリリースに集中したら、良いハードコア・パンク・バンドがいても僕らはリリースできなくなっちゃうし、バンドにとってもリリースできるレーベルが見つからないのは、残念なことだからね」

Veronika「Petrはまるで私達がかけがえのない存在のような言い方をしているわね(笑)。けどみんな良いこと言ってるな。もう一つ私達の強みがあるわ、それは多様なディストリビューションね。もしオーディエンスを獲得するための機会になかなか恵まれないバンドがいたら、それがクラストでもポップでも関係ないの。色んなジャンルを知っているから、いつでも対応できるのよ」

■チェコの最近のパンク・シーンについてはどう思っている?以前、SEE YOU IN HELLのFilipにチェコのハードコア・シーン・レポートを書いてもらったんだ(Vol.1参照)。凄く面白かったんだけど、多分、彼はクラストやスラッシュ、グラインドといったハードコアのエキスパートだと思うんだ。だから君らの意見も聞いてみたいな。

Pavel「俺はFilipのレポートも君のジンも読んでいないけど(チェコにも流通させてよ!)、Filipは確かな知識を持っているし、彼は常に偏見が生じないようにベストを尽くしていると思うよ。だから俺は彼が書いたものは真実だと確信している。Filipはよりヘヴィなバンドに精通しているし、"忙しい"シーンに詳しいよね。
俺たちはそこと、もっとアクセスしやすいパンク・ロックの境界線に立っている。Filipがよく表現している"Burning Spirit"は欠けているかもしれないけどね。だけど、人は忘れ

Romanと世界中どこにでも出没するCharlie Harper(UK Subs)



がちだけど、みんなこういうクラシックなパンクからスタートしていると思うんだ。新しい人が加わってパンクにのめり込むためには、良いことだと思っているよ。彼らのパンクが公園で嘔吐して終わるのか、それとも、もっとのめり込んでいくかは彼ら次第だけどね。比較すると、チェコの人口は約1000万人、日本はその約10倍かそれ以上だろ。チェコの規模が分かると思う。でもここのパンク・シーンは素晴らしいぜ。凄く良いバンドも沢山いるし。残念なのは、ギグに来る人の数や活動的な人が少ないってのが問題になるけど、それは他の国も同じかもしれないしね。俺はここは良い感じだと思うよ!」

Petr「僕たちは沢山のパンク・ロック・バンドに興味を持っているし、毎週末、色んな面白そうなギグを君は選ぶことが出来るよ。ただ全般的にギグの盛り上がりはイマイチかもしれない。僕たちは夏に何度か、格好良いバンドが色々と見られる野外フェスもやっているんだ。あと多分、最もここで有名なパンク・フェスはAntifestっていうんだけど、有名な外国のバンドも呼ぶんだよ。このフェスは経済的な理由で終わっちゃったのかな。Pod Parouっていう大きなフェスもあって、小さなローカル・イヴェントとして始まったんだけど、凄く大規模なものに成長したんだ。ローカル・シーンをサポートしようと努力しているんだけど、過去にはThe Damned、UK Subs、Total Chaos、The Casualtiesなんかも出演している。彼ら、今年はToy Dollsを呼ぼうとしているみたい」

Roman「僕は、ハードコア・パンク・シーンは再び盛り上がる時期に来ていると思うな。本当に素晴らしいしね!!もちろん、サブ・ジャンルもあるし、全てのパンクスがいつもギグに行って、あらゆるジンを読んで、音源を買っているってわけじゃないけどね。それでも、僕が支持している、沢山のクールな人たちと会って楽しんでいる、この"シーンの一部"に対して文句を言う気にはならないよ。ネガティヴなことよりも、ポジティヴなことを僕は探しているからね」

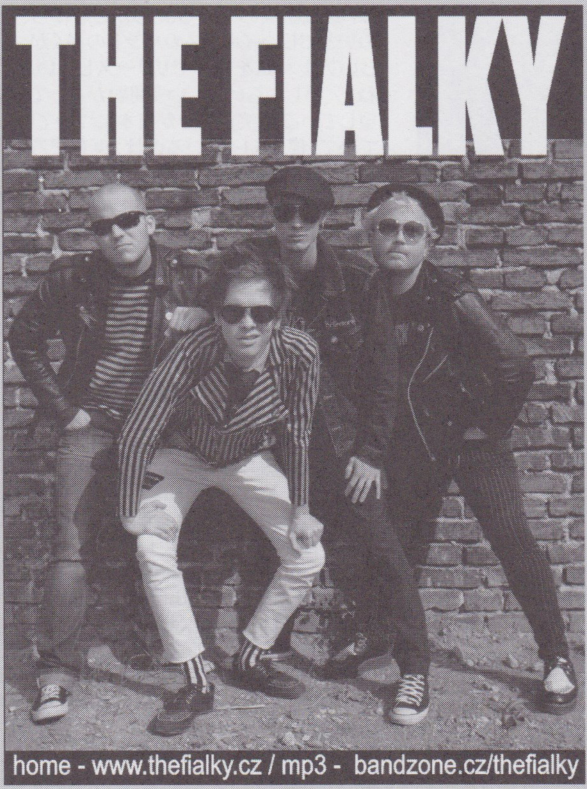
■mp3やYoutube、Myspaceといったインターネット・ツールについてはどう?便利だけど弊害もかなりあるよね。

Petr「僕は世界にインターネットがなかった時代を覚えている。その頃の魅力を語るなら、例えば、友達から良いバンドを教えてもらって、そいつからもう100回くらいダビングを繰り返したようなカセット・テープをもらったとしよう。それでも、君はそのカセット・テープを擦り切れるまで聴き続けただろうね。最近は全てがより簡単で、君が知りたいことは何でも、マウスを2、3回クリックするだけで見つけられる。昔のような魅力は



Demarche

The Fialky



Houba



失われてしまったけど、凄くお手軽だし、音楽をより広い選択肢の中から選べるし、聞いたこともないような、自分が知らない世界のバンドの音楽も聴くことができるよね。こういった理由から、僕は現在の技術の重要性っていうのは感じているよ(ちなみに、ダビングしてもらった沢山のカセット・テープはまだ僕のコレクションに並んでいるよ・笑)」

Roman「それって本当に君がどうアプローチするかによるよね。サイバー・パンクみたいにはなりたくないけど、一方じゃシーンをより理解するための助けにもかなりなっている。大量のリリースとバンドがある中、もしそれらに適応しようとするならば、役立つね」

■色んなCD、レコード、服とかも販売しているけど、チェコの景気って良い?EUに加入した後のここ数年とか、景気に変化はあったのかな?

Pavel「俺たちは他にもヘアカラーやベーガン・シューズにベルトも売っているぜ。単純にパンクなものってことだな!いくつかの売上は落ちているし、受け入れられているCDやレコードなんかの売上は上がっている。俺たちが作って売っている大部分はTシャツに洋服、パッチ、バッヂ、それにプラスして音楽なんだ。自分たちで作っているから、もしそれほど売れなかったとしても切腹させられることはない(笑)。時々、ちょっとは落ち込んだり疲れたりすることはあるけどね。EUに加入しても基本的には何も変わらないよ。チェコ人の考え方ってこれまで聞いたことないか?基本的に、権威的なもんや役人の指示からうまくすり抜けたり、その手の命令を自分たちにとって都合良く解釈しがちなんだ。PHRはチェコのレーベルだろ(笑)。この国の税関は確実に世界でも最悪の部類に入るから、CDが3枚しか入っていない荷物にも税金をかけてくるんだ。でもEUの中なら課税なしで動けるようになったのは素晴らしいね。旅行するのも今はぐっと楽になって、チェコのIDカードはヨーロッパのどこでも使えるし、ヨーロッパの西側の金持ち連中も、もう貧乏人を見る目で俺たちを見てこないしね。もっともEUのおかげで財政危機がより深刻になっているという事実もあるけどな。俺たちは金持ちじゃないし、もし西ヨーロッパの高価な商品を買ってここで売ろうとしたら、結構なリスクを背負い込むことにもなる」

■レーベルの信念は何かな?モチベーションとなるものは?

Pavel「現場の中心にいるのを楽しんでいるからね(笑)」

Petr「モチベーション?金を稼ぐことさ、"エサにまみれた豚"みたいに生きて、バハマの島を買うんだ(笑)。この目標は達成出来そうにないから、モチベーションは他にある。なぁ、僕はパンクという音楽が好きだし、パンクのカルチャーもパンクの女の子も好きなんだ。だから、パンク・レーベルに携わるより良いものなんてないだろ?」

Veronika「私は初期からじゃないけど、長いことここでの全てに関わっている。ここで働けて嬉しいわ。PHRの未来も信じているしね」

■最近好きなバンドはどういうの?何か日本のバンドや文化って知っている?Systematic Deathがもうすぐチェコに行くね!

Pavel「俺たちは日本のシーンに注目しているし、俺は日本のパンク、Oi!、ストリート・パンクは好きなんだけど、ハードコア・パンクはそれほどでもないな。"それぞれのパートが違うことをやっていて、けど全体として見ると素晴らしい"っていうジャパニーズ・スタイルはちょっと俺には喧しすぎるんだ。けど、時々Battle Of Disarmみたいなバンドは聴くよ。彼らを1998年のツアーで見たし、現実的ではないだろうけど、またこの近くで見られたらと思っている。あと昨年ここでプ



PetrとCaptain Sensible(The Damned)

働くPavel　THE ASSASSINATORSとDSBのスプリットが確認できますね



レイしてくれた、Hat Trickersは忘れられないな。今年も、俺たちの友達がヨーロッパ・ツアーをオーガナイズして、ここでプレイしてくれるみたいだ。でもどうして日本のパンク・バンドはヨーロッパ・ツアーをしないんだ?Beyond Descriptionはヨーロッパに来たけど、俺が知る限りではチェコではプレイしていないんじゃないかな。
日本の文化はみんなが知っていると言えるし、誰も知らないとも言える。チェコに住んでいる標準的な人、彼や彼女が知っている日本と言えば、それは島国で、米を食べていて、妙に高いワインを飲むってことだけだ。プラハには沢山の日本人が来るけど、一般的なチェコ人は日本に行く機会がないから、あんまり情報も役に立たないしな。個人的には、世界の国々の興味深い文化や歴史と同じように、日本に対しても関心を抱いているよ。腹切りって正確には切腹というんだろ。日本語でマフィアはJakuza(※ヤクザ)だろ。第二次世界大戦も色々と知っているぜ。Jamamotoだろ(※山本五十六のことだと思う)、あと731部隊、俺は嫌いだ。サハリンをロシアから奪ったよな(ロシアもまた俺たちの領土の一部を奪った)。それと、戦闘機のことも2つ3つ知っているぜ。坂井三郎(※第二次世界大戦時のエース・パイロット)の本で知ったんだ。凄く読みやすい本だった。働き過ぎて死ぬ人がいるっていうのも、奇妙だよな。殆どの人にとって働くことは目的じゃないし、死んだら何も出来やしない。それと、"調査用"と称して鯨を殺しているのは胸くそ悪いビジネスだな!」

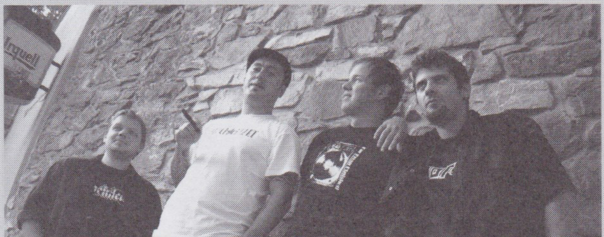
Petr「僕は古いパンク・バンドのファンだよ。けど、最近のシーンにも強烈なバンドはいるよね。 例えば、チェコのシーンだと、Už Jsme Doma、Ucházím、Black Spirit Rose、Complicité Candide、Spots、Zemědělec、Funkce Šroubu、Thalidomideとかね。他の国に関してだと、70年代のクラシックなのが好きだな。近頃、僕のプレイヤーに収まっているのは、 Damned、Secret Affair、Purple Hearts、Buzzcocks、Vibratorsとかその手の類いが沢山。日本のバンドについてはそんなには知らないと白状するよ。Hat Trickers(のCD)は僕らも扱っているし、最近Tom And BootboysとPogo MachineとShit Facedも知った。けど、そういうバンドは僕の知識における日本のシーンとはギャップがあるな。認識を改めてみるよ!しかしながら、僕のいとおしいイギリスのバンドの多くが、新しいアルバムを日本でリリースしているよね。入手しづらいっていう問題があって、絶望しているよ(笑)。誰かが日本について喋っていて、僕が知っているのは、東京だろ、富士山だろ、新幹線という電車、よく地震が起こるということ、沖ノ鳥島という環礁。よく覚えていないけど、海面下にある環礁を海上まで築き上げたんじゃなかったっけ?あと、オカムラトミオっていう企業家はよくチェコのテレビで見るよ」

Roman「分厚いリストを作っておかなくちゃ忘れちゃうんだけど(笑)、チェコのバンドでオススメしたいのは、Telefon、Comlicité Candide、Innoxia Corpora、Zemědělec、Red Insect、Ucházímかな。もっとハードな奴だと、See You In HellにGride、Evidence Smrti、Rapsöd。もっともっと沢山あるけどね。日本のバンドだと、少ししか知らないんだけど、Age、スターリン、Dingo、あとKamisori。Systematic Deathは確実にチェックしに行くよ。日本の文化は、アニメや漫画、古い侍映画の知識を得たいと思っているんだ。日本を訪れて色々と見て廻りたいな。中央ヨーロッパの人間にとって、日本は凄く興味深い国だからね」

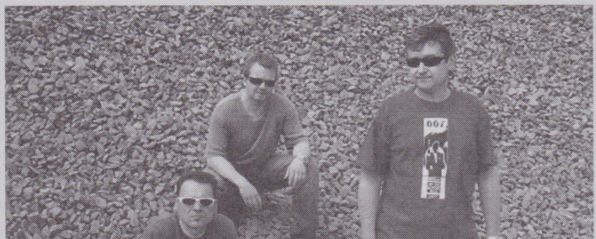
■ハードコア/パンク以外だと、どんなバンドが好き?趣味とか、チェコでの生活についても聞かせてよ。

Pavel「イギリスのアナーコ・パンクを集めたり、他に好きなことは読書にコンピュータ・ゲームに、猫の世話と、テレビ・シリーズの"ロスト"を見ることだな。あとは第二次世界大戦に関連していることなら何でも興味がある。旅行とサイクリングも好きだぜ」

Petr「僕はパンク・バンドを聴くのがやっぱり好きだけど、それに関連しているニューウェイヴとかオルタナ、アンダーグラウンドなものも楽しんでいる。けど、まだ選り好みしていて、そんなに面白いバンドは見つけられていないんだ。音楽とレコード・コレクション以外なら、パンクじゃない趣味も持っているよ。考古学に最近は関心を持つようになったり、あと、ラジオのファンだし。考古



Punk Floid



Do Rady!

VeronikaとPetr



学に関連する時間を外で過ごすのも好きだね」

Roman「友達と一緒にBubbleGunっていうコミック雑誌を出しているんだ。コミック全般にも興味があるよ。色々なジンでも書いてて、音楽とかコミックとかについてさ。時々、コミックの原作とかショート・ストーリーも書くんだ。バンドだと、古いチェコスロバキアのアンダーグラウンドとオルタナのシーンも好きだね。Už Jsme Domaっていうバンドは、日本でもプレイしたことがあるし、オススメだな。あとはスカやジャズ、レゲエも好きだけど、この手のジャンルだとここにはあまり良いバンドはいないかな。外国のバンドだと、東京スカパラダイス・オーケストラみたいなのが大好きだ。The CureやSonic Youthといった古いレコードも楽しんでいるし、仕事に自分の時間を費やすのも好きなんだよね。けどこれって、チェコの大多数の人の典型的な日常とは違っていると思うよ(笑)」

■将来の予定は?新しいリリースも楽しみだよ。

Pavel「2週間前に、HoubaとPunk Floidのスプリットをリリースしたよ。どちらも最高にクールなチェコのメロディック・パンク・バンドだ。あとこの2週間以内にDemarche(プラハの82スタイル・パンク)とThe Fialky(プラハの77スタイル・パンク)の7"EPを、その後にBiblbroxx(俺たちの地元のパンク・バンド)もね。計画としてはDo Řady!、Šanov 1、Čertův Punk(チェコの伝説的なバンド!)のスプリット、Šanovの古いアルバムの再発、Šanov 1の新しいLP/CD、Punk Floidの新しいCD、Zeměžlučの新しいCDだね」

Petr「それに999とThe Vibratorsのアナログもリリースしたよ。あとこれは全てうまくいけばの話しだけど、別の伝説的なバンドもまたリリース出来るかもしれない。ちょっとしたアイデアと賭けでもあるから、どうか僕らの幸運を祈っていてくれよ」

Veronika「私が明らかにできることは、次の"大きな"アルバムは、(希望としては)77スタイルじゃないってことね。Petrはこのスタイルに夢中だけど、次は違ったことをしたいからね」

■音楽とは全然関係ない話しだから、飛ばしちゃってもいい質問なんだけど、チェコの政治ってどう考えている?あと、ロマの問題ってチェコにはあるの?

Pavel「ジプシーまたはロマの問題はあるよ。俺たちの町にも2人のロマが住んでいるけど、俺ほど非社交的ってわけでもないか。それでも、もしゲットーで一緒に暮らすことになったら、普通問題は起こるだろうな。チェコの政治の話しとなると、2つの政党のトップには、2人のマッチョな大馬鹿者がいてね、まるで役立たずの政治システムは何ら解決策を見出せそうにない。そのおかげで多分、人々は政治に興味を抱けないんだろうな。俺はどの政治家が何を盗み、誰が彼のことを疑っていて、誰が彼を買収したのかを、日刊紙で読むのを楽しんでいるんだけどね。共産主義者が上院に当選する危険があった時だけ、その時だけ投票には行ったよ。それは無気力から俺を叩き起こしてくれた」

Petr「Pavelが十分話してくれたと思うよ。チェコの政治は、僕の心を満たしてくれることは何一つとしてない」

Roman「チェコの政治には、洗練も威厳もルールもない。実際、巨大な経済世界で悲鳴を一つあげたところで、誰かが関心を示すこともないと、僕は思っているんだ。まるでこれはジョージ・オーウェルの「アニマル・ファーム(動物農場)」みたいだと時々感じる(※オーウェルはイギリスの作家。「アニマル・ファーム」は全体主義や共産主義を寓話的に批判した著作)。
人々はうんざりさせられているし、僕は近い将来、真の変化が訪れるとは思えない。それはロマ問題にも通じる。これは短い文章でコメント出来るようなものではない。問題は存在するが、それを本当に解決しようと思っている人はどこにもいない。もし手段があるとするならば、それは現状よりも悪いものだろう。お互いに寛容する心と解決する意志が欠如している。大多数の社会が潜在的に人種差別主義になっているという事実が、僕を本当に悩ませる。一方では、多くのヨーロッパ社会は少数民族に関する問題を抱えていて、それは未解決だ。フランスを例に挙げれば、彼らはチェコを第一に問題視している。白人とか黒人とかの問題じゃないんだ。全ての人々に関連している…。どれに答えることも僕には出来ない…」

■インタヴューに応じてくれてありがとう。最後に、読者にメッセージをもらえる?

Pavel「スターリンは最高だ!「兎用心棒」という兎の侍のコミック(※日系アメリカ人による漫画)は日本でも人気があるのか?将来、2、3日でもいいから日本を訪れてみたいな。そして日本酒を呑んでみたい(笑)」

Petr「チェコの小さなレーベルとシーンに興味を持ってくれる日本の人がいるなんて嬉しいね。いつか会いたいよ。ここかそっちでね」

Roman「日本のジンにインタヴューされたこの機会を嬉しく思うよ。君と全ての読者に挨拶したい!日本のパンクに良いバンドやギグ、ジンが沢山あることを願っているよ。チェコのバンドが日本でライヴをする時は、是非チェックしてくれよ!インタヴューをありがとう!」

Veronika「インタヴューに感謝するわ。もし読者がチェコに来るなら、ビールを呑むかグリル・パーティーをしにŘíčany(※PHRがある町)に立ち寄ってね」



※



ARMAGEDOM

HARDCORE INFERNO FROM BRAZIL

**80年代から活動を続けるブラジリアン・ハードコアの覇者、ARMAGEDOM!!
2008年にリリースされたニュー・アルバムも衰え知らずのスラッシュ/クロスオーヴァー・ハードコアで、安住を拒むかの攻撃的な仕上がりだった。そして現在ももちろんバリバリ精力的に活動中だ。肩肘張らずに自然体で、ドラムのRicardoがインタヴューに応じてくれた。彼らの人間的な魅力もここから伝われば幸いだ。**

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi　PHOTO:Marcelo Shina ※

■ARMAGEDOMの現在のラインナップを日本のみんなに紹介してください。

「いいぜ。日本のバンドは大好きだからこのインタヴューをやれて嬉しいよ。ええと、今のARMAGEDOMはベースがClaudinei、ギターはJavier、ドラムは俺(Ricardo)、ヴォーカルはTrexyだ。Trexyは新ヴォーカリストなんだよ。やつは、しこたまビールを飲み、キッズのために音楽をプレイし続けていくっていう俺たちのプロジェクトを持続していくために、新しい血をぶち込んでくれたよ」

■ARMAGEDOMの初期について話してもらえますか。ファースト・アルバムをリリースするまでどんな活動を?

「そうだな、パンク・シーンで数限りないバンドのヘルプを始めたんだったよ。俺たちは演奏のやり方なんて何も知らなかったが、体にはSTIFF LITTLE FINGERSのロックンロールの血が流れていたし、CalのいたDISCHARGEのマスターだったしな(笑)。最初のレコードに関しては、メタルのレーベルからリリースされて妙な感じだったよ。初めのうちはそれが少し気になっていたんだ。でも、関係ねぇよ、ブラジルでパンク・バンドのLPがリリースされるのはこれが2番目だったんだからさ。80年代はパンクスに対してもメタルヘッズに対してもデカい偏見があった。それにたくさんのメタルヘッズが俺たちのショーに来てくれてたよ。メタルヘッズがショーに現れるのは嬉しかったな。あの当時、俺たちはVENOMやMOTORHEADのようなバンドが本気で好きだったからね。それで、こういうバンドたちとレコードで何かやってみたかった。音楽的には結果を得ることはなかったが、そういうアイデアは持っていたよ。このブラジルには今現在も、俺たちがどんなふうにやってきたか聞いてくるバンドがいるよ。わかんねぇな!20年も経ってるのに、同じことをやりたがってるなんてさ(笑)」

■人生においてパンク/ハードコアとは?アティテュードと同様にパンク/ハードコア・バンドを考えていますか?

「なあ、俺たちはパンク・バンドだよ。ARMAGEDOMを聴いて、ハードコア、またはメタルとラベル付けする人がいるだろうが、聞かれたら俺たちはパンク・バンドだと答えるさ。あんたはどう思う?バンドとして好きなことをやろうとしているだけ。スタイルなんて関係ねぇ。最初のレコードから最新の作品まで、自分たちのルーツから離れちゃいないと思っているよ。音楽は俺たちの血の中に流れたままさ。音楽をやめることも考えたことはないよ。たくさんの若いパンクスがショーに来るしね。前に笑える場面があったぜ。出演する会場にいると、すぐ近くに数人のキッズがいて、そのうちの1人が仲間に「ショーに来ているこいつら、どう思う?」と俺たちのことを話していた。俺はEduに顔を向けて、「よう、あの子たち、俺たちの話をしてるぜ!」と言うと、Eduはこう答えやがった。

「あいつら多分、俺たちをここに集まってるキッズの親だと思ってるね」とさ(笑)。俺たちがステージに上がり、メッセージを伝えていくと、ショーはもの凄い盛り上がりになって・・・。ところで、Eduとは前のヴォーカルだよ。個人的な理由でバンドを離れなくちゃならなかったが、今でも友だちさ」

■歌詞でテーマにしていることは?歌詞を書くプロセスはどんなふうに?

「最初のレコードでは、歌詞を深く真剣に捉えていたな。歌詞に特別な内容を持たせるようにね。特定のテーマで書かれていないものや、同じメッセージを伝えていない曲なら、いい曲でも排除していったよ。今は毎日の生活について書いているな。同じテーマをくどくど繰り返すのも飽きちまったからね。ブラジルで生きていくのは、もの凄く複雑だ。初めてヨーロッパをツアーして廻った時、俺たちの目にはヨーロッパは素晴らしい大陸に映った。あらゆることが機能し、若者は常に何かと闘っている。もしヨーロッパの若者がブラジルに住んだなら、打ちのめされちまうだろうな。俺たちはショーで自分たちのメッセージを伝えようと努力してきたし、たくさんの人たちが俺たちの曲を聴いてくれていると思う。だが、現実は変わらない」

■20年以上やり続けているあなた方を駆り立てているものとは?

「音楽、演奏する意志、訪れてみたい土地、理屈じゃねぇ。一緒に集まってやり続け、やめたくない。ツアーに出ている最中に、みんなでよくそういう話をするよ。バンド内でメンバー同士がもめて解散するって話をちょくちょく耳にするが、理由はいつもありふれたものさ。エゴだろう。理解できねぇよ。俺がわかるのは俺たちみんながこれを心から楽しんでいるってことだけ。いつかバンドをやめることがあるのかわからないが、まだまだたくさんの女の子にキスしないとならないし、行ってみたい場所もあるしな。それにARMAGEDOMの音楽を通して伝えたいメッセージを聴いてくれる人たちもたくさんいるからね」

■最も影響を受けたのは?

「今では俺たちなりのロックンロールのブレンドをプレイしているが、最大の影響としてはイギリスのものがデカいよ。俺の考えだと、そういうもの全てを発明した人たちかね」

■ARMAGEDOMのメンバーはバンドとは別のプロジェクトもやっているのですか?

「いいや、信じるのは難しいかもしれないけどね。メンバーが他のプロジェクトをやっていたとしても何の問題もないが、俺たちはいつも一緒にいるし、一緒に様々なことをやっているからな。飲みに行ったり食事に行ったり、笑ったり。いつもどこかで演奏しているしね。メンバーに話しかけてきたり、写真を撮らせてくれって人たちもひっきりなしに来るよ。写真を撮った後は、またメンバーで集まって、あらゆることで笑いあう。時々、まわりに俺たちがどう思われているのか少し心配になることもあるが、こういう気持ちはすぐに消え去るね。俺たちは単純な人間だし、つるんでるのが好きなんだよな。楽しみたいから、みんなで出かけるのさ。仲間に加わりたいなら大歓迎だぜ。ビールを2杯ごちそうしてくれるなら、なおさら最高だね」

■80年代のブラジルのパンク/ハードコア・シーンはどうでしたか?そこでのARMAGEDOMの役割は?

「80年代は素晴らしかったよ。いつも国外のバンドに興味を持っていたし、国外の新しいバンドを探していたな。聴いたことのない新しいカセットを探してあちこち歩き回ったよ。LPはここじゃバカ高くて、国外のバンドの作品は手に入れるのは難しかった。新しい音楽をかけてくれる場所もいくつかあるにはあったが、カセットの音源ばかりだったよ。ショーも多くはなかった。ショーをやるのはとにかく大変だった。ほとんどのバンドが楽器を持っていないんだからさ。バンドは一緒にショーを企画し、お粗末な楽器や機材を持ち寄ってそれがフェスティヴァルとなった。だが一方じゃ、ショーには大勢の人が集まったよ。それにバンドは歌詞やアティテュードに本物の中身があるやつらばかりだった。俺たちもショーを待ち望んでいる客が集まった巨大なフェスティヴァルで演奏したよ。だが、喧嘩がそこかしこで巻き起こっちまう始末さ。パンクスが別の地区のパンクスを殴りつける。この時のショーは他のと比べるとましな方だったがね。パンクスはイコール犯罪者だと決めつけている警官は現れなかったから。やつらは全員を犯罪者だとでも思っただろうよ。でも現実はこうだった。俺たちは自分たちのメッセージを伝えるために、今もこうしてここにいる」

■今のブラジルのアンダーグラウンドの状況について教えてください。良い面、悪い面は?サポートはありますか?

「サポートなんてもんはないね。俺のドラム・セットもバンドじゃなくて毎日の仕事で稼いだ金で買ったものだし。ここじゃ、CDやLPをリリースするのもいまだに難しいしな。LP製造工場も閉鎖しちまってる。シーンはまるでデパートみたいに感じるよ。それぞれが別のセクションに分かれている。ロウ・パンク、アナーキスト、ストレートエッジ・キッズと。俺たちはジャンルの区切りなく集まってやっている数少ないバンドの一つだが、俺が思うにそれぞれ区分ができちまうのは悪い面だな。シーンが個別に分かれてしまうのを助長することになり、シーンは縮小に向かう。互いの壁がなくなれば、シーンは大きくなっていくはずさ」

■ブラジルには2003年頃から、パンク/ハードコア・バンドの新しい波が押し寄せてくるようになりましたね。この復興をどう見ていますか?突出していると思うバンド/アーティストは?

「そういうバンドについて話すと、誰かにとってみたら明らかに不公平なことになるよ。俺にはバンドをやっている友だちもやっ









ていない友だちもたくさんいる。素晴らしいアイデアを持ったバンドも数多くいるな。パンクスの中には、国外バンドの活動のやり方に目を向け、夢中で練習して同じような技術を身につけたがっているやつらも何人かいるよ。彼らは海外を見ているね。これは素晴らしいことだと思うが、ここではまだ困難が多いな。ツアーするにもアルバムを作るにも自分の金で全部の支払いをしなくちゃならない。ここには音楽で食っていけるやつなんていないからな。好きだからやっているのさ。俺はバンドのライヴを見るのが好きでまめに見ている。レコードを作っていないバンドもいるし、作品があってもクオリティはひどいもんだからね。直接ショーに行き、どんなバンドなのか初めて音を聴いて、そこでいつも驚かされることになる。今じゃインターネットでバンドの情報を得るのは簡単だけどさ。俺たちがバンドを始めた頃は、インターネットにアクセスするやつはいなかったよ。曲を覚えるのも必死だった。一生懸命に耳で曲を聴きとり、何度も何度もドラムスティックでソファーを叩いて、ズタズタに引き裂いちまったもんさ(笑)。今はインターネットで情報を得られるね。だがいいバンドもたくさんいるが、あまりにも楽器にこだわり過ぎていたり、複雑なリフにエネルギーを注ぎ込み過ぎていると思うこともあるよ。ここには日本人のバンドを神のように見ている人たちも多くいる。日本人のモヒカンやルックスに惹かれている者もね。しかし現実的に、ここは違い過ぎる。何をするにも困難がつきまとうんだ。俺たちもゆっくりと日本を訪れたいと思っているが、ブラジル人には難しい。ビザ、チケットの代金、国の許可を得られるのかも確信がない・・・。日本のファンから日本でショーをやってくれというメッセージをよくもらうよ。日本でプレイしたがっている他のブラジルのバンドも知っているが、それには誰かの助けが必要だし、そうでなければ難しい」

■人生にパンク/ハードコアの存在がなかったらどうだったと思いますか?

「何が何でもバンドをやっているだろうな。政府を批判しているだろうし、聴きたいと思ってくれているやつらにメッセージを伝えているだろうよ。クソ!ビールを飲みながら、ロックンロールをプレイできなかったらどうかって?この20年以上の間にバンドが作ってきた幸運を使ったら、俺たちのショーに魅力的なモデルが現れるとでも?人生にパンクが存在しないとして俺が確信できることは、国外に俺たちの音楽が届くことはない。作り上げてきた友だち関係がひとつもなくなる。バンドで行った土地を知ることもない。音楽には人種や言葉の壁がないことを知っている。 パンクは人生さ。 パンクはファッションを表すもんでもない。中にはそう考えるやつもいるだろうが、これはライフスタイルなんだよ。みんながみんなサンバを聴き、女性のケツをちやほやするような国に住んでいてもだ」

■コンクリート・ジャングルとも呼べるサン・パウロに住んでいて考えることは?

「ここで生きていくのは素晴らしいぜ。音楽に関連するあらゆるものを見つけることができる。だが必死で働かなければならないし、金は稼げない。だけど俺たちは愚痴なんてこぼしてないぜ。ハッピーになろうと努力してるよ。ブラジルは少なくとも今は、他の人の"国"に侵略しようとする者はいない。爆弾を投げる者もいない。俺たちは貧困と汚職にまみれた中で暮らしているが、いつか俺たちが世界を救うだろうと考えているよ。ブラジルの降雨林は地球に生きている無知な人々にとっての解決になるだろう・・・そうだな、これが俺たちだと思うよ!」

■ファースト・アルバムの『Silêncio Fúnebre』はSpeed State Recordsから日本でリリースされていますが、今では探し出すのは難しくなっています。日本で他の作品をリリースするのはどうですか?

「日本で他の作品がリリースされたら本当に良いだろうね。 日本の音楽ファンはARMAGEDOMを好きでいてくれているはずだ。まだ予定もないが、CDかLPのフォーマットでアルバムがリリースされたら嬉しいよ。作品と一緒に連れて行ってもらいたい(笑)・・・日本でプレイした後にバンドはツアーをやめるというのはどうだ?これはありそうもないことだな。このバンドは父親からその息子の代までずっと続いていくだろうよ。俺たちはいい友だちだから、それを考えても終わりが来るとは思えない。20年後もやっているだろうよ。『Silêncio Fúnebre』は7回リリースされているはずだよ。その度にツアーに出ている。みんながこのレコードを聴きたいと思ってくれて・・・」

■ARMAGEDOMの歌詞はブラジルの社会問題について書いていますね。権力欲、腐敗、貧困と餓え。20年前にも書いていました。何か変化はあったと思いますか?今の本当のブラジルの状況は?

「いつも自分たちの曲を演奏していて、特に『Silêncio Fúnebre』で思うのは、キッズは音楽と結びついているってことだね。キッズは





※

俺たちは貧困と汚職にまみれた中で暮らしているが

いつか俺たちが世界を救うだろうと考えている


※

音楽を聴いたりショーを見たりして、世界の違いに気づき始める。だが行動に変化が現れるのは、まるっきり別の話だな。現在の俺たちはまあまあ良い国に住んでいる。国民から選ばれた大統領だし、国を変えようとする人物だ。しかし、同じ時代に植民地化された他の大陸の国々とブラジルとを比べてみると、ここの歩みは遅い。いつかこういうことを笑える日が来るんだろう。だが、住宅に爆弾を落とすことも、愚か者の満足を満たすために戦地に子供たちを送るようなこともないと確信しているよ。祖先に続き、俺たちも死んでいく。一般的な病気、疑わしい健康保険や病院、狂気の沙汰の交通状況、裕福な国と似た悲惨さ、それがブラジルだ」

■腐敗、暴力、失業について詳しく話してもらえますか。国の将来をどう考えていますか？

「良い方向に向かうのを望んでいるよ。ここではいろいろなことが起きている。８年前よりも今の方が状況は良くなっているよ」

■日本でプレイしたがっているブラジルのバンドは多いですね。ARMAGEDOMが日本をツアーする可能性は？

「大いに可能性はあるが、まだ何の予定もないな。これについてはバンド内でもよく話すぜ。日本には友だちもたくさんいるから、実現する日も近いんじゃないかな。その機会があったら、もの凄ぇショーになると思うよ。早く現実になるといいんだけどね。ブラジルのバンドが日本でプレイしているのも知っている。ちぇっ！ARMAGEDOMの番はいつなんだ？俺たちが日本でプレイしていない理由を知りたいね。2010年に実現できたら最高だろうな！興味を持ってくれているやつがいたら、どうか日本へ行くのに手を貸してくれ・・・連絡をくれよな。日本で演奏している様々な国のバンドの映像をDVDでよく見るんだけど、日本の素晴らしいバンドたちと同じステージに立つことを考えると、興奮しちまうよ。残念なのは、DISCLOSEという偉大なバンドと共演できないことだ」

■日本について知っていることはありますか？日本の賞賛できるところは？

「そうだな、詳しくはない。写真やDVDで見ているくらいだが、クレイジーなパンクスがたくさんいて、ショーは狂気じみてるってことは知っているよ。日本の人たちはショーに来るブラジル人のファンとアティテュードが似ていると思うんだ。飛び跳ねて叫んでとね。これはプレイしているバンドにとっては最高だよ。ヨーロッパのファンはまた違う。クソ、ブラジルで演奏したことのある日本のバンドの話もしたいぜ」

■日本のハードコア・シーンは知っていますか？好きなバンドやその印象は？

「これは話すのは難しいな。バンドに友だちがたくさんいるから、言い忘れたら申し訳ない！こっちの俺の友だちには日本のバンドのようなサウンドを取り入れようとしているバンドも多いよ。日本のバンドはとても独特なスタイルを見つけ出しているよな。これを熱心に真似しようと努力している者たちがたくさんいるんだ。D-beatスタイルのDISCLOSEは日本の多くの人たちのドアを開いたと思う。そしてこのブラジルでもそういう最高のバンドに夢中だ・・・」

■EL ZINEの読者と日本に住むARMAGEDOMのファンにメッセージをお願いします。

「いつか日本でプレイする日が来るだろう。確かなのは、素晴らしいショーをするってことだ。ARMAGEDOMにとってだけではなくて、見てくれている全ての人のためにね。他のブラジルのバンドにとってもドアを開くことになるだろう。それは本物のロックンロールをやっているバンドのドアであって、"オーララ"なんて曲をやっているやつらのじゃないぜ・・・パンク・イズ・バック！」

Ricardo（ARMAGEDOM）
kado.hc@hotmail.com
http://www.myspace.com/armagedom



HARDCORE INFERNO FROM BRAZIL

Lobotomia

ARMAGEDOMと共にブラジリアン・ハードコア不滅の旗印として双壁をなすLOBOTOMIA。ファースト・アルバムの再発後に、長い沈黙を破り最前線での活動へと復帰した彼らだが、そのメタリックなハードコア・サウンドにはますます磨きがかかっている。ヴォーカルのMarkonにインタヴューを決行した!!

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi　PHOTO:Marcelo Shina ※

■現在のLOBOTOMIAのランナップを紹介してください。

「今のLOBOTOMIAは、ドラムのGrego（唯一のオリジナル・メンバー）、ヴォーカルが俺、Markon（1988年に加入）、ベースのFralda（かつてはRATOS DE PORÃO）、ギターのAndré Criança（PRESTO?でも活動）だよ」

■バンドのヒストリー、ディスコグラフィー、初のショーなどについて話してもらえますか。また、バンドの名前の意味は？

「LOBOTOMIAを始めたのは1984年頃だったよ。初のショーはひどく危なっかしかったね。楽器もボロかったが、収入もなくて、当時手に入れられた楽器はそんなものだったな。コンピレーション『Ataque Sonoro』（1984年）に収録されリリースされた曲が、初めてのレコーディングだった。その後に出したのが『Lobotomia－Só os Mortos não Reclamam』（1986年）、コンピレーション『Independência ou Morte』（1988年）、アルバム『Nada É Como Parece』（1989年）。バンドは1991年に解散した。メンバーの間に別々の道ができて、バンドの解散へと向かったのさ。2004年にはファースト・アルバム『Lobotomia』のCDが日本でリリースされたね。その後Gregoがまたバンドを復活させる決心を固めたんだ。最初、前のラインナップで残っていたのは俺だけだったよ。2008年になってPaulãoとBilly Argelをギターに迎え、最新の作品『Extinção』をレコーディングした。2009年中はブラジルで何度となくライヴをやり、7月に初のヨーロッパ・ツアーも敢行したな。この年にはブラジルで行われたTHE EXPLOITEDのショーのオープニングをつとめ、忘れられないショーになったぜ。あのショーはサンパウロで数回行われたよ。バンド名のLOBOTOMIA（LOBOTOMY/ロボトミー＝前頭葉切除手術）とは精神病院で用いられる手術の手順さ。興奮して動き回る患者を植物状態にすることだ」

■20年以上も演奏し続けている原動力になっているものは？

「ヘヴィでダークなサウンドに夢中だからさ。80年代のオールドスクールをぶっ放すバンドが不足しているしな。俺たちが知りたいと思っていた地域も世界へと広がっていっているし、色々な国にLOBOTOMIAの作品が届いている」

■人生にとってパンク/ハードコアの意味とは?LOBOTOMIAはパンク/ハードコアをアティテュードと同じように捉えているの?

「そうだな、人生にとってパンク/ハードコア/スラッシュ/クロスオーヴァーとは、自分たちの世界観を表現できる手段だな。地球の様々な地域で俺たちが認識される。俺たちのやっているような音楽を好きなやつらの住む土地に、LOBOTOMIAの作品を届けたい」

■あなた方がバンドを始めた当初と今とでは、ハードコアに違いは感じますか?

「今ってハードコアが細かく枝分かれしているよな。以前は一つだった。パンクかメタルかハードコアってさ。俺は常々こう言っているよ。LOBOTOMIAは"radicori"(ブラジル人の発音による"ハードコア"。オリジナルだがルーツに根ざしていて、クソとは違う)だぜってね」

■サンパウロやブラジルのパンク/ハードコア・シーンで活動するバンドに対する考えは?

「シーンは細かく枝分かれして分裂しているように思うよ。これはクールじゃない。特にハードコアを見ていると、自分たちの派閥は他の派閥よりも素晴らしいと考えているようだな。みんなそれぞれ違う意見を持っているからね。俺はあらゆる派閥の表現や考えを尊重しようとしているよ。だが、派閥に属しているバンドは別の派閥が優れているとは考えていないようだな。例えば、あいつらはドラッグなんてやっているし、肉を食う。その逆に別の派閥も違う派閥を見て、あいつらはドラッグはやらねぇし、肉も食わない。俺たちは一般論なんて口にせず、団結し、お互いに尊重しあわないと。地球上には素晴らしい人間もそうじゃない人間もいるんだからさ。話の教訓は"他者から孤立したら、どんな人間でも消えていく"。だから俺たちは人間としてより謙虚になり友情を大事にしていかないとな」

■歌詞のテーマとしているものは?歌詞を書くプロセスを教えてください。

「事件の陰に隠れた事実、出来事の陰に潜む現実だ。俺たちはみんなこの現代の科学技術の現実に浸りきっている。日々、自然から遠ざかっているよな。この個人個人の夢から目を覚ます必要があるんだ。時々俺も歌詞を書き曲を作ってみるが、他のやつが作った曲にヴォーカルのアレンジを加えて、歌詞をのせるほうが俺にはあっているよ。サウンドがインスピレーションを与えてくれるから、そこから歌詞も生まれてくる」

■影響として大きいものとは?

「パンクとダーティなメタルを混ぜ込んで生



まれたバンドだな。DISCHARGE、ENGLISH DOGS、VARUKERS、G.B.H.、CIRCLE JERKS、BAD BRAINS、D.R.I.、AGNOSTIC FRONT、RATTUS、MOTORHEAD、EXODUS(作品『Bonded by Blood』)、ONSLAUGHT、SUICIDAL TENDENCIES、他にあげ切れないほどのパンク、ハードコア、スラッシュ、クロスオーヴァー・バンド・・・」

■アルバムの『Lobotomia』はSpeed State



Recordsを通して日本でリリースされましたね。今では探し出すのは難しくなっていますが、日本で他の作品がリリースされることは?

「ああ、日本で俺たちの作品がリリースされたらもの凄ぇ嬉しいよ。日本でプレイできたらいいね」

■今のブラジルのアンダーグラウンドの状況について。良い面・悪い面は?サポートはある?

「良い面は新しいバンドが生まれているってことかな。強烈でアグレッシヴで、その上オリジナルなサウンドを鳴らすバンドがいくつかいるよ。悪い面は本物のアンダーグラウンドと呼べるバンドに対し、サポートする手段を持ったやつらの、侮蔑的とも言える行いだな。やつらは本気でバンドをサポートしたり、作品をリリースする代わりに、疑っちまうような音楽を作らせ、バンドをまるっきり使い捨てにしちまう」

■メンバーはバンドの他に仕事はしているんですか?

「もちろんだよ。全員がバンド以外にも活動や仕事をしているぜ。仕事をしなかったら、食っていく手立てがないからな」

■ブラジルのRed Starからリリースされた『Extinção』が、バンドの最新のフル・レングスになりますね。どういう作品ですか?作品には満足していますか?

「あれはサンパウロのNorcal Studioで100%自分たちの力で制作し、レコーディングしたんだよ。ベース以外は『Nada É Como Parece』を作ったメンバーだ。PRESTO?のCarlinhosがレコーディングのベースをつとめて



くれたよ。出来には満足しているな。だが、またすぐに新しいアルバムを作ると思うし、それは俺たちの作品の中でも最高のものになると確信しているぜ」

■LOBOTOMIAの歌詞はブラジルの社会問題を扱っていますね。権力欲、汚職、貧困、餓えといったことを。20年前にもそういう歌詞を書いていましたが、何か変化は感じていますか?今のブラジルについては?

「ああ、多くのことが変わったよ。それもさらに悪い方へとさ。汚職はブラジルでは日常茶飯事だ。汚職にまみれた政治家も含んだ、あらゆる疑惑を取り上げようとしないメディアが増え続ける一方だしな。多くの人たちが餓えているっていうのに。教育も受けられず、健康面の援助もない。豊かな資源や土地に恵まれているこの国にあるのは、不安定な生活状況だ。街の通りで死んでいる人を目にするのは本当に悲しい。一方じゃ権力を握っているやつらは、国民に渡ることになっている金を、下着や靴下、ポケットにたんまり詰め込んでいるのさ」

■もう少し、ブラジルの汚職や暴力、失業について話してもらえませんか。この国の未来をどう考えていますか?

「俺が思うにこの国の未来は、都市のカオスと田舎からの移動だとみている。おそらく最悪の事態というのは、生活状況を改善しようと人々が行動を起こし、変化を求めようとする必要に迫られていることだろうよ。それはブラジルだけではなく、全世界にとっても同じことだ」

■2003年以来、ブラジルではパンク/ハードコア・バンドの新しい波が到来していますね。この復興をどう思いますか?突出していると思うバンド/アーティストをあげてみてください。

「そうだな、1980年代から多くの素晴らしいバンドが作られ、活動を続けているよな。昔

※





と今とじゃかなり違いがあると思うし、今はもっと興味を惹かれるね。テクノロジーを取り入れるのに限界はない。ディストーションのきいたギターの高速ピッキングと特徴のある強烈なベースが合体し、それにスピードと抑揚をつけたリズムを交互に繰り出すドラムが加わる。サンプラー・エフェクトを使っているが、中途半端な速さじゃないね。こういうサウンドに魅力を感じるな。実際、音楽には魂がこもっていないとならない。それは客の心にも伝わるはずさ。血を熱く煮えたぎらせるぜ。俺が一番惹かれるのは、シンプルでうまく作られていて、エネルギーがみなぎっているサウンドだ。バンドをあげるなら、PRESTO?、GALINHA PRETA、D.F.C.、AGROTÓXICO、AÇÃO DIRETA、D.E.R.、DISCARGA、LEPTOSPIROSE、SOCIAL CHAOS、W.C.M、OITÃO、CHORUME、FORBIDDEN IDEAS、VIOLATOR、DAMIAN、POSSUÍDO PELO CÃO、TERROR REVOLUCIONÁRIO、MALTRAPIHOS、CLAUSTROFOBIA、他にも・・・」

■パンク/ハードコアがあなた方の人生に存在しなかったとしたら？

「(笑)俺たちのままだろうよ。まぎれもない人間(笑)・・・俺は環境保護局で働いている。他にも個人のトレーナーもやっているよ。今年は大学に通って、体育の学位を取得するつもりでいる。 俺たちみんな、LOBOTOMIAと平行して自分の生活もある。このブラジルじゃ、バンドで生きていこうなんてのはほとんど不可能なんだよ。俺たちは第三世界、あるいは第四世界と言ってもいい現実の中で生きているのさ。猛烈な苦境にもかかわらず、俺たちはやり続けているし、衰退の時代を生き延びてきた」

■日本でプレイしたいと思っているブラジルのバンドは多いですが、LOBOTOMIAは日本をツアーする可能性はありますか？

「日本ツアーの実現の可能性は高いぜ。日本でファースト・アルバムがリリースされた後に、またLOBOTOMIAをやり始めたことを考えてみればね。俺の考え違いでなけりゃ、友だちのMUKEKA DI RATOもVIOLATORのやつらも日本に行ったのは、そんな昔じゃない。CherryのやっているHELLSAKURAも日本でプレイしたと思う。俺たちが必要としているのは、日本に呼んでくれる誰かの存在だけだぜ。LOBOTOMIAの他の作品もリリースしてくれる人がいるといいんだがね。そうしたら、日本の人たちにもっとLOBOTOMIAを知ってもらえるよな」

■日本について知っていることは？日本の素晴らしいと思うところは？

「ウルトラマン、ウルトラセブン、ゴジラなどのテレビ・シリーズやファントマ(黄金バット)、サワム(キックの鬼)なんかのマンガを見ていたな。極真会館(大山)の空手スタイルも知っているぜ。日本独特の食べ物(ミソシル、シメジとシイタケ、スシ、サシミ、テマキ、テッカマキ・・・)もだし、偉大なタトゥー・アーティストの"三代目彫よし"もね。日本各地に友だちもいるぜ。富士山に住んでいるやつもいるんだ。合気道の型も剣道も少しだけど知っている。宮本武蔵の本、座頭市の映画、アキラ（映画の基となったグラフィック・ノベル）、菊池富美雄（ブラジルでマクロビオティック[長寿法/菜食や自然食による健康法]・ダイエットを紹介している）、俺はリベルダージの近くに住んでいるんだが、サンパウロのここには日系人地区がある。子供の頃に日本語も勉強したな。そこには日本人もパンクスもラスタファリアンもメタルヘッズもゴスもテクノキッズもいて、グローバリゼーションと直結してたよ」

■日本のハードコア・シーンで知っていることはありますか？好きなバンドや印象的なバンドなどは？

「よくは知らないんだ。素晴らしいバンドがいるのは知っているよ。個人的にVIVISICKとFUCK ON THE BEACHを知る機会には恵まれたね。 2009年にフィンランドのPuntala-Rock Festivalでプレイしたんだけど、CRUDE（凄ぇいいバンドだった）とも共演したよ」

■EL ZINEを読んでいる日本の読者と日本に住むLOBOTOMIAのファンにメッセージをお願いします。

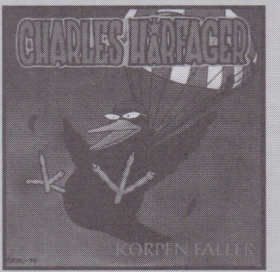
「みんな自分の夢を信じ続けてくれ。夢は叶うはずだ。俺たちの人生は夢みたいなもんだ。夢が実現する以上に重要なのは、夢に気がつくことさ。近いうちに、日本ツアーでLOBOTOMIAの曲を披露できたらと願ってるぜ」

lobotomiahc@hotmail.com
www.myspace.com/lobotomiahc

WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.4 Trall Punk

TEXT:
Yuki SP(Y)/SHIVA THE 高橋組(S)/WSオニギリ(O)

CHARLES HÅRFAGER/KORPEN FALLER



1989年に結成して、2本のDEMOテープをリリースして1992年にKAMELよりEPをリリース。そして、翌年にリリースされた待望のアルバムがコレです！！SWEDEN的なメロディーにフルートも入って、さらに哀愁さが増しています。MILLENCOLINのErik Ohlssonがメンバーにいたことでも有名で、彼がジャケットのアートワークも手がけています。2枚のアルバムをリリース後に名前をCHARLESに変えましたが、この頃の感じはもうありませんので注意です。(S)

(KAMEL RECORDS/KMEL005)CD 1994年

GREAT KASSLER/MANNISKVARDET



現行TRALL PUNKを中心に精力的なリリースをしているBUZZBOX Recordsのオーナー2人に、こちらも現行TRALL PUNKレーベルのTRAPDOOR RecordsのオーナーでもありBISONのメンバー+KVASTERのメンバーによる、TRALL PUNKオールスターズによるバンド。2008年作の6曲入り。RADIOAKTIVA RÄKER直系のサウンドがどの音源でも最高！個人的には3曲目の"LEVER DU?"がこの音源を選んだ理由ですかね。まさにTRALL PUNKってなサウンド。ツアーもよくやってるようなので頑張って欲しい。(O)

(BUZZBOX & TRAPDOOR/GKCD01)CD 2008年

CIVIL OLYDNAD/EUROPAS UNDERGÄNG



2006年にリリースされた自主制作アルバムに続く2ndアルバム。確実にASTA KASK～STREBERSの影響下に感じられるサウンドでハードコア要素が強い硬派なバンド。現在のレコード・プロダクションなのでギターのザクザク感が疾走感をより感じさせる。キラーチューン「TERRORIST」収録。ハードコアを普段聴いてる人に聴いてもらいたいです。でもこの曲のリフの単弦ギターのメロディーはミニモニ。を思い出させるんだな。(O)

(BUZZBOX/CIV002)CD 2008年

KRYMPLINGS/SELF TITLED



STREBERSのUlke、DLKのMart Hällgren、CHARTA 77のPer Granberg、COCA CAROLAのCurre Sandgren、KÖTTGROTTORNAのMongoという豪華すぎるメンバーでSWEDEN好きの人にはたまらない1枚。作曲した人以外が全員ヴォーカルをとるというユーモアあふれるスタイルに脱帽です。"Masturbation Blues"なんていう曲もあってタイトルもオシャレ(笑)！(S)

(BEAT BUCHERS/ORCD 14)CD 1994年

COSA NOSTRA/1000db



ASTA KASKが活動休止後に、ギターのMickeとドラムのMagnus Bjurénを中心に結成。もちろんサウンドもASTA KASKの延長線上で熱くならずには、いられません。そして、片面のみのピクチャー12inchでめちゃくちゃゴージャス！！曲も渾身の1曲！「1000db」です。曲が素晴らしすぎてSWEDENのディストロの名前にもなっていました。(S)

(ROSA HONUNG/ROSAXP 45)12" 1992年

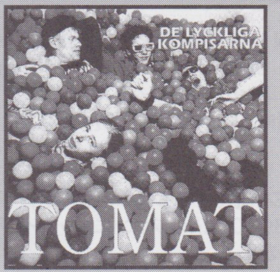
KVALSTER/VEMODSKAMP



GRETA KASSLERで活躍中のMagnus Hedmanの以前やっていたバンドの2本目のテープ。1stでは荒削りでミッドな曲が多かったのに比べて、2ndではアップテンポにSWEDEN的メロディーが乗ってカッコ良さアップです。サビでのコーラスも哀愁漂ってにんまりです。単独CDのリリースが無かったのが非常に悔やまれるバンドです。TRAPDOORからのコンピレーション、「HOLY SHIT 2」にも2曲参加していますが、残念ながらこのテープに入っている曲と一緒です。(S)

(自主リリース)CASSETTE TAPE 1998年

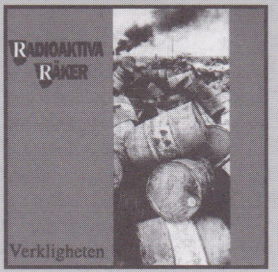
DE LYCKLIGA KOMPISARNA/TOMAT



Mr.Trall PunkことMart Hällgrenによる怪物バンドDLKの2nd。彼らを一気にスターダムに押し上げたキラーチューン"Ishockeyfrisyr"のホッホッホッホッケフリラッという歌いまわしは日本人の笑いのツボをかなり強めに突いてきます。なんて2009年に再結成しニューEPをリリースしちゃいました。(Y)

(BIRDNEST/BIRD035)CD 1993年

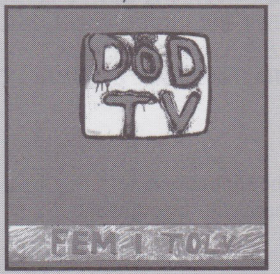
RADIOAKTIVA RÄKER/VERKLIGHETEN



Svensk trall punkで今後、このEPを越えられる作品がリリースされるのでしょうか？Trall punkを聴きたいという人は、まずこのEPを聴いてほしいです。4曲とも極上の仕上がりでTrall punkにどっぷりハマります。このEPは廃盤になっていますが、最後の編集盤アルバム「FINITO」に収録されています。既に解散済みですが、昨年に行われたBEAT BUCHERSの25周年GIGで一度ライヴを行いました。GIGに行けなかったのが、本当に悔やまれます。(S)

(BEAT BUCHERS/OR-26)7" 1993年

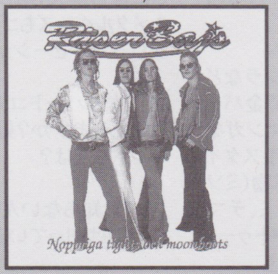
DÖD TV/FEM I TOLV



唯一の単独音源。音源が比較的少ないので単独音源は本当にありがたいです。他にはMODERAT JULやREALLY FAST等のコンピレーションにも参加していますが、どれも最高の曲を残しています。ギターの単音と、ちょっ速のリズム隊、しゃがれた声、完璧すぎます。メンバーのJimmyとMattはRADIOAKTIVA RÄKERのメンバーとしても活躍していました。この音源にもRADIOAKTIVA RÄKERのDaniel Torroがゲスト・ギターで参加しています。(S)

(EGCD 016)CD 1993年

RÄSERBAJS/NIPPRIGA TIGHTS OCH MOONBOOTS

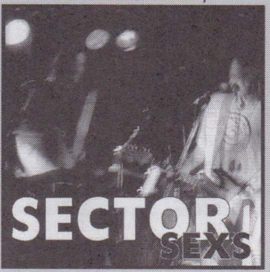


現在もスウェーデン本国でカルト的人気を誇る彼らの唯一のフル・レングス。キャッチーで耳に残るメロディーはそれほど暗さは感じさせませんが、その奥底には買い物に行ったのに何を買うかをすっかり忘れてしまったような微妙な絶望感が常にまとわり付いてきます。過去のEPの曲も再録して収録。(S)

(KAMEL RECORDS/KAMEL011)CD 1995年

現在、日本でも大注目のスウェーデンUMEÅパンク・ロック・シーン。同じくスウェーデンのパンク・ロックでも一部の人にしか人気のない(笑)TRALL(トラル)PUNKシーンを今回は紹介させていただきます。ASTA KASKの延長線上にある音なんですけど、日本では演歌っぽいという理由で避けられてしまっています…。確かに万人受けするサウンドじゃないのはわかるんですけど、聴いてハマってしまうと抜け出せない中毒性をもったサウンド！ホント演歌 on 45RPMってな日本人の琴線に触れるような哀愁MAXなメロディーをもつハードコアです。基本的にASTA KASKの影響が大！！世界中に浸食しているUSパンク・ロックの影響を感じさせない独自の路線を突き進む暴走気味のバンドたちでもう愛らしくてしょうがないったらない！

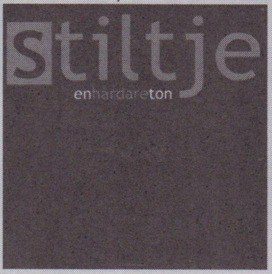
SECTOR SEXS/ST



数あるTRALL PUNKバンドの中でもトップ・クラスのスピード狂っぷりを見せてくれる彼らの初期作品。SECTOR SEXSといえばこれ！と胸を張っていえる代表曲"Klubb Europa"はこれに収録。明らかにサックスの使い方を間違っている素っ頓狂具合は笑いしかこみ上げてきません。後にSECTOR SEXと改名しますがつまらなさだけが増強しました。(S)

(HOT STUFF/ÄLMHULT7)CD 1994年

STILTJE/EN HARDARE TON



お前らどんだけドラマチックなんだよと突っ込まずにいられない壮大なイントロから一気にトラコア・ワールドへ雪崩れ込む劇的な1曲目。全世界へ影響を及ぼしているUS色を一切感じさせない、閉ざされた氷世界を感じずにはいられない。BOLD(not NYハードコア)の改名バンド。夢でうなされそうな、よくわからないエモーショナル度たっぷりなところも面白すぎ。(O)

(SECOND CLASS KIDS/SCKID012)CD 2006年

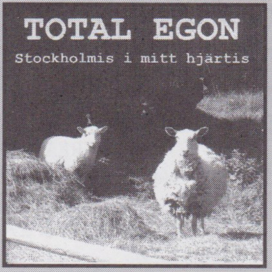
SIX GUNS/SILVER, SEX & SIXGUNS



STREBERSの変名バンドの3部作の第1弾。STREBERSと全く同じメンバーですが歌詞が英語になっているので結構がっかりします。一般的に駄作との見解ですが、思い入れ補正でUlkeが歌えば何だってかっこいい！と言っておきます。300枚プレス中290枚がピンク、10枚が青盤。(S)

(KAOS O SKRÅL/SIX-001)EP 1993年

TOTAL EGON/STOCKHOLMIS I MITT HJÄRTIS



DLKのMartのソロ名義バンドの3rdは泣く子も黙る老舗レーベルから。90年代のTOTAL EGONと比べるとだいぶ大人しくなってしまった感はありますが、Mart節は十分すぎるほど堪能できます。ネコ踏んじゃったのスウェーデン語カヴァー収録。(S)

(ÄGGTAPES/ÄGG-61)CD 2007年

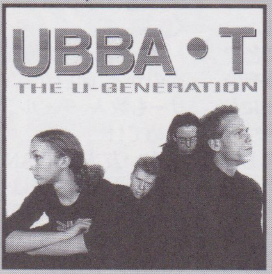
SKUMDUM/DEMONER



これは1枚目のアルバムで、この頃は全ての曲がSWEDEN語で歌われていますが、明るく染み込むようなメロディーでクセが無くSWEDEN語が苦手な人にも入りやすいと思います。最近の作品では英語で歌っていますが断然この頃の方が好きです。オリジナルのKAMEL盤は廃盤ですが、日本のBELLS ONから編集盤が出ていますので、ぜひ、聴いてみてください。昨年、来日ライヴで異常なまでの盛り上がりをみせつけてくれましたぁぁぁ！！(S)

(KAMEL RECORDS/KMEL022)CD 1997年

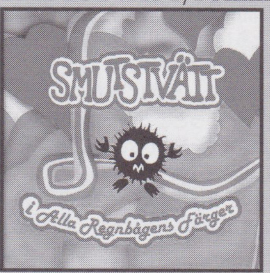
UBBA/The U-GENERATION



MartがDLK解散後にSTUKASのWikdahl兄妹のお兄さんと組んだバンドの1stフル・レングス。基本的にDLKとなんら変わりないMart節が炸裂したサウンドではありますが、コミカルなメロディーはさらに磨きがかかっています。女性メンバー在籍ですがいつの間にか脱退しちゃいます。(S)

(BIRDNEST/BIRD130)CD 2000年

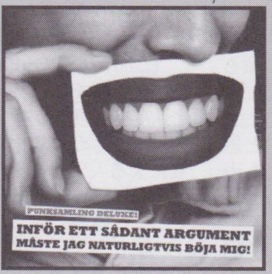
SMUTSTVÄTT/I ALLA REGNBÅGENS FÄRGER



TRALL PUNK新世代の扉をこじ開けたバンドのひとつであろう若者4人組のデビュー作。1曲目から地球規模の壮大さを感じさせるイントロで始まり、曲に入るとDLK、RÄSERBAJSに影響を受けたであろうポップ寄りなTRALLサウンド。その芳醇なキャッチーさによりTRALL PUNKに目覚めた人も多いとか多くないとか。(Y)

(BUZZBOX/BRCD003)CD 2006年

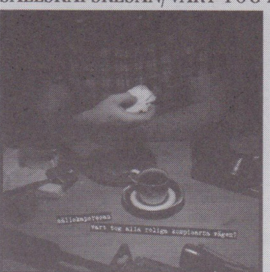
VARIOUS ARTISTS/INFÖR ETT SÄDANT ARGUMENT



ASTA KASK、SOTLIMPAから広がったトラコア・メロディーをメロディック的解釈で受け継ぐ現行TRALL PUNKバンド総勢18バンド、そして18レーベルが絡むサンプラーCD。現在活動しているバンド中心に収録されているので、今のTRALL PUNKシーンを知りたい人にはピッタリな作品です。しかし、TRALL PUNKやってる人たちって、実年齢以上に見た目がおっさんが多いのはなぜだろうか(笑)。(O)

(KfLP(r)/KFLPR004)CD 2008年

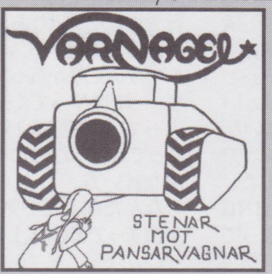
SÄLLSKAPSRESAN/VART TOG ALLA ROLIGA KOMPISARNA VÄGEN?



KALABALIK I LINGONSKOGNENという鳴かず飛ばずのバンドをやってたメンバーがDLK、TOTAL EGONのMartプロデュースにより改名して再デビュー。まさにTRALL PUNK新世代のサウンドを地で行くような臭さや暗さの少ないわかりやすいサウンドを奏でてくれます。(Y)

(BUZZBOX/BRCD005)CD 2008年

VARNAGEL/STENAR MOT PANSARVAGNAR

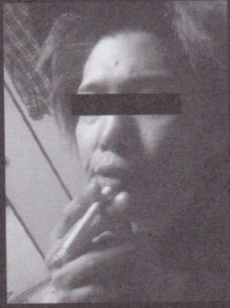


1999～2008年までストックホルムを中心に活動していて、どのリリースにも素晴らしい楽曲が詰め込まれていますが、その中でも脂の乗りきった時期にリリースされた2枚目のアルバム。展開が多く作り込まれた楽曲は何百回聴いても決して飽きません。90年代を代表するTrall punkバンドRÄSERBAJSと比較されることの多い彼らですが個人的には全く負けてないと思います。TobbeはJÄRNMALMで活動中。(S)

(BEAT BUCHERS/ORCD 47)CD 2006年

GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE 第二回

TEXT:PAINTBOX 宗



さて、連載２回目です。

まず前号の訂正ですが、PAINTBOXのアルバム「Trip,trance & travelling」(HG143)の価格についての経緯ですが、まずチェルシーが１曲200円位にしたいと言ったらしく、そしたら3000円越えちゃうよ!高すぎ!って事に成り、そのあたりを考慮し、出来るだけ安くしたいっていう俺の意見も聞いて2700円に落ち着いた、という訳でした。

チェルシーの件は俺、知りませんでした。訂正いたします。

アナログの方は２枚組みで2000円で売っているので、まあ良しとして下さい。

で、前回は俺がパンクと出会った頃から、PAINTBOXに入るまでの過程を超はしょって書きましたが、物はついでということで(実際はもう書く内容が思いつかない)その後の初期のPAINTBOXの活動と、いかにして俺がヴォーカリストとして、ペイントの一員として成り立っていったのか書きましょう。

以前も申しあげた通り、俺は楽器を持ってちょっとばかし歌った事はありましたが単独でのヴォーカルというのは人生初めて!超、の付く素人でした。

ステージの真ん中に立って歌うなんて・・・。実際、バンドを始めた子供の頃もヴォーカルをやってみたいとは思ったこと無かったなあ。

誰でも一度はヴォーカルをやりたいと思う事が多いらしいけどね。そんな発想も出ないほど、引っ込み思案でいかにもベースっぽい性格の俺でした。

しかも誘われてるのはリスナーとして聴いていて、常に第一線で活躍していらっしゃるチェルシー氏率いるバンド。注目度が高いのは馬鹿でも分かります。

当時はヘルプ感覚でやっていたSCREAMING HOG(ギター・ヴォーカル)を、俺、ギターでもヴォーカルでもないんだよな・・・と思いつつ、ベースのバンドが無かったし、いつまでもヘルプ感覚じゃメンバーに悪いなと思っていたのでじゃあそろそろ本気でやってみるか・・・と思い始めた直後でした。

PAINTBOXに入ったらSCREAMING HOGのメンバーに悪いな、本気でやるって言ったばかりだしな、というのも断りたい理由でした。マジメでしょ俺。

もし、この頃ベースのバンドがあったらギター・ヴォーカルをやってデモ・テープ作る事も無かっただろうし、たまたまALLMANに置いてもらったら、店長の佐藤君がチェルシーと長い付き合いで・・・・偶然が偶然を呼び、俺〜たち〜は出会〜った!by 虎洲斗。

のちにSCREAMING HOGのベースのさくらはJUDGEMENTへ加入する事に。

ホント、世の中どうなるか分らないものです。予測がつきません。

で、なんとか断ろうとする私ですが、リーダー宅に呼び出されてまでのごり押しが続く。

チェルシーが俺をどうやって口説き落とすのかと、面白がって見に来たというギャラリーも数人、チェルシー宅へ来ていました。やめて!!

古い友人のEVANCE奥山の「やってみればいいじゃん。俺はやって欲しいな!」との熱い薦めに悩み、揺れる俺。

後で聞いてみればチェルシーが奥山に「お前からもガンガン薦めてくれ!」と指令が出ていたらしく、結局はまんまとはめられた感じの俺でした。

で、加入する前に１度見に来てくれ、と言われ、アンチに３人のペイントを見に行った時、当時鉄アレイの葛田君がニヤニヤしながら話しかけて来て「君が今度、岸田君とこに入る人?頑張ってね〜(ニヤニヤ)」と言われ嫌な予感が加速する俺の心。

「俺も下手糞だし、一緒に頑張ろうよ」と言ってくれる、見た目とは裏腹でやさしいベースの中さんを心の拠り所にスタジオへ行きました。「とりあえず、一緒にやってくんだから敬語なんていらねえよ」と言われたのですが、だからって急にタメ口は無理だし、一緒にやってくって・・・・?何度か練習入って、正式メンバーになるか様子を見るって事だったのに・・・やる事に決まってる風な言い方。

なんだかんだで気付いたらライヴが4、5本決まってました。しかも最初から二日連続のライヴ。スパルタですな。一応ライヴやっておかしかったらこの話は無しで。と約束しての初ステージ。というか初のヴォーカル体験。どうするかなんて何も考えず臨みました。

1998年6月20日、新宿アンティノック。対バンはEVANCE、DSB、UNWISE、IDORA。

目の前にはお京さん。今では一生懸命な姿が恥ずかしくて初期の映像はみてられませんが、問題は「何とかなってしまった」という事。辞める理由が無くなってしまったのでした。

翌日のライヴもなんとか終え、数日後のライヴはNightmareのOSAMOON追悼で、全国オールスターな豪華メンツ。いきなり獣の中に放り出された草食動物的な俺。

悩む暇も与えられず、1st EP「炎/砂漠」のレコーディングの話も決定。

ホントに俺でいいの??ちょっと待ってよ!ってのが正直な所でした。

そして最初は「むね君」なんて言っていたリーダーも段々慣れてくるにしたがって徐々に本性を現し始める・・・。初のご乱心の時は何が何だかわからず、困惑するのみ。

まあ、いつの間にかトチ狂った先生の通訳まで出来るようになり、非常時には即出動するまでに成長する俺ですが。

初ご乱心の時にそっと横に座り、目の前の酒瓶や危険物をそっとどかす、現ORDERのカズの見事な動きを忘れることは出来ません。さすが直弟子。

これは俺は気を張ってないと出来ないな、と悪いものはしばらくやらなかったもんな。

特に初のツアー時(w/EVANCE)では「こんなに大変だとは・・・」と痛感いたしました。

俺は当時まだまだ人見知りで、しかも風邪もひいていて辛いのに「クールでいいな、おめえはよ〜!」と責められる俺。機嫌悪いリーダーに困惑。

そんなツアー中、やばすぎてちょっと笑っちゃった事件が。

途中参加のORTHOFIX号に「女ばっかで

楽しいから」とよく乗り込んでいた為、大阪から出発時にすっかりORTHOFIX号に乗っているとばっかり思っていた俺らは出発。
しばらくしてORTHOFIX号に連絡を取ってみると「え？こっちにはいないよ？」と一言。
慌てて泊まっていた家に連絡を取ったところ、いました、便所に入っていて置いていかれた先生が・・・。「長い間バンドやってきたけどよ・・・こんな目に遭わされたのは初めてだよ・・・。早く迎えに来い」とひくーいトーンで激怒しております。
ヤバイ!と勿論思いましたが、やばすぎてちょっと笑っちゃった俺を見て当時ベースの川口君は「笑ってんなよ!」と言いつつ、ちょっと笑ってました。
この事はリーダー、しばらく引きずってました。どれだけやばかったと言うと、金にうるさく、普段は絶対に人におごったりしないスグルが出資し、先生の大好物、うなぎをおごる程でした。
大阪でイメクラのビルに泊まった時、機嫌の悪いリーダーを笑わせようと数人でコスプレ(特にEVANCE大坂氏の網タイツ姿はもはや犯罪)をしてリーダーの部屋をノック。
しかしメガネ無しのド近眼で、軽くラリってらっしゃるチェルシーは何も気付かず「なんだよ、ムネ。用があんなら入れよ」といたって普通、いやちょっと不機嫌。「いや、なんでもないよ・・・」とひどい格好の俺らは空しく、退却したのでした。

で、初のツアーも終わり、ライヴを重ね、そろそろ1st ALBUMのレコーディングするって頃かな、ようやく俺ってヴォーカルなんだって実感するようになったのは。歌詞も書き始めたし。
会話がヴォーカルを意識する会話になったって誰かに言われたっけ。
歌詞がまたペイントは大変で。チェルシーは歌詞もガンガン書くから、ちょっとまずい歌詞だと速攻ダメ出し。オメーこんな歌詞は他のバンドに任せときゃいいんだよ!って感じ。
でも韻をふんだり、言葉遊び的な事はペイントやって勉強になったな。

いつかフル・アルバムを出せるバンドをやりたいってのを目指していたので、何とか最低限の夢は叶ったのでした。それもなかなかの自信作で。「Singing Shouting Crying」(1999 HG Fact)がそれです。
今、改めて聴いてみるとこの時点でかなりのオリジナリティ出てると思いますが。
PAINTBOXって何々に似ているね。ってあんまり聞かないでしょ?
思うにチェルシー先生の作曲能力ももちろんですが、ヴォーカルの自覚が無かった為、影響を受けたヴォーカリストがいるわけでもなかったのが、逆に功を奏したのでは、と思うんですが。
あと俺が特にDEATH SIDE大好きっこ!って訳じゃなかったのも、変な堅さ、固定観念を生まなかったのかな・・・なんて思ったりもしますが、どうすかね(一時期ハードコアを聴かない時期があったのでDEATH SIDEのカッコよさは後追いで知ることになりましたが)。
あとチェルシーの作ってくる喜怒哀楽ありの曲に感心はしたけど、プレッシャーを感じたりは無く、面白いなと思えたのも良かったのかもしれない。

レコーディング中、わりと淡々とこなす俺に「オメー少しは緊張したりしないの?かわいくねえな」って言われましたが、いいじゃんね、別に(笑)。
1st EPの録音の時、「俺、この日来れないです」って言って、なんで?と問われ迷い無く「プロレス見に行くから」と言った事は、いつまでも「こいつ入ったばっかのクセにプロレス行くから来れねえって・・・俺が今まで見たいライヴ、どんだけレコーディングとかライヴで行けなかったと思ってんだ!」とあきれておりました。でもね、長州力の引退試合だよ。当然、闘強導夢へ行きますとも。
だんだん俺のなめた性格とブラックな性格が分かってきたリーダーは面白がってました。
あの人もブラックだから気があって、他のメンバーが会話についてこれない事もしょっちゅうでした。

まあ、ヴォーカル出来ちゃった件で思うのは、人間やってみたら意外にも・・・って事がたまにありますね。
例えば、MOBSではドラムだったSINさん(R.I.P)がCITY INDIANで凄いヴォーカルしてるし。
TRASHのマーチンさんだって、元ドラムだしね。悪意の小出くんも元ドラムだね。BANDIT!!
チェルシーもデビューはドラムか。EXECUTE。Mental mayhem!!!

あと、当時よく対バンもしたしツアーも行ったしで、同世代っていうかライバルっていうか、意識してるヴォーカルが数人。やっぱ現CROSSFACEの大坂君とか。BLOW BACKパイン。あとはVEKTORサカタとかね。
ヴォーカルとしては皆、先輩だけど年も近いし、存在も近かったから同期な印象があります!
頑張って欲しい!!でも負けねえぞ~!!
最近、トークの部分ではRYDEENが気になる。プライベートのトークもテクニシャンなタケヒサに注意だ!
つーかハードコアでトーク関係無いか。いや、ペイント的にはあるなあ、やっぱり(笑)。

あと、これはマジメな話だけどヴォーカルってたまに凄く孤独な気持ちになる事があるんだよね。
俺が楽器出身だから余計思うのかもしれないけど・・・・楽器の３人が一丸となって演奏してる時に、なんか参加出来てないって言うか、うわ物だなあ～、って感じると言うか・・・・・。一丸となって上り詰めることが俺だけ出来ず、置いていかれるような。
確かにセンターに立ってて、みんなの目が行くからバンドの顔ではあるんだけどね。分ってるんだけど。
ヴォーカルも楽器の一部だって思える一番のジャンルやってるのは分ってるから矛盾してるけどね。
全国のヴォーカルの皆さん、そんな経験ございませんか?
ただの被害妄想だったりして・・・・・。

そんなマジメな事も思いつつ、ライヴも慣れてくるもので、元々神経がおかしいのかライヴで緊張しない俺は、いつしか度を越し、３人のインプロが始まっている時にステージ上がる前に下でメールをしていて怒られました・・・と言うかチェルシーは怒りを通り越して爆笑してました。
お前なめ過ぎ!って。
後期はチェルシーがしゃべりまくって、俺が突っ込むというのがありがちになり、MC多くて曲間が長くなっていき、一部では「話長えよ!」と批判の声もあったようです(笑)。しかし、トークが楽しみで見る、という悪循環なパターンもありました・・・・・。

てな感じで、今回もとりとめも無いまま、起承転結まるで無視な感じで行数が無くなってきました。
まだまだペイントについては書ききれませんが、次号で話しが続くかは全く分りません。
ノー・プランですから。
多分、毎回俺のこれはそんな感じだと思うので、俺に何も期待しないで下さい。
しょせんただの社会不適合者なので。と言いつつ意外と普通な人なんです。
ではまた!!!!はたして次号も連載は続くのか????

THE THUNDERBOLT! VOL.3

TEXT:TAKAYAMA(NIGHTMARE/PUNK AND DESTROY/FRAMTID)

皆さま、こんにちは！今回も例に漏れず山路編集長に数日、締め切りを延長してもらい、ぎりぎり間に合わせる事ができました、この「the　THUNDERBOLT!」。さてさて、連載3回目にして、急展開を迎える事に、なるのでしょうか…？とは言え、これを読んでいる皆さまにとっては、急展開しようが停滞してようが特に別段なんてこともない、ある筈がないような、偏った内容がこれからも延々とグダグダに続いていきますが、やっぱり偏ってなんぼでしょう！誰も全部を手に入れる事なんて出来ないし、どこもかしこも当たり障りの無い生温い嘘秩序嘘道徳ばかりです！ヒロトも唄ってました、「壊したいんじゃない　壊れてみたいだけ　粉々に」って。「見てきたものや　聞いた事　今まで覚えた全部　でたらめだったら面白い」とも唄ってました！それでもって、「ルール破っても　マナーは守るぜ」これもんで、そしてですね、横からマーシーが、ぼそっと、「自由な心で居ましょう」コレですから！(笑)「ダイブは、あり？なし？」とか、「もし再結成したら、あり？なし？」とか、いつまでもインターネットの隅っこでガタガタぬかしてる連中、お前ら全員、給料もらった直後に財布無くして困ればいい！(笑)

しかし、このEL　ZINE、もちろん編集長はこれで生計を立てている訳ではなく、これだけしっかりと作られているが基本的には所謂DIYのFANZINE。連載の話を持ちかけられた時、連載を持つという行為、その事自体とか、内容に自信ありだったのかどうかなんてのはまぁ置いといて、スケジュール等の現実的な点は、「まぁいけるだろう！」と、割と軽い気持ちで二つ返事で引き受けたはいいものの、皆さんもご存知の通り、創刊以来、想定外の猛烈ハイペースで刊行されてきたし、これからもされて行くのであろうと思われるのでさぁ大変！(汗)無理やりまとまった時間を作り、それなりに苦労しながら、これでも一応、毎回真剣に取り組んでいますが、前回なんて、6800文字ですよ！？(汗)原稿用紙にして17枚分くらい？この歳になって2ヶ月に一度ペースで、このように長い文章を書く事となるこの展開など誰が予測できたでしょうか！？

今回、「もう殆ど出来てるんですけど、自分的に、あと少し何か足りなくて…、すいません、あと2～3日待ってください!！」と、山路編集長に締め切り延長をお願いした3月9日の時点で、実は、まだ全く何も、一切とりかかっていなかったというのは、現在3月10日の深夜、この時点ではまだ秘密にしたままだ(笑)。しかし今回ばかりはこっちのケツにもさすがに火が着きました、ただ今、まさに締め切り寸前10時間前、これマジで！(笑)怒涛の巻き返しで定時入稿目指して開き直る一人の深夜、自宅でサンダーロード状態です！結局、更に待たせてしまい、3月12日に何とか滑り込み入稿セーフ！(汗)

さて何を書こうかとずっと考えてたのですが、これまでは自分がいかにしてPUNK ROCKに、音楽に、のめり込んでいくのかというお話でしたが、はっきり言って自分でやってて自分で真っ先に飽きてしまったので前回が最終回です！(笑)とりあえず、気の向くままにつらつらと。

つい先日、ROCKIN'　ONという、たま～に読む音楽雑誌があるのですが、それに、別冊付録として「ザ・ブルーハーツ・マガジン」なる小冊子が付くとの事で、1987年、1stシングル発売直前～解散発表直後までの数回のインタヴューの復刻、という内容でしたので、読みたく思い、買いました。表紙をめくると、見開きで、あの、LIVE　VIDEOにもなった、日比谷野外音楽堂の時のだと思うけど、ブルースハープを吹くヒロトの姿がドカンと載ってて、「今更、柄にも無く思うけど、改めてこう見ると、本当にキマってるなあ、かっこいいねぇ！」等と、柄にも無く思ってしまったのです、つまりは、そうです、その、もはや完璧と言いきってしまってよさそうな、ありえない程のかっこ良さにもう、いきなり、目が釘付け、グワングワンにハートを揺さぶられてしまったのです(笑)。

最初は、1987年のインタヴューが掲載されてて、前述ですが、「TRAIN-TRAIN」が出た頃にハマった僕ですので、初期のインタヴューに触れる機会も、そう言えばこれまであんまし無くて、どれどれと、じっくり読ませていただきました。やはりと言うか何と言うか、ヒロトの言ってる事はこの頃から既に現在とあまり違いが無い、それどころかthe BLUE HEARTS～the HIGH LOWSそして現在に至るthe CRO-MAGNONSと通してず～っと同じ事を言い続けてると言ってもいいと思う。the　BLUE　HEARTSの最初の2枚目くらいまでは、「劣等生」的な、所謂ロクデナシな目線で書かれたナンバーが多いけど、こうして改めてインタヴューなんかで読むと、やはり核たる部分が今と殆どおんなじである。現在はthe　CRO-MAGNONSとしての活動で、「ツアー最終日にツアー初日のLIVE DVDをリリース」する位、全国各地をまわりながらこれまで以上の数のLIVEをやりこんで、かつ、雑誌でのインタヴューやTV、岡山の情報誌にヒロトが連載を持つなど、より媒体への露出も増えたが、そこでの発言の数々、「ロックンロール以外どうでもいい」とか「ロックンロールがあればそれでいい」とか、「やりたい事をやるだけ、それがロックンロールだからロックンロール」みたいな、ひたすらに繰り返される言葉の数々も、この1987年のインタヴューで発言している、「信じてることをやってれば上手くいくと思ってました」や、「やりたいようにやったらこうなった」とか、「何も考えてないですよ」等と、驚くほど完全に同じモノではありませんか、そうですよね？

そして思った、22歳～23歳そこらでこの仕上がり、凄い事だと思います、僕の20代前半を一言で表すなら、ずばり「ほんっまにすいませんっ!!!」みたいな感じでした(笑)。人間的に、相当とんでもなかった筈ですが、そんな僕でも礼儀作法なんぞも身につけ、上には上が居る事も学び、ずいぶんまともになったのではと思うが、それでも核の部分は若き頃と変わっていないままなのですが、でもこの違いは大き過ぎです(泣)。

最近のインタヴューなんかでは、ロックンロールの話だけでも飽き足らず、もはやアナログ・レコードの凄さを宇宙空間的な話にまで展開させ、だからCDのそれと比べていかに大した事が無いか？を延々と語って

るだけだったり、まだまだ衰え知らずの青天井状態に仕上がり続け、ほとんどついて行くので精一杯、そんな風に、計り知れない奥深さを匂わせておいて、しかしいつも最後にはやっぱり「ロックンロールだけあればいい」等と、まるで禅問答の様相を呈している、本当にどこでも同じような事ばかりを繰り返し言っているだけなので、雑誌にインタヴューなんかが載ってても、「どうせまた、ロックンロール最高なんでしょ!?」なんて、こんな僕でも、立ち読みする事すら躊躇してしまう程の常識外れのねちっこさが健在どころかますます暴走!マーシーの詞なんかにいたっては、すでに赤ん坊言葉の「あー、あー」とか「だーだーだー」みたいな言語の繰り返しに終始するナンバー等がどんどん増えてきて、もはや誰にも理解不可能なレベルにまで突入していると思います。奥深いのも行き過ぎて、一周グルンと通り越してまた表にめくれてしまった感じなのでしょうか?やりこんでやりこんでたどり着いた、無駄を完全に削ぎ落とした、イントロはおろかギターソロさえぶっちぎったシンプル過ぎるショートナンバーの連射、完全にライヴ仕様と意識して作られたであろう、ここぞと言うとこで観衆が一斉に「OI!」とか「イェーイ!」と飛んで叫べるような、しらじらしいまでのアッパーなナンバーもたくさんあるが、何故また今更?はたしてその真意とは?わかりませんが、とにかく彼等はすでに前人未到の未開の領域に到達しているのは間違い無いので、これからも続々と早いペースで我々の元に届けられるであろう出来たてホヤホヤの新曲が今から待ち遠しいです!

ところで、the CRO-MAGNONS、素晴らしくかっこいいけど、もちろんthe HIGH LOWSも!意外にもthe BLUE HEARTSしか聴かないという人、the BLUE HEARTS～the HIGH LOWSまでしか聴かない人も、結構居ますよね?わかる気もするけど、勿体無いな!と思うし、是非聴いてみて欲しいです、特に、30代前半～40代前半くらいの人で、若い頃にthe BLUE HEARTSにどっぷりハマった経験のある人ならばなおさらで、現在の彼等の振り切りっぷり吹っ切れぶりを目の当たりにすれば誰だってイチコロで夢中になってしまう筈です!

さて、ここで唐突にも話をガラリと変えさせていただきますが、かれこれ22年間、彼らの、そしてヴォーカリスト甲本ヒロトの熱心なファンで居て、かつ、仮にも同じ音楽畑の世界に身を置いて既に14年ほどにもなります。これまでに何度か、彼等のLIVEに出向いて行く事だけでなく、それ以外での思い出なんかも、それなりにたくさんあります。

一番最初に、ナマで彼等に触れる事が出来たのは、あれはそう、確か僕が中学二年生の時かと思いますが、大阪は中央区、心斎橋にあったPARCOという、現在はLOFTビルになっている場所にて、某カメラマンの撮影した彼等の写真の展覧会＋写真集の先行販売のイベントがあり、初日かな?なんとthe BLUE HEARTSが会場にやってきて、来場者に握手してくれるというのがありました!朝からPARCO前に並び、開店してから握手会に参加する為に必要な整理番号を受け取り、時間を潰しつつ適当な時間に会場へ。ワクワクしながらたくさんのモノクロ写真を眺めつつ、いよいよ時間、the BLUE HEARTSが登場!沸き起こる歓声、ちょっと信じられない気持ちの俺。壇上で、司会者との軽いTALKなど挟み込みつつ、いよいよ、彼等との対面を待ち侘びる人の列が彼等めがけて流れ始めた時、僕は人生史上5本の指に入るであろう位の、全く笑えないレベルの緊張感に包まれ、本当は嬉しい筈なのに、ここへ来てしまった事を激しく後悔はしたが、ここまで来たらもう引けない、ここで引いたら只の馬鹿ですが、まぁそんなこんなでしどろもどろになってる内にあれよあれよと順番がまわってきた時の、あの忘れもしない感じ。自分のほっぺたをつねってしまいそうになる位、今まさに目の前にこうして4人が普通に座って居るという超現実的な現実。あの瞬間こそが、よく言う、「全ての時間が止まってしまう」だったのではないかと思います。あれぞ、無の境地と言うか、ただ自分とthe BLUE HEARTSの4人が向かい合っているだけ、その他一切合財の存在が消滅した一種の真空状態みたいな、ほんの2～3秒だったが、永遠にも感じられるような瞬間でもあったり、スピリチュアルな珍しい体験でした!ただの思い込みだった可能性も、否定しませんが(笑)。

こうなったらもう覚悟を決めて、狙うはヒロトのみ一点集中型!梶君も、河ちゃんも、お互い目を見合って握手できて心から感激したし、やっぱりバリバリ渋いマーシーもたまらなかったが、いよいよ俺の対面にホンモノのヒロトが!ありったけの想いを眼力に込めて、目で殺す覚悟で挑んだが、目と目が合ったその瞬間、「ダカダカダン!パニック!!」コレもんだもんで、鼓動が倍速になり、噴出す汗、眼球は泳ぎまくってあたふたとテンパりまくる俺から、ヒロトにぶつけたこの想い!しかし、結局それは「がんばってください!」という、極めて当たり障りの無い残念なモノだった訳で、当然こんなでヒロトのハートになど、かすめる事さえ出来る筈もなく終了、退散(泣)。まぁ現実なんて、こんなもんです…。

セカンド・コンタクトは、それから10年以上も後の事になりますでしょうか?the BLUE HEARTSはとっくに解散し、ヒロトとマーシーはすでにthe HIGH LOWSとして活動、中～後期the BLUE HEARTSを上回りそうな勢いで大活躍中、片や僕はというと、大阪のNAT RECORDSで見習い修行的な時期も終えて、少し仕事が楽しくなっていた頃でした。大阪のアンダーグラウンド、GLOOMやCORRUPTED等をはじめとする凄まじく激烈なハードコア音楽の深みにどっぷりと漬かっていたドス黒い日々、the HIGH LOWSの作品は買ってはいたが、LIVEにも行かず、こっちの事で精一杯やっていて、何かと余裕も無く、思えば生きてきた中で最も、ヒロトから心が離れていた時期だったのかもしれません。とある日、Cさんと2人の店内、いつもの感じで程よく緊張しつつも仕事に精をだしていました。職場での僕の定位置はカウンター内側レジ前、ちょうど店への入り口の対面です。確か、レコードに付けるカードなんかを書いてた時だった筈ですが、入り口に人の気配を感じ、「いらっしゃいませー!」なんて顔を上げてみると、そこにはそう、それはあまりにも唐突にでしたが、正真正銘ホンモノのヒロトとマーシーが、ぐんぐんと店内に入って来る姿が目に飛び込んでくるもんですから、僕はもうそれこそ一瞬の内に「ピキーンッ!」と、カチンコチンに固まってしまったのです!店内をフラフラと物色する2人を認識はしてたけど、マジでまともに顔を上げる事が出来ず、姿を直視も出来ないような極度の緊張状態でもう心臓バクバクのフラフラ汗ダク!横に居たCさんもすぐにヒロトとマーシーに気がついて、「あ、あの人、高山のめっちゃ好きなアレやんけ。握手してもらったり話かけたり、せんでもええんけ?」等と言って来ましたが、ロクに返事も出来ない硬直した僕の様子、その異変に気付いて、「おい高山、どないしてん?大丈夫け?もしかしてそれ、緊張してんのけ?じぶん、たったこんだけの事で、ほんまにそんなん、なっとんのけ?(汗)」等と、どん引きしていました。ヒロトとマーシーが、D-BEATのハードコアやPOWER VIOLENCEの7"ep等、聴いている筈も無く、初期PUNK再発LPのコーナー周辺をサクサクっと見て、2人でちょこっと何かしゃべって何事も無かったかの様に出て行ってしまいました。時間にするとほんの4～5分だったと思いますが、蛇に睨まれた蛙と言いますか、いやいやあん時は本当にびっくりして死ぬかと思いましたよ!(汗)あと、あの狭い店内に、ヒロトとマーシーとCさんと僕との4人だけという絵図も、今考えてみてもシュール過ぎるし、面白かっただろうに、やっぱり、4人で写真の一枚でも撮ってもらっておけば良かったかな。

他にもエピソードがあって、それも書くつもりだったけど、またもや、いいところで文字数が尽きてしまいました!これからも、じわじわと核心と本質へと迫ってみたり、引いてみたり、気の向くままに、多分まだまだ続きます、このThe THUNDERBOLT!山路編集長、今回は本当にすいませんでした(笑)。これからも、ルール破ってもマナーは守るぜ、そして締め切りも守れるよう頑張ります!それでは皆さま、また次号で!(^3^)/



KATSUTA (K) x SAKATARUIDE (SR)

サカタルイードの「とびっきり対談・東京ハードコア編」

最速で生きているボクの基本型は「ワクワクする方向に、チカラを加えてねじ曲げる!」…たまにやり過ぎて怒られるけどね(涙)。というワケで「突然」でしょうか?「ベタ」ですか?
今回はTOKYO HARDCORE TATTOO、EXTINCT GOVERNMENT、P・I・M・PのKATSUTA君の登場でっす!終始笑いっぱなしの対談ですが(笑)。読者諸君!やっきりコイちゃおえんでね。ヤゴいハートにゃバイバイババイバイっ(シンフォニック)!最後までYONDE&DESTROYっ!!

K「(マイクに近づいて)こんちわ～(笑)」
SR「こんちわ(笑)」
K「何これ?」
SR「あの、『EL ZINE』つって…」
K「あ、分かった!なんかみんながコラム書いてるやつだ!」
SR「そうそうムネとか高山くんとか」
K「(マイクに)ボクにもコラム書かせてネ～(笑)」
SR「(笑)…KATSUTA君、お店(TOKYO HARDCORE TATTOO)はどうですか?」
K「目指せ全国制覇で～す＼(^o^)(笑)★」
SR「でも『高円寺にしよう』ってのは最初からあったの?何でココに?」
K「パンクの街だから!(笑)きんちゃんとやろうとして一緒に決めたの!名前も、あとDOLLがあったから(笑)!」
SR「(爆笑)!」
K「新宿とか原宿とか考えたけど家賃がべらぼうに高いから」
SR「あぁ、高そう!」
K「そんで高円寺にしました。んで最近は…ホームページやビラとか、あーいうのを真面目に考えてやろうと思って」
SR「お客さんは多いですか?」
K「お客さん、最近また良くなってきたよ～♪パンク系…とかはあんま来なくて、でも噂では『コワイ店だ』ってなってるみたいで(笑)」
SR「(笑)」
K「だからね、この辺全部(店内の装飾や凶器を指差して)釘バットもピンクに塗ったの。可愛いでしょ(笑)」
SR「(笑)。例えばちょっと前だったらこう、トライバルが多かったりとか、何か今の流行りってあるんすか?」
K「あ～、そういうのは無いけど…見えるトコに入れるヒトが増えたよね。手の甲だとか首だとか、まぁそういうノーフューチャーなヒトをたくさん作りましょう…まる(笑)」
SR「(笑)。ハナシ変わるんですけどライヴとかって自分出ないやつとかも行きますか?」
K「適当に行くよ」
SR「あ、でも20000VとGEARが無くなっちゃって…」
K「あ、そうだね。消防法百五十ヶ所ひっかかっちゃったみたいだもんね。(笑)…うん、結構…遠くから来てるバンドはなるべく行くように、情報が入れば行くようにしてる」
SR「その、シーンはどうですか?昔と比べてっつーか、盛り上がってる?」
K「年齢がそのまま上がってんじゃないかな?ピラミッドのさ、上が上がると共に下がいないから。多分アンケートでもとったらお客さんの平均年齢が30とかじゃないの(笑)?」
SR「(笑)。そこからこう下の、若いヒト?もライヴハウスで見ますか?」
K「いやそれは、やっぱり今30とか25歳くらいのバンドが頑張ってくんないとねぇ」
SR「めちゃめちゃ若い子とか居ないスか?」
K「うん、たま～に、見掛けるけど前ほどほら、流行ってるワケじゃないから」
SR「あぁ」
K「もうちょいね、カッコイイPUNKバンドが出てくるとイイんだけどね」
SR「あのKATSUTA君がもうひとつやってるのって『P・I・M・P』で『ピンプ』?」
K「そう『ピンプ』」
SR「P・I・M・P結成の経緯は?」
K「ユウイチ君てヘルベントの、一緒に何かバンドやろうっつったけど両方ともベースだから(笑)。じゃあ『歌わないか?』ってんで頑張って歌おうと思って…始めてみました!ユウイチ君はやめちゃったけど(笑)」
SR「ヴォーカルやりたい、と思ったコトは?前から?」
K「あるにはあったけど、恥ずかしいから…(笑)」
SR「(笑)。うん、恥ずかしいもんね(笑)」
K「3…年ちょいくらいやって、やっと慣れてきましたね。歌詞も出来てきたし(笑)。面白くなってきました!もうベースなんか要らないね(笑)」
SR「(笑)だってKATSUTA君、家でベースとか弾かないでしょ(笑)?」
K「うん家にベース無いし(笑)、ヘルプだか

らアハハ!嘘です★これカットね(笑)」
SR「(笑)…最近の、例えばバンド関係じゃなくても『仲良しさん』は誰ですか?」
K「最近…最近はね瓜田純士君っていって、ブログをやってる新宿生まれのエリートヤンキーですね(笑)」
SR「あの本とかDVDとか出てるヒト?」
K「そう、彼と最近仲良くて」
SR「見た目おんなじタイプだもんね(笑)」
K「色々面白いから、遊んでます(笑)。んで彼と『高円寺ダルク』という若者を更生させようという番組?自主番組を撮ろうとしています(笑)」
SR「(笑)。あのヒト確か格闘技…」
K「格闘技も、そうそう!やって無いんだよアイツ(笑)!やってなくてノリで出てんだよ(笑)」
SR「(笑)。へ〜」
K「流派は『不良』です」
SR「そこのビレッジヴァンガードにコーナーがあったよね?」
K「そう、あるある。んでたまにオレと間違えられたりとか、彼がオレの知り合いの店行ったら挨拶されたりしてるらしくて…腹立たしいです(笑)」
SR「(笑)。やっぱ似てんだ〜」
K「並ぶと似てないんだけどね〜(笑)」
SR「最近ガバメント(EXTINCT GOVERNMENT)の方はどうですか?」
K「ガバメントはね〜、ギターのヒトが…」
SR「スケキヨ?」
K「スケキヨがちょっと色々事情複雑で忙しくなりまして。エノは九州帰っちゃって…ギターを探したりしてて、これからまたトシと(スタジオ)入ったり昔の仲間引っ張り出したり(笑)。だからギターが四人体制くらいでやんのかな?いつも二人居ればいいや、って。あとのパートはヒマだから…多分大丈夫でしょう(笑)」
SR「あの、ツアーまわって、『初めて見るけどカッコいいバンドだな』とかって、居ました?」
K「最近記憶障害が多いので、急には思い出せません(笑)」
SR「アハハハハ」
K「うん(笑)。あっ!名古屋の九狼吽いいね!若手じゃないけど(笑)」
SR「うん!イイですもんね。それと……最近ディズニーランドは行ってますか?」
K「ディズニーランド行ってないですね…最近は…」
SR「どこ行ってますか?」
K「マラソンですよ(笑)」
SR「あ〜っ!KATSUTA君は練習するヒト?」
K「しないよ!しないで、出る!」
SR「全然?」
K「今回は〜…3回、走ったかな(笑)?」
SR「(笑)!ちょっと待って、シバタ(ZONE)とかは走っててオレが仕事帰りにすれ違ったりするノリだから」
K「あいつバカなんだよ(笑)」
SR「(笑)!」
K「んで、この前は静岡県の『森マラソン』行って」
SR「うんうん」
K「それの為に1回走った(笑)」
SR「アハハハハ」
K「もう完璧(笑)!」
SR「森マラソンの結果は?」
K「前より速くなってた」
SR「あ、そう」
K「練習しなくて!今回902のやつらとかホンガシ(ビヨンドヘイト)とシンヤ(シェイディグリンプス)とあの辺12人くらい出たんじゃないかな?」
SR「ふ〜ん」
K「東京マラソンはね、面白いからね」
SR「ん?なんで?」
K「ん〜何かね〜3万人くらい走ってるし沿道にもバカみたいにヒト居るしネ〜。ちょっと何かが違う」
SR「そこが楽しい?」
K「うん。楽しい!」
SR「つ〜か(東京マラソン)明日でしょ?」
K「明日明日っ。さっきゼッケン取っ替えてきたんだから。明日の為の練習は…そ〜だ!アタマ赤くしました(笑)」
SR「(笑)!大事大事、絶対」
K「大事でしょ?」
SR「うん。あとは何か…ガバメントとP・I・M・Pのリリース予定とか」
K「P・I・M・Pはね、ちょっとシングルとか出したり〜、ちょっとまだアレだけど…今PIZZA OF DEATHから出そうとかavexとか、面白いでしょ(笑)?白いTシャツを黒くさせてやろうかと(笑)」
SR「(笑)。ガバメントは?またDVDの『撮り』のライヴが?」
K「そうそう。そのコトで今夜ミーティングなんだよ、俺が毎年(Live DVD)作ってんだよね。それ以外は…リーダーがリキだから、オレは何も考えて無いのよね(笑)」
SR「(笑)!」
K「そういえば今年は何か曲つくって作品だすって言ってました〜(笑)」
SR「丸投げっ(笑)!」
K「(笑)!」
SR「DVDは年1ペースで出してる…んだっけ?」
K「そう、コンフリクト・フォー・フリーダムDVD、年1で出してるんだよね」
SR「前回は……アウトサイダー入ってるやつかなぁ?」
K「そうそう。賭でDVD¥999とかに安くして。今時DVDとか全然売れね〜から、やっぱバイタイ…ね。カタチはみんなコピーして出来ちゃうから。かなり値下げしたらね〜売れて元は取れるようになった」
SR「でも(ジャケットの)見た目ハデでイイけどね」
K「うん。ジャケ女性にかえたらいきなり売れるようになった(笑)!見た目大事っ(笑)!」
SR「大事っ!」
K「んで、後は…ゴチョウ君率いるハザードとガバメントも前にやってたPUNK ADDICTって企画が合同になりました。それで今日もゴチョウ君が来てるワケですね。(周りを見回して)あれ?居なくなった」
SR「ゴチョウさっき居たね?何か一言喋っとけば良かったのに」
K「(ゴチョウ風に)よろしくでーす(笑)」
SR「アハハハハ!」
K「(笑)。んなトコですかね?」
SR「多分…OKです(笑)。お疲れさまです。ありがとうございました」
K「お疲れさまで〜す」
SR「明日(東京マラソン)頑張って下さい」
K「は〜い。ありがとうございます、頑張りま〜す」
(無事に完走したそうです★)

いかがでしたか?ボクは根っからのパンク・ロッカーでスポーツは総合的にFUCK(観戦はわりと好き)ですので文中『マラソン大会』のくだりでシラケた雰囲気が出てしまっているとしても、それはボクの素直な反応です(笑)。
KATSUTA君のお世話になって15年(もっとか?)。昔から気になっていた疑問点は何でもその場で質問してくるんですね。「これ誰の曲?」「何で髪切ったの?」「それ何のTシャツ?」…etc。やはり常にアンテナを張り色々な物事にスゴく興味があるんだろうな〜、と勝手ながら思います。
お互いにいつまでも見た目を大切に(笑)!次はステージで勝負しましょう。歌い方…教えてあげるから(笑)。
またお店に寄らさせていただきますネ。

Live予定

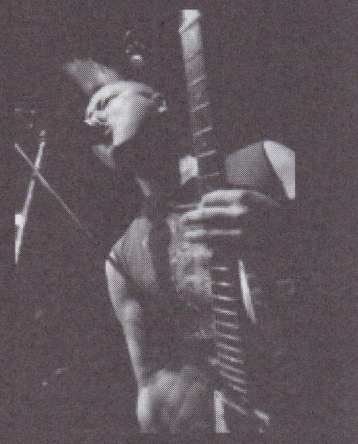
P・I・M・P
4月25日(日)　新大久保アースダム
「KING OF TATTOO LIVE」

EXTINCT GOVERNMENT
5月30日(日)　新宿アンチノック
「PUNK ADDICT」

お店ホームページ
http://tokyohardcore.jp/

VEKTOR
5月15日(土)　初台WALL
「SHADOW THE PIPER12 × SEASICK JAPAN TOUR 2010」

http://vektor.moryou.com/



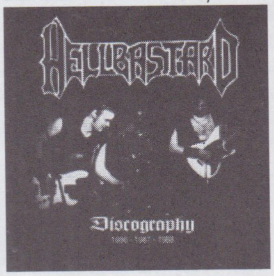
4月はVEKTORのライヴが無いんですね〜。そこでボクがプロデュースする浜松発ハードコア・パンク・バンド『902』のナオマサのカッコいい写真をパチリ!

SATANIC OCCULT DEATH III

TEXT:二ツ木正康

VARAUS！再発されましたね。この号が出る頃にはかなり日本にも出回ってるかな?!最近、革ジャンに凝ってます。というか革ジャンを探すのに凝ってます。アメリカン、ロンドン、色々なタイプがありますが、リサイクル・ショップ系を探しています。ソレをかっこよく着れたら最高ですよね。要は何でもソレがそこにハマるか、ハマらないかって事なんだと思います。ブカブカ革ジャン、スパッツ、弾丸ベルト、アーンド、テニス・シューズのDESTRUCTIONはスゲーカッコイイし！

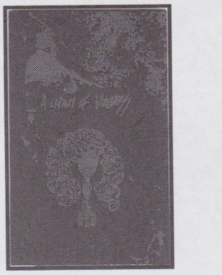
HELLBASTARD/Discography 1986-1987-1988



この音源で一番の美味しいところはEP音源の"They Brought Death"が初CD化されているという部分。オリジナル・フォーマットはカラーVINYLで何色か出ていてクソコレクター心をくすぐられましたが、中古で一枚買うのも結構な値段がしますのですぐ断念しました。当時のPUNK-METAL連の中ではMETAL色が強いイメージでしたが、それが後のMETALCRUSTソングのアルペジオ導入などの基本アイディアになったと思います。

(Shaman/sr-021)CD

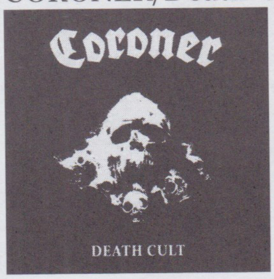
SLAUGHTER STRIKE/A Litany of Vileness



実はRAMMER/G.A.T.E.S. Split 12"っていう話があったんですよ。ジャケ絵はハルシーちゃん仕様で。マスターも送って、ジャケも90%完成していたのですが、事情があり話が流れました。んでこれはTHに行かなかった残りのメンバーで結成されたex RAMMERバンド。いぶし銀のDEATH/THRASH健在で、本当に素晴らしいです。10年後に聴いても色あせない本物のアンダーグラウンド・サウンド。

(自主/品番なし)CASSETTE TAPE

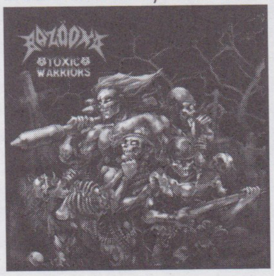
CORONER/Death Cult



私は熱心なテープトレーダーではなかったので噂には聞くバンドの初期音源等を入手するのは至難の業でした。しかしこれがアナログでも聴けるようになりました。HELL BASTARD連のGジャンに一機は輝いていたこのコロナーのPATCHはそういうことか。後期ANTISECT、D・INSTINCTの元ネタ満載。しかもヴォーカルはHELLHAMMER～CELTIC FROSTのトムGなんだから完璧です。こんなの当時テープで入手したら擦り切れるまで聴いたと思います。

(Bootleg/品番なし)LP

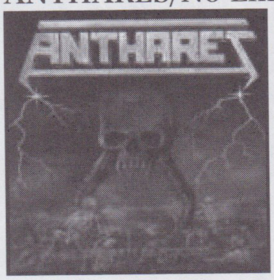
BAZOOKA/Toxic Warriors



台湾MPDS。数年前、台湾のアングラPUNK/METAL事情を尋ねた際、国をあげて3人くらい好きな人がいると言われかなりびっくりしました。んでその3人の内の2人がいるバズーカは初期トキシック・ホロコースト全開のサウンドながらも計り知れない情熱と向上心とともにまだまだ突き進んでいくでしょう。現在ではその3人の布教活動のおかげか台湾にもかなりの数のMetalheads、Punksが存在するらしいです。

(Metal Inquisition/MI006)LP

ANTHARES/No Limite Da Forca



オリジナルがほしいですね。でも中々無いんです。こちらは日本ではお馴染みのFORCA MACABRAの元ネタです。ギチギチギターに熱血なブラジルならではのブラジルTHRASH全開。OTTOは確かANTHARESと名乗ってましたよね？10年くらい前、明け方まで続くOTTOのMETAL話から逃れたくて…(寝たかったので)。けどもうちょっとちゃんと彼の話を聞いとけばよかったです。アナログ盤はDEMO音源も収録。

(Blood & Iron/iron008)LP

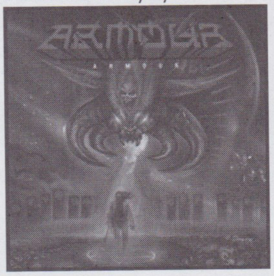
SACRILEGE/Time To Face The Reaper



デモがオフィシャルで出ました。昨今のSACRILEGE旋風はMETALファンに凄まじく浸透してきた＋ベーシストのトニー表舞台復活によるところが大きい。THのJOELも数年前に聴いてビックリしたと言っていたしEFFIGYを見たNUNSLAUGHTERのVo/Don氏もSLAYER!!と言っていましたがソレもSACRILEGEが当時、いかにアンダーグラウンドで最高だったかということを物語っていますね。DISCHARGE＋SLAYER当然の選択！

(Absurd/品番不明)CD

ARMOUR/s/t



このアーマーが自国じゃあナショナル・チャートに入ってるって聞いたんですけど本当ですか？たしかにナショナルな人がやってますけど。ジークハイル。本作品は本気か?!冗談か?!以前のものより、より80年代METALに愛情を注いでいますが、そんなに複雑なイメージは無く、クセは存分にありますが、わりとすんなり聴けます。あっっ、ソレが一般的にも受けてきた要因か。USプレス盤もこれから出ます。

(Primitive Reaction/PR 029)CD

CRUEL FORCE/The Rise Of Satanic Might



若手ジャーマン・スラッシュ。私が考えるドイツ・スタイルとは日本ではSABBATが実践してるようにあくまでヘヴィメタルを通過したスラッシュであるというモノ。ソレをヤングマンが全開でDISCHARGEするのだからコレは良い。メンバーのルックス、掲載された写真の色に至るまで全てがジャーマン・スタイルで最高。この先、色あせること無いGREAT New Vinyl！

(Heavy Forces/003) LP

CONVULSE/World Without God



フィンランド・デスメタル、92年リリース1stアルバムに、90年発表の1stデモ音源とVENOMカヴァー等もやってるライヴ音源をボーナス収録した16曲入り。コレは確かに名作ですね。そして一般的にも日の目を見ない要素満載、フィンランドDEATH特有のドゥーミーなタイプで、際アンダーグラウンド臭が凄まじく、UK DEATHに慣れている人にはキツイかも。DEATH創世記からのレーベルRelapseがなせる業の再発盤。

(Relapse Japan/YSCY1172)CD

ACID/Live in Belgium '84



METALテープトレーダーの間では有名な84年のグレート・ライヴ音源、アナログ盤に続くPIC再発盤。通常アナログ盤も勿論買いました。DISCHARGE、MERCYFUL FATE、ACID、AMEBIXって書いてあるものは何でも買いたいのです。2バスドコドコ、MOTORHEADにキュート女性Vo。まだACIDを聴いたことの無い人はとりあえず"ACID"と書いてある音源を入手してください。何を聴いてもかっこいいですから。まずはそこから！

(Maniacal-Femetal/FEL007)PIC LP

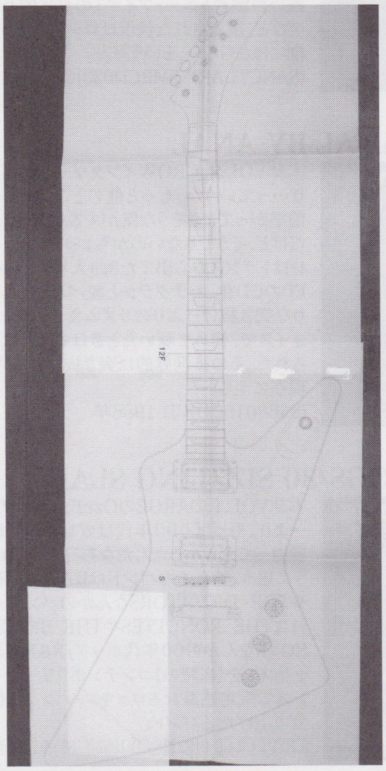
Making Some Cool Noise 非音楽を作るための音楽談義

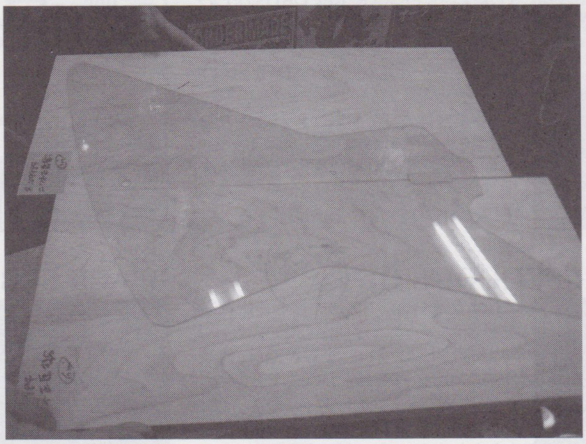
オーダーして前金を払い一ヶ月余り経ち、未だ何故かのこの罪悪感。この不景気にギターなど無理して買って良かったのであろうか？なぜ?!大人になるってイヤですね。I don't want grow up!!けど大人にならなきゃギターなんて作れないよなー。と通勤時間に毎日考えています。今回は図面確認、材選び！

1月初旬

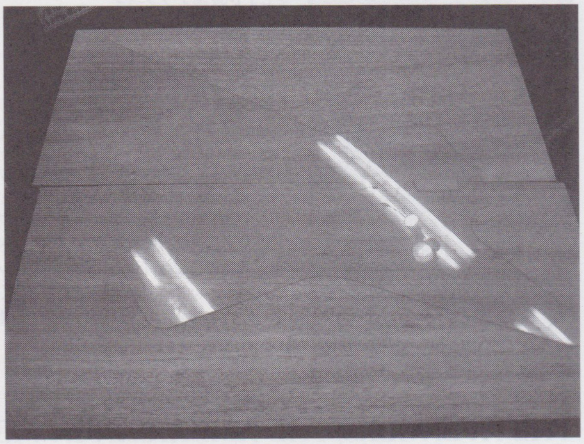
図面が出来たとの連絡を受け、再び店に出向く。三面図で見れるのかと思っていたが、等身大の正面図のみ。なのでボディ厚の指示は口頭で行う。今回、メイプル材をTOPに5mm張りして貰うので、一般的なボディ厚に対し＋5mmにするのか、込みで行くのか？など正直あまり考えていないことを質問され、「いつもの感じ」などととっさに適当に答え、「え?!」との返しには「通常仕様で」とクールに答えたが、先に述べた通り本人(私)は何のこっちゃ解っていない。アドバイザー様、様様である。有難うございます。

以下、図面。シェイプは標準のEX。バインディングとザグリ位置くらいの確認をした。





メイプルTOP材。2Pは真ん中で張り合わされる。
3Pの場合は左上の先端部分が付け足される感じになるらしい



マホガニーBACK材。これも真ん中で合わさる

2月上旬

材選び、エクスプローラーはボディが大きいので材を取り寄せてもらった。一般的には3Pになる場合が多いらしいが、今回は2Pでお願いした。BACK材のマホガニー、TOP材のメイプル（ハードメイプル）共に2P。1Pオーダーも出来るとの事だったが値段が……。

良い木材の条件とはまず見た目に目が詰まっているということらしい。なんとなく言葉からは解るが悪いモノと比較はしていないので正直よく解らないが今回使用する材は確かに"目"が詰まっていた。TOPに張る材はギターを弾いているものなら一度は聞いた事があろう"トラ目"にするには、上下の柄があうような材を選ばなくてはいけないのでそれなりの値段が加算される。今回はTOPのカラーはゴールドなので余り気にしないで良いと伝えた。あとは木を実際に叩いてみて響きのあるものが良いという当然のことらしいがばっちり叩くと響いていた。この辺は正直、クラフトマンとアドバイザーを信用するしかない。何遍も通い、信頼関係とその違いを理解する努力が必要かな。

というようなワケで今回、加工まで行きたかったが締め切りが来て間に合わなかった。

今回の記事で初めてギターのボディ材が張り合わせて作られているということが解った人もいるだろう。勿論、文中でも述べたがお金を出せば一枚の木から削りだして作ることも可能。形やメーカーまで同じなのに値段がピンきりな楽器があるのはこういうわけなんです。とことん安いギターってありますよね？ソレは一軍の楽器を作った削りカスを集めてそれをこねてギターの形にしたりして安く出しているんです。割り箸戦法!!似たような話でよくプロが海外で9ヶ月レコーディングした。なんてのがありますが、昨今の日本ではそんなことは無いでしょうが昔は演歌をレコーディングしていた人がROCKもやっていたんです。なので海外の解っているその筋のプロにお願いしに、海外でやるわけです。俺もマイクストーンにプロデュースしてもらいたい！という様な感じで。

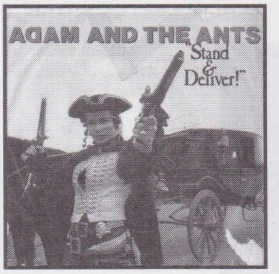
つづく

LASHING SPEED DEMONS VOL.5

TEXT:大越よしはる

前々回サイケ、前回メタル、と特集してきましたが…それにしても、本誌の記事をあちこちつらつら読んでいて、ハードコアというものが本当に様々な影響や関連から成り立っていることに、今更ながら気づかされる部分が多い。そこで今回は、本誌の記事やインタヴューを読んでいて、そこで名前が挙がっている影響源や、あるいは単に好きなバンドや…といったところを拾い上げて、紹介することにした。初期パンク系のバンドが多いかと思ったら、予想以上に雑多な顔触れになった。ともあれ気になるところがあったら、是非チェックしてみてください。

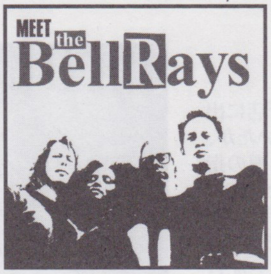
ADAM AND THE ANTS/Stand & Deliver!



まずはいきなり"蔵出し"の1枚を。本誌VOL.1より、PRANK RECORDSのケン・サンダーソンが入れ込んでたのはこのバンド最大のヒットであるこの曲の頃だろう(ちなみに多分俺が初めて買った7inchがコレだったりする)。パンクとグリッター・ロックを合体させて海賊ファッションでプレイするというのはちょっとしたエポックだったと思う。後に精神を病んだというが、復活は…?

(EPIC AE7-1236)7" 1981年

THE BELLRAYS/MEET THE BELLRAYS



本誌VOL.0、"CHAOS IN TEJAS"のレポートより。ハードコア以外にもいろんなバンドが出てるんだなー、ってところで西海岸のガレージ・ロッキン・ソウル・ダイナマイトな4人組。素晴らしくソウルフルな黒人女性ヴォーカルがデトロイト直系の爆裂サウンドに乗っかってて、えらく濃いバンド。この編集盤が出た頃に来日も果たしていて、ライヴもそりゃもうカッコ良かった。

(EPIC EICP52)CD 2002年

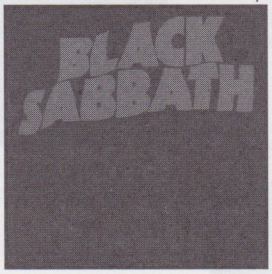
ALICE COOPER/SCHOOL'S OUT



7inchを聴いてアリスに開眼した山路編集長から「アルバムは何から聴いたらいいですか?」と訊かれた。まあ普通は、代表作のコレだろうか。以前DOLLでも書いたが、いわゆるデトロイト・ロックのエッセンスを凝縮してシアトリカルに、かつ子供にもわかりやすいポップさで再構築して、このバンドは時代の寵児となった。フランク・ザッパのレーベルにいた初期のアヴァンギャルド路線もイイです。

(WARNER 7599-27260-2)CD 1972年

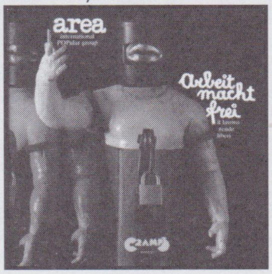
BLACK SABBATH/MASTER OF REALITY



MOONLESS他、いろんなバンドのフェイヴァリット。今更とは思うがこのバンドを抜きにして後のエクストリーム・ロックの存在は考え難い。1stも2ndも名曲ぞろいだが、この3rdアルバムはそれまで以上にトータルな作品としての完成度が高く、特にお勧めな1枚だ。オジー・オズボーンの狭い声域やトニー・アイオミの身体的ハンデなど、限定された状況はロックにおいて枷にはならない、という証左。

(SANCTUARY SMRCD033)CD 1971年

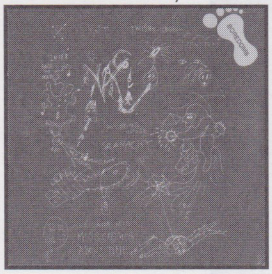
AREA/ALBEIT MACHT FREI



本誌VOL.3、KALASHNIKOVインタヴューより。昔のイタリアン・プログレなんて、当のイタリア人はもう聴いちゃいないだろうとか思っていたが、そうでもなかったか。バリバリの左翼アナーキスト連中による反骨精神と地中海特有の超絶変拍子&超絶技巧による胸やけしそうな変態ロック。プログレファンにだけ聴かせておいていいバンドではない。BOREDOMSにも影響したらしい。

(CRAMPS CRSCD001)CD 1973年

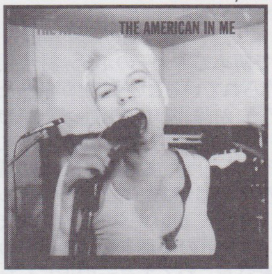
BOREDOMS/ANAL BY ANAL



本誌VOL.2、CROWインタヴュー前編より…っていうか、もっと他のところでも名前挙がってよさそうな気がするバンドなんだけど、そうでもないのがちょっと意外。コレはトランスから出てた3曲入りデビューEPのCD化。ハナタラシと較べるとあんまりな突き抜けっぷりのリズム&ノイズ&ヴォイスで、初めて聴いたときはあっけにとられた。その後世界的に突き抜けまくって現在に至る。

(SSE8015CD)CD 1986年

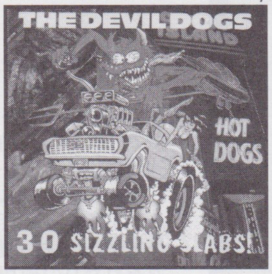
THE AVENGERS/THE AMERICAN IN ME



本誌VOL.0より、LIFEのABE氏が一番好きな女性ヴォーカルのパンク・バンド。初期は少年みたいなルックスのペネロープ・ヒューストンだけど、歌は全然男勝りな感じじゃないのが却ってイイ感じ。コレは79年6月13日のラスト・ライヴを含むライヴ音源に、スティーヴ・ジョーンズがプロデュースしたセッションのアウトテイクとかも収録の編集盤。歌も演奏もとにかくハイテンション。

(DBK WORKS dbk109)CD 2004年(78～79年録音)

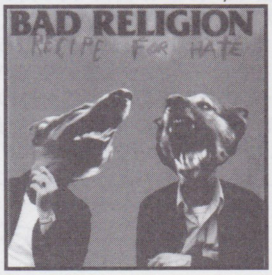
THE DEVIL DOGS/30 SIZZLING SLABS!



本誌VOL.1、DARGEのOze氏インタヴューより。やっぱり90年代はガレージの影響力って大きかったんだなあ、と今更のように思う。特にこのバンドはRAMONESやTHE DICTATORSなんかのパンク、それにTHE RONETTESやTHE BEACH BOYSなんかの60年代ポップ/R&Rのエッセンスを(当時の)コンテンポラリーなセンスで疾走感溢れるロッキン・パンクに仕立て上げた名バンド。

(CRYPT CR-CD-0192228)CD 1992年(89～91年録音)

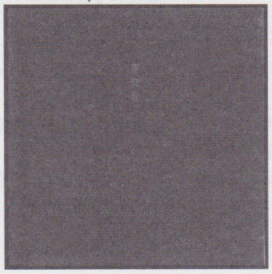
BAD RELIGION/RECIPE FOR HATE



"メロディック・ハードコア"といっても、個人的にはメロコアといわゆるハードコアは別モノ、という認識だったんで、本誌で実にいろいろなバンドがBAD RELIGIONのことを口にするのがかなり意外だった。ともあれ確かにひとつのエポックを創り上げた存在だと思う。実際本作の「American Jesus」は俺にとっても93年のベスト・チューンのひとつ。東欧の民謡みたいなメロディがたまらん。

(ATRANTIC 7 82546-2)CD 1993年

不失者/悲愴



本誌VOL.1、ゴウジロウ氏のインタヴューより。"「本当の現実はこうなんだよ」というものをリアルに提示する"というゴウ氏の一言は、不失者…というか灰野敬二の音楽の本質を実に的確に表現していたと思う。コレは、不失者の(確か)4thアルバム。灰野敬二の作品中でも比較的フツーにロックっぽい…というか、よく"ノイズ"という言葉が付いてくるんだけどこの人ノイズじゃないでしょう。

(PSF PSFD-50)CD 1994年

GIRLSCHOOL/THE COLLECTION



本誌VOL.2、SONIC RITUALのインタヴューより。アメリカのTHE RUNAWAYSと並んでハードにロックする女性バンドの草分けとなり、全然ガールじゃなくなった今も現役で活動して時々ちゃんとアルバムも出してる偉大なオリジネイター。コレはCD2枚組でガッツリ聴けるお得なベスト盤。初期の曲はシンプルなハードR&Rばかりで、今改めて聴くと凄くパンクっぽく聴こえるものも。
(CASTLE MUSIC CMDDD014)2CD 2000年(79〜88年録音)

SCREAMING LORD SUTCH/LORD SUTCH AND HEAVY FRIENDS



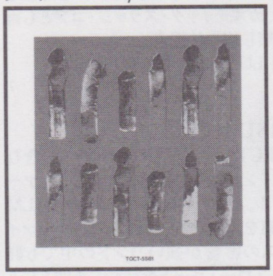
本誌VOL.1、MOONLESSのインタヴューより、トマス(Ds:元GORILLA ANGREB)のお気に入り。コレはロード・サッチの1stアルバムだが、彼のキャリアは50年代末まで遡る。ここではジミー・ペイジ他ブリティッシュ・ロックの錚々たるメンツをバックに、リトル・リチャードあたりを完全に間違った方向で解釈した(笑)サッチの野獣のようなヴォーカルが炸裂。実に素晴らしい。お勧め。
(VIVID VSCD2103)CD 1970年

GURU GURU/UFO



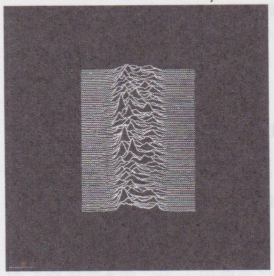
本誌VOL.3、CROWインタヴュー後編より。70年代ジャーマン・ロックの中でもフリー・ジャズ的暴れまくりで知られるバンドだが、1stアルバムは超絶技巧よりも鉛か水銀みたいな重さが前面に出た、一種の元祖ヘヴィ・メタル。スペーシーかつ重過ぎて飛びそうにもないUFO？…で、四方八方にヘンな電波がトンでいる。キテレツなロックを知る上で、80年代のFOOL'S MATE誌は本当に参考になった。
(CAPTAIN TRIP CTCD-625)CD 1970年

タイマーズ/タイマーズ



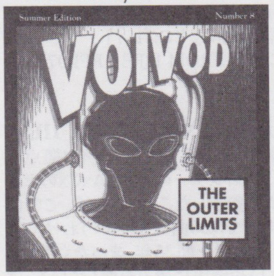
本誌VOL.3、「THE THUNDERBOLT」より。忌野清志郎のお葬式には行けなかった俺だが、参列した某友人からは「○○○(いわゆるジャパコアの人)も来てた！」みたいな報告多数。清志郎の存在はパンクとかも飛び越えて、何処までも限りなくロックであったことよ。それにしても…RCサクセション時代に放送禁止とかあったのに、この内容でメジャーから出るとは…尖ってます、とても。
(東芝EMI TOCT-5581)CD 1989年

JOY DIVISION/UNKNOWN PLEASURES



本誌VOL.2、EPIDEMICSのインタヴューにもAMEBIXの記事にも名前が出てくるという凄い存在感。初期パンクとは別のやり方でテクニックの欠如を逆手に取った、シンプル極まりない演奏、そしてそこに乗っかる暗黒モノローグ…まさにポスト・パンクの祖ともいうべきロック界の黒い金字塔なバンドだが、何といってもイアン・カーティス(Vo)の人生がハードコア、というか…。
(ワーナーミュージック AMCE6108)CD 1979年

VOIVOD/THE OUTER LIMITS



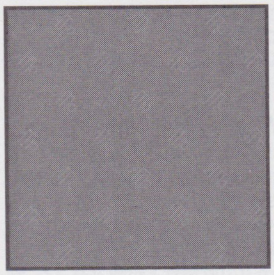
本誌VOL.2、IRON LAMBのインタヴューより。時期によってまるっきり音楽性が違うんだが、それなのに全部ちゃんとVOIVOD印、という稀有なバンド。プログレやサイケ的な方向性を前面に出したこのアルバムの頃は、VENOMやDISCHARGEの影響丸出しな初期のグチャグチャ加減は皆無…なのに、凄まじくとんがった、かつ気持ちイイ音の洪水。真の"インテレクチュアル・スラッシュ"。
(MCA MVCM-391)CD 1993年

KISS/ALIVE!



あちこちで名前が出てくるのはまあ、当然か。遊園地のアトラクションみたいなわかりやすいエンターテインメント・ロックは実のところパンク的なアティテュードとは真逆だが、ヴィジュアルがこれだけ悪魔的なイメージなのにスターになってしまった、やっぱりただ者じゃない人たち。何より初期のシンプルでスカスカなハードR&Rが音楽面でパンク以降のロックに与えた影響は無視出来ない。
(CASABLANCA 822 780-2 M-2)2CD 1975年

YELLOW MAGIC ORCHESTRA/UC



ルーツとかバックグラウンドとか言う以前に、世代によっちゃ誰でも聴いていただろう、という存在だが、VEKTOR(本誌VOL.2)みたいに今もって好きだという人たちがいるんだから、侮りがたい。音楽以上に、コンセプチュアルな全体像の在り方みたいな部分で後への影響は大きいかも。35歳以下の人だとちゃんと聴いてない人の方が多いと思うんで、機会があったら改めて聴いてみてほしい。
(GT music MHCL295-6)2CD 2003年(78〜93年録音)

MASTODON/CRACK THE SKYE



本誌VOL.3、THE ASSASSINATORSインタヴューより。某誌で"METALLICA meets RUSH"などと評して面白がっていたら、今やそんなもんでは済まなくなった大躍進ぶりのバンド。ブラン・デイラーの超叩きまくりドラムに代表される超絶アンサンブルと哲学的でさえある歌詞による、大作志向の混沌プログレッシヴ・メタル。元TODAY IS THE DAYの…とかいう枕はもう不要だな。
(ワーナーミュージック WPCR13301)CD 2009年

X/LOS ANGELS



本誌VOL.0、UTOPIAのインタヴューより。日本の某バンドに"JAPAN"と付けさせることになった、LAの巨星。カントリーとかのルーツ・ミュージックが香るパンク、というワケでDEAD KENNEDYSなんかに通じるものを感じるし、一方で後のオルターナティヴの先駆みたいな部分も大きく、懐の深いバンド。プロデュースはTHE DOORSのレイ・マンザレクで、オルガンで演奏にも参加している。
(SLASH/RHINO 8122-74370-2)CD 1980年

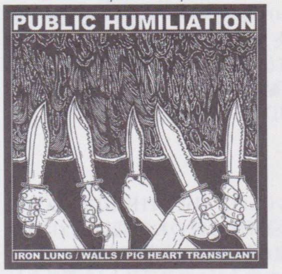
…予想外にメタル系が多くなったが、前号で特集したメタルとはまた全然違った顔触れになっている。俺が"EL ZINE向け"と考えていたメタルと、"現場"の人たちがプッシュしてるメタルというのも、また少し違っているというワケで(サイケもまた然り)。ハードコアやスラッシュそのものを理解する上での参考になったりはあんまりしないと思うが、いろいろな音楽がちょっとずつズレながら実はつながっている、というのは見えてくるような、そうでもないような(どっちだよ)。

KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

ほぼすべてが2009～2010年のリリース。今動いているバンドに重きを置いているから本当は新録盤ばかりにしたいのだが、リイシュー盤もレア音源ものばかりだし、あまり知られてないバンドだったり不当過小評価なバンドだったりもするから良かろう。7"レコードは簡単に入手できないものも多いが、すべて国内のレコード店で購入。例によって限定300枚未満と判明しているものは外してある。

IRON LUNG/WALLS/PIG HEART TRANSPLANT/Public Humiliation



米国の3バンドのメンバー6人による2008年のライヴ。各々の曲の他にオリジナル・ナンバーとBIG BLACKの「L-Dopa」のカヴァーをやっている。2000年代のパワー・ヴァイオレンスの総決算の凄まじいヘヴィ・ハードコアだが、当日のフライヤーのデザインから察するに"BLUE CHEERとBLACK SABBATHの交わり"を意識した如き、カオティック・スラッジ・コアとも言える底無し沼の壮絶盤。

(IRON LUNG LUNGS-008)LP

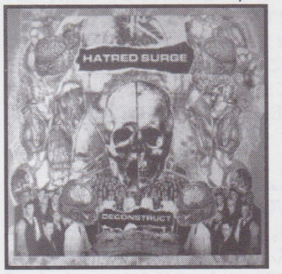
LINK/RAISED BY DRUNKS/split



欧州ハードコア・パンク・スプリット盤。ベルギーのLINKは"HIS HERO IS GONE meets 前期ANTISECT"といったクールなサウンドの中から男女ヴォーカルが湧き上がってきて、特に女声は心臓に響く渾身の2曲だ。スウェーデンのストックホルムのRAISED BY DRUNKSはツイン男性ヴォーカルだが、劇的かつ強引に音をねじこみ、今年頭の解散もうなずける短期決戦の凄まじい4曲である。

(BOMBS AWAY/MY DISROY/RATAS DEL RADIO/ANARKOPUNX/HALVFABRIKAT SW029/DY01/RAT07/HALVEP038)split 7"EP

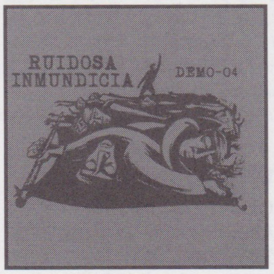
HATRED SURGE/Deconstruct



元INSECT WARFAREのベースを含む男女ツインvo体制のテキサス産のファースト・フル。バンド名の元ネタのNAPALM DEATHをルーツとしつつ、パワー・ヴァイオレンスの影響が強いバンドの中でも群を抜く。スロー・パートを活かした曲もしっかり作られ、痛みを感じさせる音に打たれ、女性ヴォーカルがナチュラルなのもポイント。政治を絡めつつ甘えがなく狂気が漂う歌詞も生々しくてグレイト!

(RESCUED FROM LIFE RFL076)LP

RUIDOSA INMUNDICIA/Demo-04



南米チリ出身の女性ヴォーカルを擁してオーストリアを拠点にするハードコア・パンク・バンド。これはファースト音源である2004年のデモをレコード化したものだが、やはり最初のレコーディング作品は前進あるのみで問答無用なのだ。うなりを上げるスペイン語スラッシュ・パンクにメロディアスなユース・クルー系の影も見え隠れし、まさに喉を振り絞る女声シャウトに男声がバッキングし骨太で強力。

(WAY BACK WHEN #19)7"EP

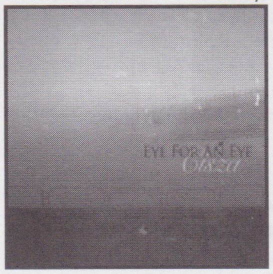
SEVEN MINUTES OF NAUSEA/Non Exact Info



オーストラリア出身で現在はドイツ拠点のノイズ・グラインダーの老舗。AxCxのセスがドラムで参加したこともあるが、これは"自己申告"で320曲入り。というわけで真性"ノイズコア"一筋25年、まったく変わってない。いや確実に凄みを増している。けいれんサウンドと独り言ヴォイスの瞬間芸の連発は誰にでもできそうでマネできぬ。ドーナツ盤という体裁も泣かせる。一曲一行の歌詞カード付。

(NOISECORE RESISTANCE NON EXACT INFO 1)7"EP

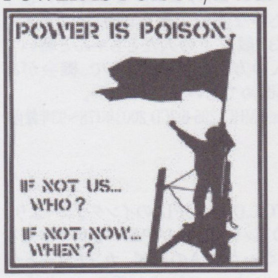
EYE FOR AN EYE/Cisza



ポーランドの"オールド・スクール・ハードコア・パンク"バンドによる2008年の4作目。YOUTH OF TODAY系のユース・クルー流れのメロディックな音で"ありがち"な方向性だが、驚異的なほど新鮮に聴かせるのは楽曲の工夫に加えて気持ちがrawだからであり、自国語で綴る歌心と気迫に満ち満ちた女性ヴォーカルに打ちのめされる。オマケのテクノなリミックスは愛嬌だ。LPは別ジャケ。

(PASAZER No Number)CD

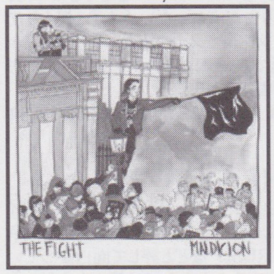
POWER IS POISON/If Not Us…Who? If Not Now…When?



アナーコ・パンク・バンドを標榜するオランダのバンドだが(歌詞は英語)、音楽的にはプリミティヴなハードコア・パンクというアンバランス感で迫る6曲入り。CONFLICT以降の直接的な政治性とEXPLOITEDあたりの直情性とが噛み合った、胸ぐら鷲づかみのサウンドだ。捕鯨船をヤる団体シーシェパードの歌はナイーヴで独善性も感じるし全体的に素朴でナイーヴだが、確信に満ちた勢いは捨てがたい。

(BONG/CHAOS ALLIANCE/PUNK'S SHADOW/DETEDTA/SVOBOD/TANKER No Label)7"EP

The FIGHT/Maldicion



女性ヴォーカルがフロントに立つポーランドのハードコア・パンク・バンドのファースト・アルバム。メロディアスに疾走する激情(≠エモ)サウンドも"怒りと葛藤で震えるNO VALUE"と言うべきスクリーム歌唱も気合十分に迫り、後半の長尺ナンバーで懐の深さも覗かせる。政治的な英語の詞と併載された内容解説も視野が広く思慮に富み、ジャケやインナーのアートワークも味があって見とれるばかりだ。

(BLINDED/PHOBIACT/IN MY HEART EMPIRE BR-004/PR-005/IMH-031)LP

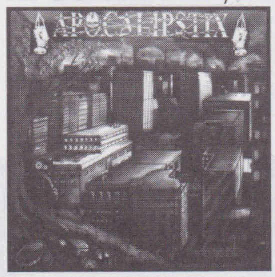
KNUSTE RUTER/Var Det Bare En Logn E.P.



ノルウェーのハードコア・パンク・バンドの6曲入りデビュー盤。ドラマーはダークネス・バンドのHEVNでも叩いている人だが、こちらは80年代のヨーロピアン・メロディック・ハードコアの伝統を受け継ぎつつ、引っ掛かりまくるサウンドで走る。適度にメタリックなエッジの効いたギターと母国語(英訳付)が強烈な野太いヴォーカルが耳に残り、アレンジ・センスも良し。ポスター・ジャケット。

(SJAKK MATT PLATER No Number)7"EP

APOCALIPSTIX/EAT YOUR LIPSTICK/split



こちらも女性ヴォーカル擁するドイツのメロディック・ハードコア・パンク・バンド同士の一枚。元LOST WORLDのシンガーを含むAPOCALIPSTIXは"Lost Exit……Suicide?"と題し、しゃがれ声が凄みたっぷりで押しが強く粗削りの音に持っていかれる。EAT YOUR LIPSTICKの面は"Love Me"と題され荒いヘヴィ・グルーヴも取り込んだ。共に重厚な画の二つ折りジャケにもキャラがよく出ている。

(MANIAC ATTACK No Number)split LP

OK?/This Is Only A Test



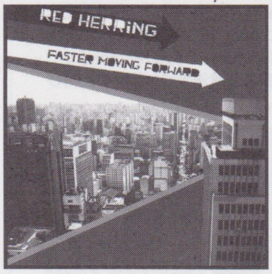
米国サンディエゴを拠点にするバンドの2枚目の7"盤。ジャケットや歌詞カード、ギターのカッティング、言葉数が多い点などCRASSからの影響を意識的に表している。けどいい意味で現代的なのが良し。ピュアな女性ヴォーカルをはじめとして、90年代のメロディック・パンク以降の感覚だし、B面の曲はCONFLICT風。ポリティカルを売りにせず人間関係の中の政治性が匂う等身大の歌もリアルだ。
(LIFE'S A RAPE No Number)7"

V.A./Umea Vraljazz Giganter



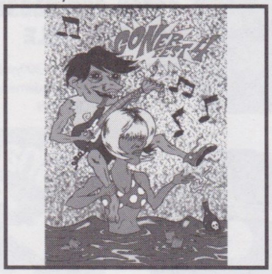
スウェーデン北部の地方都市ウーメアの現行パンク・バンド12組収録。INVASIONEN、BOMBETTES、KNUGEN FALLER、AC4、REGULATIONS、MASSHYSTERI、BROTTSVAGらが未発表曲中心に1〜2曲提供した。TRISTESSによる「Born To Be Wild」のカヴァーも含めて自国語の響きも拍車を掛けたローカルな匂いに痺れ、"俺はパンクだぜ!"みたいに妙な気負いゼロのすっぴんの音がみな最高だ。
(NY VAG #I20)CD

RED HERRING/Faster Moving Forward



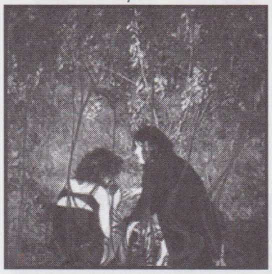
元HARUM SCARUMのメンバーを含む女性ヴォーカルのトリオのファースト・アルバム。バンジョー、ドラム、チューバという特異な編成ながら、チューバがベースの音域を担って中低音も申し分なし。RAINCOATSのような切ない曲だが、十二分にパンク・ロックと言えるアップテンポの意志のある音に打たれる。米国ポートランドが拠点だが、いわゆるPDXシーンとは一線を画す独自性も素敵だ。
(TOFU GUERRILLA/IRRK No Number)LP

V.A./Goner Fest 4



米国メンフィスのゴナー・レコードの2007年フェスの模様を、1バンド1〜2曲で37曲入りDVD+別内容で23組入りCDに収録。2010年1月に急逝したジェイ・リータード、CARBONAS、HEX DISPENDERS、BUSY SIGNALS、GENTLEMAN JESSE、OKMONIKSなど、現在進行系のパワー・ポップ/ガレージ系中心のロックンロール/パンク・バンドが登場する。特にDVDは発見多々で新鮮。
(GONER 45GONE)DVD+CD

DADFAG/Scenic Abuse



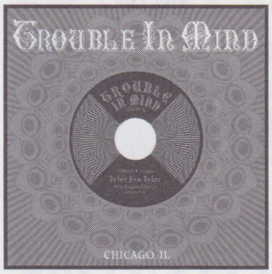
ヴォーカル/ギターとベースが女性、ドラムが男性のサンフランシスコ産のファースト。キム・ゴードンが歌う時のSONIC YOUTHとTEENAGE JESUS and The JERKSと初期Siouxsie & The BANSHEESが混ざったようなサウンドだが、ポスト・パンクと呼ぶには生々しすぎるパンクっ気だ。ヴォーカルもフリーキーで歌い舞い、暴走する響きは神経を引っかく。わざとらしくなくナマだから要注意。
(BROKEN REKIDS SKIP114)CD

DRY-ROT/Philistine



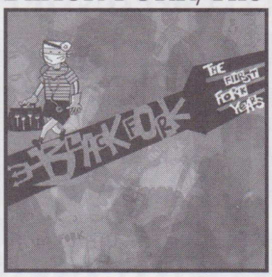
カリフォルニアの兄弟が中心のバンドのファースト。全14曲のほとんどが2分以内のハードコア・パンクだが、かなり素晴らしい真性の変態ぶりを発揮する。SACCHARINE TRUST(ドラマーかゲスト参加)などのSSTレコードのバンドのほこりっぽさ、VOIDや初期DIE KREUZENの脱臼感、BRUTAL TRUTHの雑食性で、試合放棄寸前の奇形サウンド全開だ。ジャケ同様に怪しい画のポスター封入。
(PARTS UNKNOWN PUR-43)LP

TYLER JON TYLER/New England Street



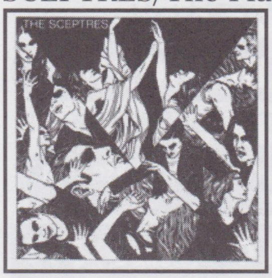
DAILY VOIDのメンバーがドラムを叩くシカゴのトリオのデビュー・シングル。キル・ロック・スターズ・レコード周辺のインディ・ロック・フィールドで注目を浴びそうな音だが、パンク・ロックを媒介にした"RAINCOATS meets SLEATER-KINNEY"と言うべき、まっすぐでピュアな歌と音に心がとろける。フェチ心をくすぐる2曲入りのドーナツ盤の簡素スリーヴでダウンロード・クーポン付。
(TROUBLE IN MIND TIM 007)7"

BLACK FORK/The First Fork Years



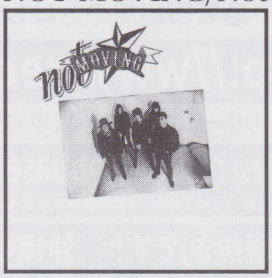
90年代半ばに活動していた米国ベイエリアのパンク・バンドの、ビリー・ジョー(GREEN DAY)録音の4曲を含むレア音源集。女性ヴォーカルという点でBLATZの流れもくむが、天然ノイズが飛びまくる怖いもの知らずの生硬なハードコア・パンク・ロックが炸裂し、RAMONES〜GERMS直系のポップ感もあり、MOTORHEADのベタなカヴァーもイケるのだ。おちゃめで痛快。再編してライヴもやっとる。
(MESS ME UP MMU001)LP

SCEPTRES/The Flatline Generation



SHTTY LIMITSのメンバー在籍とはいえ速い音とは一味違う、女性ヴォーカルが歌うバンドの2枚目の7"盤。70年代後半のLAパンク、RIP OFFS周辺のバンド、キル・ロック・スターズ周辺のバンドの密会の如き微妙なさじ加減がたまらない。イギリス産ならではの湿り気で突き放し、あっというまに終わって途方に暮れる密かな快感を約束するパンク・ロック・シングルならではの2曲入りドーナツ盤。
(DIRE DR006)7"

NOT MOVING/Not Moving

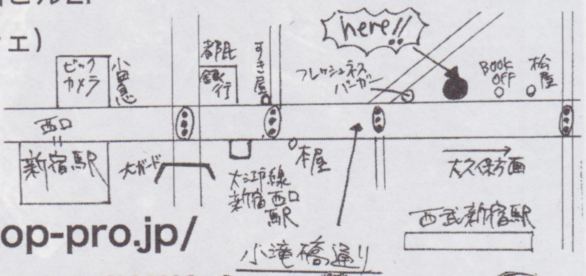


英語で歌う女性シンガーとキーボード奏者を含み80年代半ばに活動していたイタリアの"サイコ系バンド"の24曲入りの編集盤。CRAMPSとGUN CLUBからの影響の妖しく艶めかしくダークな色を演出した音だが、80年代前半のポジティヴ・パンク/デス・ロックの香りも漂い、ハードコア・パンク風の速く激しい曲も織り交ぜた混沌の音楽性が愛おしい。英文ライナー封入の二つ折り紙ジャケット仕様。
(SPIT/FIRE／SPITTLE FIRE501)CD

<追伸>　いつも多めだが、今回は気がついたら女性ヴォーカル入りが大半のセレクションになってしまった。たとえありふれているようなスタイルの曲でも男性とセンスが違うのだ。10年ぐらい前だったらニュー・メタル、ここ数年だとアメリカのメタルコアやスクリーモ流れのメンバー全員男性のバンドは、A級の面々は別として硬直化した姿をさらしている。特にヴォーカルは機械的だ。パンク・ロックやハードコア・パンクのバンドもそう思えてきている今日この頃。

NAT records

〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-7-33 新銘ビル2F
(1F うどんの丸亀製麺とコーヒーのヴェローチェ)
Tel: 03-3368-8262 / Fax: 03-3368-8245
営業時間：AM 11:00 〜 PM 9:00 (年中無休)
メール: tokyonat@hotmail.com
ホームページ http://natrecords.shop-pro.jp/



4/10(土)〜5/9(日)までの期間中

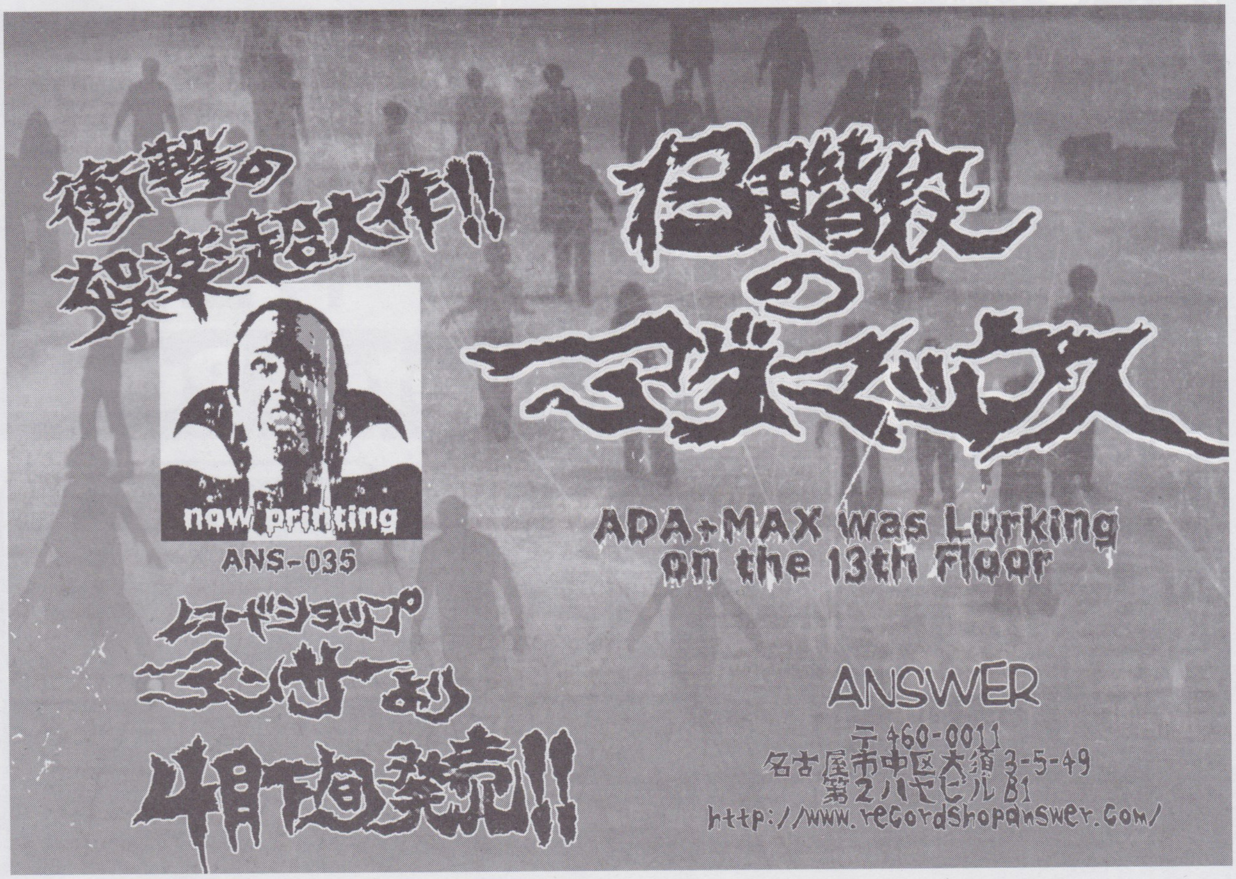


中古アナログ盤買い取り査定20% up!!!

※CD, Tシャツ, 雑誌/ファンジンなども買い取っています(今回の査定アップはアナログ盤のみとなります)。

■通販■ショッピングカート式で簡単に登録可能, ポイント還元サービスもあります。先払い(振込)と代引きがあります。もちろんお電話, FAX, 通常のe-mailでのお問い合わせも可能ですのでお気軽にお問い合わせください。取り置き→溜まったら通販, 取り置き→来店も可能です(取り置き期間1週間 〜 最大2週間)。

自主盤, HARDCORE, METAL, PUNK/POWER POP, PSYCHOBILLY, GARAGE, OUTLAW(辺境, post-punk, noise)



always tedious editor's notes

メタル、というかオカルト/ゴシック雑誌風の表紙にしてみました。面白いかと思いまして。

Vol.0からご購読頂いている方におかれましては、「どうせ次は黒表紙だろ」と予想されていたでしょうから、意表をついてグレーとかカラーに、と考えもしましたが、まぁ、いいか、と結局黒になりました。並べると黒白黒白黒のツートーン、これは反人種差別主義を標榜しているのです!GOOD NIGHT WHITE PRIDE!…という意図は全くありません。何となくやっているだけです。

毎号作ってて思うのは、世界には色んな人がいる、という至極当たり前のことです。ロシア、ブラジル、チェコ、ポーランド、アメリカ、日本、デンマークのバンド/レーベルの方のインタヴューを今回掲載させて頂きましたが、みんなそれぞれ全く異なる環境に暮らしていて、みんな違うことを考えて生きている。それなのに、パンク/ハードコアという音楽、このたった一つの共通項を通して繋がっている。それが面白くてしょうがない。おまけに得体の知れない人間から「インタヴューさせて欲しい」という連絡を受けて、それにちゃんと応じてくれる。ありがたいことです。

僕は新しい音楽を生み出したり、それをレコードという形にしたり、作品を流通/販売したり、ライヴの企画/場所を用意したりという、"直接的な関与"はせずに、ただひたすら本を作っているだけです。なので、核心の部分ではなくその外側から、"ちょっとした楽しみ"を提供出来たらいいなぁ、と5冊目発刊に際して改めて思いました。…明日になったら気が変わっているかもしれませんが(笑)。　発行者　山路健二

次号の発売は5月1日…なのかもしれない　※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

EL ZINE vol.4　2010年4月1日発行　HP・BLOG・MYSPACE・MIXI・TWITTER→NO FUN　E-MAIL→unno13@gmail.com

BACK ISSUES

既刊の4冊をこうして並べると、いかに無節操且つ偏狭(not辺境)なジンなのかがよく分かります。MOONLESSの音源、早く出ないかな…。というわけでVol.2とVol.3は在庫あります。

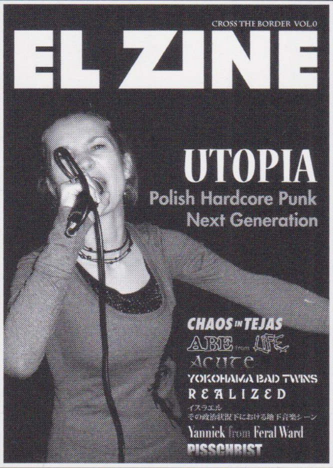
全て500円で全モノクロ、表紙回り含めP60、B5判。お買い求めは以下のお店またはディストロまでお願いします。

直納しているレコード屋さんetc

ANSWER(名古屋)
BASE(東京・高円寺)
BOY(東京・高円寺)
DISK UNION(関東圏)
G-SIDE(浜松/ライヴハウス)
HARDCORE KITCHEN(神戸)
K-CLUB(高知)
KNOX(水戸)
MISERY(広島)
NAT(東京・西新宿)
PUNK&DESTROY(大阪)
TIME BOMB(大阪)
WOODY(新潟/ライヴハウス)

ディストロして頂いている方々

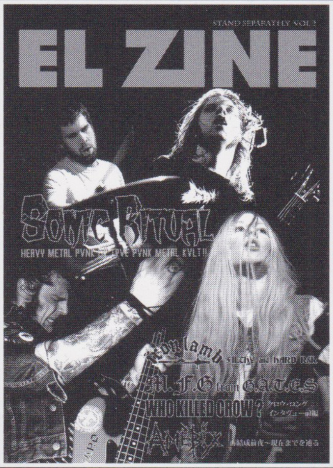
FUJIさん(REALIZED/北海道)
SOUICHIさん(UNDER THE SURFACE/東京)
YUさん(SKIZOPHRENIA/津山)
はっちゃん(BURST HEAD/沖縄)
紺野さん(SPROUT RECORDS/仙台)
ONIGIRIさん(WATERSLIDE/東京)
CR JAPAN(東京)



VOL.0 UTOPIA



VOL.1 MOONLESS



VOL.2 SONIC RITUAL

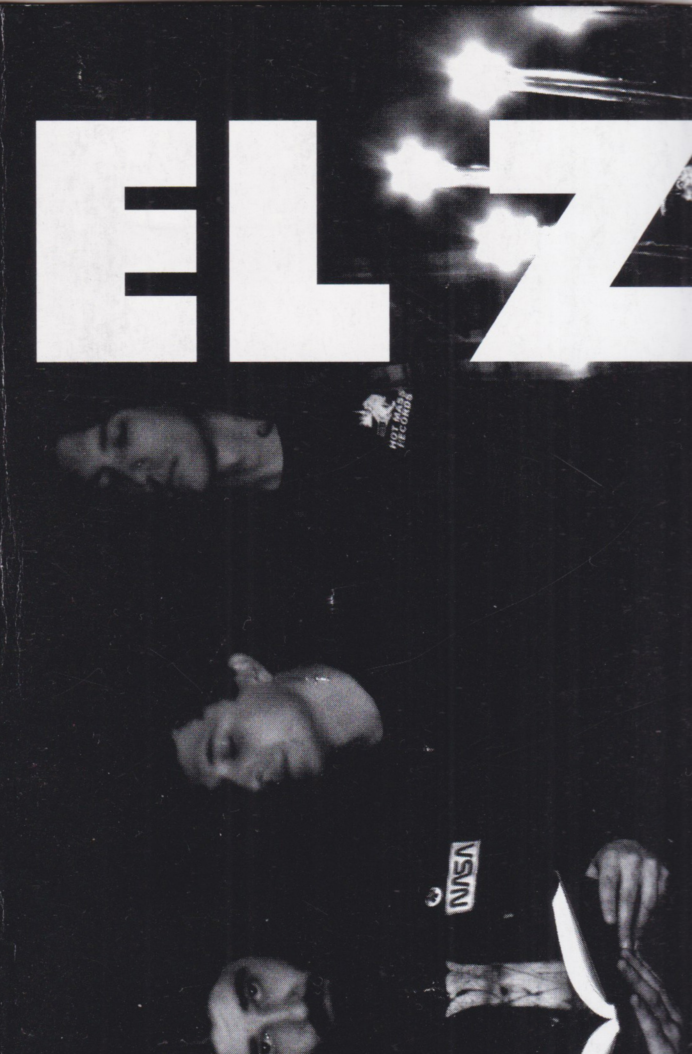


VOL3.KALASHNIKOV



EL ZINE ¥500

EL Z



BLACK BREATH SEXDROME UNBROK

TRUJACA FALA rec ADA MAX ARMA

UMEÅ VRÅLJAZZ GIGANTER BILLY fr

EL ZINE

FIRST CONSPIRACY VOL.4